

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編
慶應三年十二月ノ二

目録

- 新納嘉藤ニヨリ岩下佐次右衛門へ書翰
- 小松帶刀上京御達書
- 池田猪之助書翰
- 京師報告
- 岩下佐次右衛門ヨリ小松・桂ノ両氏へ報告京都ノ形勢
- 京都通信真偽交々
- 京都風説真偽交々
- 伏見巡邏奉命照会

- 伏見巡邏被命ノ照会
- 洛中取締ニ就テ邸中ニ布達
- 御警衛變更
- 山城國中取締被命ノ達書
- 大坂玉造士へ達書
- 大坂在勤木場傳内江戸藩邸焼亡等ノ報告
- 十二月廿五日江戸御屋敷戦争等ノ次第
- 當時江戸邸人名
- 丁卯十二月廿五日江戸芝邸焼亡之事實概略
- 壬生前修理權大夫上京達書
- 少将公至急參朝御召
- 四藩兵隊天覽御達書
- 藩政改革刑法改正
- 帖佐・池田探偵書江戸邸在勤
- 立后冊命御沙汰布告
- 西郷吉之助ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰
- 池田喜平次書翰
- 大久保一蔵ヨリ蓑田傳兵衛へ書翰
- 中原猶介ヨリ岩城喜左衛門へ書翰
- 園田新左衛門ヨリ父母へノ書翰

伊地知左衛門ヨリ同喜十郎へ書翰

西郷隆盛ヨリ蓑田傳兵衛へ書翰

島津家記抄

伊勢仲左衛門書翰ノ内

伏見出兵ノ照会

中将様御召達書

岩下佐次右衛門ヨリ新納刑部へ書翰 白山上坂事件外国布告ノ事

太守公年始御礼参朝御断

原市之進切害一件

久光公御上京布達

五代才助ヨリ桂右衛門へ書翰

伊勢左七郎ヨリ兄へ書翰

長崎奉行ト清国役人トノ往復書翰

大山格之助ヨリ大久保一蔵へ書翰

加世田士指宿静蔵送家書翰

加世田士西剛右衛門送家書翰

市來士高崎半兵衛書翰

加世田士土持雄四郎送家書翰

薩・長・土三藩合議ノ要目

薩・長・藝三藩大議ニ依テ事ヲ挙ルノ旨趣ヲ述タル文
三藩連署建言

五九八 新納嘉藤ニヨリ岩下佐次右衛門へ書翰

徳川内府従前御委任大政返上、將軍職辞退之両条、今般被聞食候、抑癸丑以来未曾有之困難、

先帝頻年被悩

宸襟候御次第、衆庶之所知ニ候、依之被決

叡慮 王政復古・国威挽回之御基本被為立候間、不論

既往更始一新、自今撰関・幕府等廢絶、即今先仮リニ

總裁・議定・参与之三職ヲ被置、万機可被為行、諸事

神武創業始原ニツキ精神神弁、堂上地下別ナク、至当

公議ヲ竭シ、天下ト休戚ヲ同ク可被遊

叡慮ニ付、各勉勵旧來驕惰之汚習ヲ洗、

皇国之為忠誠ヲ可尽候事、

一内覽

勅問御人数、国事御用掛・議奏・武家伝奏・守護職・

所司代總テ被廢候事、

一太政官始追々可被為興候間、其旨可心得居候事、

一 朝廷礼式、追々御改正可被為在候得共、先撰錄・門流之儀被止候事、

一 旧弊御一洗ニ付、言語之道路被洞開候間、見込有之向ハ、不拘貴賤無忌憚可致献言、且人材登庸第一之御急務ニ候故、心当ノ仁有之候ハ、早々可言上候事、

一 近年物価格別騰貴、如何トモスヘカラサル勢、富者ハ益富ヲ累ネ、貧者益窘急ニ至候趣、畢竟政令不正ヨリ所致、民ハ王者大宝百事御一新之折柄、旁被惱

宸襟候、知謀遠識救弊之策有之候ハ、無誰彼可申出候事、

右之通御確定被 仰出候ニ付テハ、六十余州之大小藩ハ申不及、陪從吏卒之末ニ至ル迄、御趣意厚相心得候様、御沙汰候事、

一 御書附写 一通

但徳川内府大政返上・將軍辞退、

朝政御一新ニ付、見込言上等之儀、

右昨十四日巳之刻 太守様へ御参内之旨、御達有之候処、御所勞ニ付、御断被仰上候、然処為御名代、一人可罷出旨、参与御役所ヨリ御呼出ニ付、御使番ヲ以御達ニ付、私被差出候、諸藩早参之者ヨリ、鶴之間へ着

座仕候処、正親町三條前大納言様・萬里小路右大弁〔實徳〕相様・橋本少将様頭之間へ御列席、御書付ヲ以、御達承知仕、拜見之上写取罷帰申候、

右之通私相勤申候間、相添此段申上候、以上、

卯十二月十五日

新納嘉藤次〔立去〕

〔岩下方平〕
佐次右衛門様

五九九 小松帶刀上京御達書

小松帶刀〔備歴〕

今般御改政御一新ニ付、広ク天下ノ人材御登用被為在候、其方兼々被 聞召入儀有之候間、早々登京可致御沙汰候事、

十二月十九日

六〇〇 池田猪之助書翰

去ル九日、被 仰付候御警衛之向ハ、勿論在来御警衛於御場所モ、九門外悉被免候へ共、今度改テ、日御門土州、御台所御門薩州、南門尾州、朔平御門藝州、

右之通御警衛之儀、被 仰付候事、

十二月十三日

夫ヨリ御邸へ引取申候処、今日ヨリ明日迄ハ、救応隊

ニテ在營候様、被仰渡候事、

十五日在營ニテ罷居候処、今晚被仰渡趣御座候、当月

八十七日・二十一日・二十二日・二十三日・二十五日

五度之外、非番ニテ御座候、此節ヨリ改定ニ相成候御

堅場ハ、御台所御門并乾御門、御邸ハ御式台并救応手

トシテ、戎服ニテ在營候様被仰渡候、

一 御所之御書付左之通、

薩摩少将

議定職被

仰下候事、口宣追テ下賜候事、

市中ハ皆此節戎服ニテ、御所御堅之儀ハ、可驚事ニハ

全無之、勿論長州入洛ニ付、無此上モアノ世ニ可反ト

ノ事ニテ、潤ヒ卒申候、私共ニモ

御所内御堅メハ勿論、現事之時御供旁之為ハ、小袴ニ

テ御奉公相勤度段、御所へ入事ヲ恐レ、両三輩ニテ願

出賦ニテ、段々周旋仕申候処、昨日ハ御所御堅メ其外、

黒服合御定ニ候へ共、間ニハ袴ニテ罷出者モ有之候故、

屹ト相改戎服イタシ候様、是迄バツチ不仕立者ハ、差

扣伺候様被仰渡、右式之央恐入事ニテ、終ニ其事モ水

泡ニ相成、此上ハ無仕方、何レ 君命ニ随ヒ可申候、

長藩モ相國寺内宿陣、黒装束自分山笠ヲ冠リ、人数五

百人計リ、蛤御門御堅ニテ御座候、

一 三番隊・四番隊・臼砲隊、今日ハ彦太郎殿ナトノ隊ニ

ハ、伏見之様被張出候、委キ訳ハ不承候得共、會・桑

等下坂ニテ、用心トシテ出張候、

一本長州屋敷ハ、幕ノ歩兵小屋ニ相成居候処、此節上京

之長藩共カ大砲等ヲ押立、右歩兵木屋之様繰入候処、

歩兵ハ数千人之人數、忽チ一言モ不言シテ逃出候由、

其俣長藩ハ右之木屋敷へ在陣候由、九日方ヨリ、歩兵

一人モ町中徘徊等無御座候、二條城モ今ハ拔物ニテ、

却テ下坂之由御座候、會・桑之者共、仕廻料三兩ツ、

ノ由、夫ニテハ仕廻不出来、伏見辺へ狼狽押入ナトイ

タス由、

右之外略文、

卯十二月十九日

池田猪之助

宿許宛

六〇一 京師報告

一 總裁以下已刻參集、卯刻評議之事、

一 参与之儀、自今堂上向上之参与ト称シ、諸藩下ノ参与

ト称シ候事、

大原宰相(重徳)

参与職辞退 聞食候事、

十二月十八日

一 今午刻 御参 内 御断、

薩州

頃日 御変革御混雜之虚ニ乘シ、惡徒横行之間有之候
二 付、洛中洛外巡邏之儀、被仰付候事、

但是迄町奉行取計向之儀為替、当分之処不取敢、兼

テ山城國中取締被仰付置候本田主膳正・青山左京(康祺、贈所藩主)

亮・松平圖書頭江、市中御取締被仰付候、尚又市(信正、丹波龜山藩主)

中見廻之儀、次第不同亀井隱岐守・加藤遠江守・(茲監、津和野藩主)

加藤能登守・小出信濃守・松浦肥前守・植村駿河(明美、水口藩主)

守六藩江、被仰付置候得共、尚又加州・土州・中(高取藩主)

川等江、洛中洛外見廻被仰付候間、此段心得迄ニ

申達候事、

十二月廿日

壬生基修

先年以一族義絶被 仰出候処、今度被止、其儀入洛復

位被 仰出候事、

於官ハ可称前官、尤入洛之上關官之節、追々可被復

候事、

六〇二 岩下佐次右衛門ヨリ小松・桂ノ両氏へ報告

(京都ノ形勢)

十二月十一日迄ノ次第ハ、大略町便取仕立申上置候、
其後十二日徳川内府公・會・桑一同下坂、右ハ下々ノ

処鎮撫出来兼候間、万一於闕下動乱引出候テハ、此上

無申訳トノ事ニテ、為鎮撫致下坂、早速會・桑令帰国、

鎮撫調次第、早速上京トノ事候処、其後モ却テ淀・伏

見辺迄、人数繰出登セ、西ノ宮・兵庫辺へ、若州固メ

人数ヲ出シ、松平豊前守老中格被仰付候間、外々老中

格ノ通相心得候様ニト、於大坂小藩等へ相達候次第、

恭順ノ姿一向相見得不申、右ヲ以テ 朝命御糺明有之

度候得共、第一土因循説ニテ、尾・越ハ勿論、藝モ全

ク土論、切齒ノ至御座候、三條卿ト長州ヲ相待候得トモ、イマタ左右相分リ不申、薩ハ孤立ノ勢ヒニ御座候、堂上モ下ノ処ハ、薩論ニテ候得共、上向ノ処因循ノ姿ニテ、一向埒明不申、漸々責付候テ、一昨二十五日尾・越御下坂相成申候、夫迄ノ処甚六ヶ敷、徳川氏ヲ只今通ニテ(統再夢紀事参看)、朝廷御入費ヲ為差出候様、有之度トノ趣、此方ヨリハ是非御入費ハ、領地不被召上候テハ、条理ニ不叶ト頻ニ申立、漸々半分相連、左ノ旨趣ニ御書付、尾・越迄相下リ申候、

一 辞職ノ儀、被聞召候テハ、前内大臣ト可称事、

一 政權返上ノ上ハ、御用途ノ分領地ノ内取調ノ上、天下公論ヲ以、御確定可被遊候事、

大意右ノ通ニ御座候、日数七日ヲ限り復命ノ筈、夫迄御受無之候得ハ、朝命ヲ以罪名被仰下筈ニ相成居申候、是ニテ黑白相分可申カ、行末ノ処モスラ(帯リナキ方)トハ運兼可申ト、歎息ノ至御座候、

一 十二日参与被仰付候西郷・大久保・私三人、尾ヨリ在(良知)国荒川(賢)甚作・丹羽淳太郎・田中國之輔、越ヨリ中根雪江・酒井十之丞・毛受鹿之助、土ヨリ後藤家二郎・神山左多衛・福岡藤二、藝ヨリ辻将曹外不存候、後日肥(御書)

後ヨリ溝口孤雲・津田山三郎、柳川十時攝津、尾州ノ田宮如雲、是ハ町奉行ノ場相勤申候、越ヨリ三岡八郎ニテ候、十四日宮門御固メ相開、平日通相成申候、外九門ハ是迄通ニテ候、右ニ付テハ、異国人ヘ御布令第一ノ事候間、早々被仰渡候様申出候処、亦々諸藩ヨリ異論申出、終ニ相運不申候、無致方候間、大坂所置形付候上ト申出置、其通ニ相成居申候、

一 伏見ヘ歩兵隊等繰登セ、市中及乱妨候由相聞得、薩・長・土・藝ヘ巡邏被命、二十一・二日比ヨリ繰出、土・藝ハ御断申出候、歩兵モ登リ来リ、千人余モ是迄ノ奉行屋敷ヘ、入込居申候、当分对阵之姿ニテ候、手ヲ出候様子ハ見得不申候、

一 三條卿二十五日御着坂、今日御入洛ノ賦ニ御座候、宇和島候ハ、先日着相成、直ニ議定職被命候事、

一 今日ハ薩・長・土・藝ノ調練、於日御門前 観覧被遊候事、天氣能仕合ニ御座候、

一 参与被仰付候以来、一日モ隙ナク、朝四ツ時分罷出候得ハ、夜五ツ時分通例ノ退出、暮時分退出ハ珍敷候、先日ハ終ニ夜明テ退出仕候事モ有之候、如此隙ナキ物ナラハ、長クハ続不申、御断申上ルヨリ外無之候間、

小松君一日モ早ク御上京被下度、奉懇願候、尤諸藩ニ異論相生シ、土等ヨリ外藩ヲ取込候勢ヒ、薩ヲ孤立セシメ、己カ欲ル所ニ落シ付ントスルノ意、顯然ニ御座候間、一日モ早ク御上京御助力無之候テハ、危ク御座候間、頻ニ願上候、土ヨリ乾退助等引出ス策ヲ働候得共、運ヒ兼申候、肥後ノ津田一向役ニ立不申、奇妙ナル論ヲ致居申候、至斯テモ尊幕説多ニハ困リ居申候、猶細事可申上筈候得共、表通問合等ニ相成可申ト、

大略仕候、先ツ形行荒々如此御座候、近日中大坂形勢相分可申候間、早々飛脚差立申上候様可仕、只今ノ処ニテハ、何モ見当付不申候、乍序時下御伺歳暮御祝儀等、取交申上候、謹言、

十二月二十七日認 岩下佐次方平右衛門

桂久武右衛門様

小松帯刀様備前

六〇三 京都通信（真偽交々）

臣慶喜

不肖ノ身筋力ヲ、從來奉蒙無限ノ寵恩、恐感悚戴ノ至ニ不

奉堪、乍不及夙夜不安寢食苦心焦慮、宇内ノ形勢ヲ熟察仕、政權一ニ出、万国並立御國威相輝候様、広ク天下ノ大儀ヲ尽シ、微衷ヨリ祖宗繼承ノ政權ヲ奉還、同心協力政律御確定有之度、普ク列藩ノ見込承尋ノ趣建言仕、猶將軍職御辞退モ申上候処、召之諸侯上京衆議相決候上、是迄ノ通可相心得旨、

御沙汰候付、右參着ノ上ハ、同心協力天下ノ公議与論ヲ採リ、大公至平ノ御規則相立度奉存候外、他念無之、鄙衷不空ト感戴仕、且夕企望罷在候処、豈計哉、今度臣慶喜合顔末ノ御沙汰無之而已ナラス、詰合ノ列藩衆議タニモ無之、俄ニ一兩藩戎装ヲ以、宮闕ニ立入、未曾有之大御変革被仰出候由ニテ、先帝ヨリ御遺托被為在候摂政殿下ヲ停職シ、旧春ノ宮・堂上方ヲ無故擯斥セラレ、遽ニ先朝遺外ノ公卿数多ヲ拔擢シ、陪臣ノ輩猥ニ玉座近ク徘徊イタシ、数千年来ノ朝典ヲ汚シ、其余ノ御旨趣柄、兼々被仰出候御沙汰ノ趣ト、委ク霄壤相反シ、実以驚愕ノ至ニ奉存候、假令 聖断ヨリ被召出候御儀ニテモ、可奉恐諫答、況ヤ当今御幼冲之君ニ、被為在候折柄、右様ノ次第ニ立至候テハ、天下ノ乱階万民ノ塗炭眼前ニ迫リ、兼々献言仕候素願モ不相

立、金甌無弊ノ皇流モ、如何被為在候哉、臣慶喜自今ノ深憂此事奉恐痛、殊更外国交際ノ儀ハ、皇国一体ニ關係仕候不容易事件ニ付、前件ノ如キ聖断ヲ矯候輩、一時ノ所見ヲ以、御所置相成候テハ、御信義被為失、後來皇国ノ大害ヲ釀出候儀ハ、必然ト別テ深憂仕候間、最前真ノ聖意モ被仰出候御沙汰、天下ノ百論相決候迄ハ、是迄ノ通取扱罷在候鄙衷ノ趣、御決定被成候ハ、兼テ申上候通、公明正大、速ニ天下列藩ノ為尽衆議、正ヲ挙、奸ヲ退、万世不朽ノ御規則相立、上ハ奉寧宸襟、下ハ万民ヲ安候様仕度、臣慶喜千万懇願ノ至奉存候、此段謹テ奏聞仕候、

卯十二月

右建白ノ趣ニ御座候処、尾侯・越侯ヨリ、只今建白相成候テハ、甚以御所御不都合相成候付、取止ノ方可然ト、咄被成候付、取止為申由、

一大坂城ニテ熊本・彦根・紀州等へ、一橋ヨリ今一度上京建白等イタシ度、議論相成候処、不服之由、右ニ付、余程一橋モ氣ヲ落シタルトノ段承申候、

一伏見町奉行屋敷前ニテ、彼方ヨリ鉄砲被相掛候、都之城巡邏ノ兵、先日申上タル通ノ事故、右人数ハ切腹イ

タシ申候、右等ノ事ニテ、此節ハ賞罰誠ニ嚴重ニ御座候、

一江戸城ハ、去月廿五日未明焼失ノ由、右ニ付御屋敷へ浪人等、此内ヨリ入込相成居候由、右へ不審相成候半カ、酒井左衛門尉頭ニテ、合七藩江戸御屋敷へ押寄せ、右人数出シ候様トノ事ニテ、接応有之旁ノ儀ニ付、彼方ヨリ砲発相成、尤御屋敷ニハ内ヨリ火カケ、双方戰爭為有之由、決テ御屋鋪人数、惣テ打死相成候半トノ咄承申候、浪花城ニモ、先日火ヲ掛候人モ御座候由、乍然是ハ焼失不相成、浪士所々ニ蜂起、旁御推察可被下候(巷説)」

一翔鳳丸江戸ヨリ、去月廿五日出帆ノ賦ニ御座候由、右等ノ事故如何ノ事カト、取々ノ評判モ御座候、乍併疾ク帰国相成候半、相替儀モ御座候ハ、御申遣可被下候、

一先日奉備 叡覧候調練、御国ノ方ヨク出来為申由、長州ハ案隊ノ練習、此方へ願出、御免相成申候、其外土州・藝州・尾州杯ハ、是迄蘭式ニ御座候処、此節ヨリ廢シ、英式ノ調練指南ヲ、此方へ願出タルヨシ、是モ御免相成申候、尤其節ノ調練ハ、余程御国ノ方ヨク出来、

叡慮ニカナヒ申タルトノ咄承申候、外藩ヨリモ、薩ノ
練兵ノ事ハ感心イタシ、〔候脱也〕

一 大坂新町辺ニテ、指宿五左衛門殿外ニ医師彦人、是ハ
疵付、直ニ逃帰タルヨシニテ、致切腹申候、右五左衛
殿へ、會藩先駈切掛、彼方モ即死、各深手等負候方モ
御座候ヨシ、五左衛門殿ハ即死、大小疵式拾五ヶ所位
残情、乍然余程当人手モキ、多日人故働ノ由、感服
ノ御義ノ次ニヨハヒタル〔マ〕杯トノ咄承申候、是ハ三條公
御迎ニ、大坂迄守衛方人数出候同隊ノ書役ニテ御座候、
最早右守衛方人数、先日御供ニテ上京イタシ申候、
一 池田次郎兵衛トノ、大坂長州屋敷跡ニテ、是モ會藩切
掛申候由、外ニ彦人列合有之、少シ後レ駈付候処、右
人数逃去申候由、次郎兵衛殿ハ、余程深手ニテ御座候
得共、列帰当分療治方ノ由、乍然生死無覚束承申候、
一 先日ハ調練奉備 叡覽候付、御酒并御肴頂戴被仰付、
幾度モ難有事、筆紙ニ難述、大隊計ニ御座候、右御肴
少々ナカラ差上申候間、何レモ御配分可被下候、此節
ノ儀ニ付テハ、一統必死討滅可奉安 叡慮決心、此外
明暮何モ案居事ニ御座候、猶追々承申儀ハ可申上候、

六〇四 京都風説（真偽交々）

慶應三年十二月

- 一 長州江裏辻侍従・葉室少將為 勅使被差下、大膳父子
復官ノ由候事〔米〕「風説」
- 一 神武帝山陵へ奉幣使被召立候事、
- 一 関東ト御手切之朝議、有之由候事、
- 一 去月土州隱居容堂候妻子引列、兵五千ニテ出京相成候
事、〔山内豊信〕
- 一 一橋公長・因・備為呼上、長ハ一致一挙之色相立候事、
- 一 一長之暴徒、潜ニ追々出京相成候由、戦争後暴魁首桂小
五郎・赤井武任・井原能登致潜伏之由、不日ニ調議相
遂ケ、長ハ暴発可相成トノ事、
- 一 一長却テ異人ト和親ノ上、於下ノ關ニ開港、佛・蘭ノ船
入港、公平ニ貨易相始候事、
- 一 一京師大火ニテ、彼是物騒、既ニ又候不日ニ戦争ノ街ト
可相成、其外細情別紙ノ通候事、
- 一 一兵庫開港
- 一 勅許不被在候ハ、献備ノ米拾万俵差上不申トノ事、
- 一 一京師へ譜代諸侯ノミ相詰、外様諸侯ハ全不入トノ事、

〔朱〕
「(事実)」

一右幕府申出ノ由候処、朝議断然御採用ノ事、

一薩州大夫小松帶刀、此節於京師大周旋、二條殿下へ詰

切りニテ、尽力有之候事、

右筑前ヨリ申来候由、筑前ノ役人三坂小兵衛話ノ由

伝聞候、

一兵庫海軍所総督勝安房ニテ候処、関東へ呼下、役儀差

免ノ由候、右代トシテ紀州小笠原某へ被仰付、兵庫奉

行ト名目被相替候由「(事実)」

六〇五 伏見巡邏奉命照会

薩州

伏見表今度御変革、彼是多端之虚ニ乗シ、狼藉之者横

行、人心不安趣相聞候付、急度巡邏鎮定可有之、

御沙汰候事、

但

伏見市・在取締之儀ハ、田宮如雲江兼勤被

仰付候、尚又巡邏之儀、長州・土州・藝州同様被

仰付候間、為心得相達候事、

御書附一通

但伏見表狼藉者横行巡邏鎮定之儀、

右只今参与御役所ヨリ、切紙ヲ以可罷出旨、御達ニ付

罷出候処、非藏人葉室播磨ヲ以、被成御渡候付、可申

上旨申述置候、尤御請書差出候様、御達ニ付御請書差

上申候、右之通私共差支、御留守居付役勤永山左内相

勤申候間、相添此段申上候、以上、

卯十二月廿一日

内田仲之助〔政恩〕

佐次右衛門様

本文致承知、達

御聴御別紙等扣置、此旨及御返答候、以上、

辰三月十五日

川上龍衛〔久勉〕

島津伊勢殿〔広兼〕

六〇六 伏見巡邏被命ノ照会

伏見表狼藉者有之趣付、巡邏鎮定有之候様、別紙之通

從

御所被仰渡候付、去ル二十一日七ツ時分ヨリ、三番隊并高岡一番隊・臼砲手半隊被差出、私領式小隊之儀モ、被差出置候得共、右丈ケハ翌二十二日引取相成、同日四番隊一組被差出、于今出張相成居、只今ニテハ先平穩之向ニテ、何モ異変之儀無之候、御留守居首尾書相添、此段申越候条

中将様可被達

御聽候、以上、

卯十二月廿八日

島津伊勢

島津圖書殿

桂 右衛門殿

小松帶刀殿

川上龍衛殿

町田内膳殿

伏見表今度御變革、彼是多端之虚ニ乗シ、狼藉之者横行、人心不安趣相聞候ニ付、急度巡邏鎮定可有之

御沙汰候事、

但伏見市・在取締之儀ハ、田宮如雲へ兼勤被仰付候、

尚又巡邏之儀、長州・土州・藝州同様被 仰付候

間、為心得相達候事、

右卯十二月廿一日参与御役所ヨリ、只今御用御達ニ付、御留守居付役永山左内罷出候処、非藏人葉室播磨ヲ以被成御渡、尤御請書差出候様御達ニ付、御請書差上置候趣、内田仲之助ヨリ佐次右衛門殿へ之首尾書有之、

六〇七 洛中取締ニ就テ邸中ニ布達

此節世上物騒 朝廷御配慮ノ折柄、洛中市巡邏追捕ノ被為蒙仰候、就テハ第一御国者ノ儀、於外方聊タリトモ、等閑ノ致方無之様、謹慎ノ廉不嚴然ニテハ、屹ト不相濟事候条、士分以上ハ申迄モ無之ニ付、心得モ有之筈候得共、下々ニイタリ候テハ、尚又謹慎イタシ候様、頭役又ハ主人等ヨリ、嚴重可申付候、乍此上万一於外方不法ノ致方有之候ハ、屹ト嚴科ニ可被行候、最モ取締等ノ儀ハ、追々被仰渡置候得共、都テ鎮撫ノ御大任被為蒙 仰候付テハ、尚又、御手元ノ取締第一ノ事ニテ、万々一末々ノ者共、取違有之候テハ屹ト不相濟事候条、此旨向々へ不洩様、早々可致通達候、

十二月

伊勢

六〇八 御警衛變更

慶應三年十二月

一去ル九日被 仰付候御警衛之向ハ、勿論在来御警衛於
場所モ、九門之外悉皆被
免候得共、今度改、

日御門

土州

御台所門

薩州

南門

尾州

朔平門

藝州

右之通、御警衛之儀、被 仰付候事、

六〇九 山城國中取締被命ノ達書

薩州

頃日御變革御混雜之虚ニ乘シ、悪徒横行之聞得有之候
付、洛中洛外巡邏之儀、被仰付候事、

但是迄町奉行取計向之儀被為替、当分之処、不取敢、
兼テ山城國中取締被仰付置候本田主膳正(康樞、贈所藩主)・青山左(忠敏)

篠山藩主(信正、丹波龜山藩主)
京亮・松平圖書頭(へ)、市中取締被仰付候、尚又、

市中見廻之儀、龜山隱岐守(松秋、大洲藩主)・加藤遠江守(明美、

水口藩主(英尚、園部藩主)・松浦肥前守(詮、平戸藩主)・植村駿河守(家衛、高取藩主)六藩

登守・小出伊勢守・松浦肥前守・植村駿河守(等)江、被仰付置候得共、尚又加州・土州・中川辺江、

洛中洛外見廻被仰付候間、此段心得迄ニ申達候事、
右之通、参与御役所ヨリ被仰渡候、此段向々へ可申渡

候、

十二月

佐次右衛門

六一〇 大坂玉造士へ達書

薩州

一元玉造組与力

一同組 同心

一川口組与力

一同組 同心

一破損方

一全方(金方)

一太鼓坊主

右ハ、是迄徳川慶喜支配ニ候処、薩・長・藝三藩ニ

附屬、軍役相勤候様、被 仰付候、其上勤功人材ニ
依テ、御採用可被為在旨、被 仰付候付、此段相達
候事、

十二月廿一日

參謀

六一 大坂在勤木場傳内江戸藩邸焼亡等ノ報告

一昨二十三日明ケ七ツ時、二ノ御丸炎上、折節西北風

烈敷、御城内不殘御焼失相成候、当二十五日(徳川家定実人)天璋院

様、西御丸御引移被遊候処、間モナク御焼失相成、又

々西御丸へ御立退ニ相成候様御座候、誠ニ奉恐入候、

且又今二十五日朝五ツ時、芝薩州御屋敷上(本邸・南向・西向ノ三邸ヲ云)・中・下共三

軒、外御大名様数軒ニテ押寄取巻銃炮打掛候処、忽兵

火ニ相成、三屋敷共一時ニ火事ニ相成、炎中ニテ合戦

有之、薩州方ハ、四五百人程ト申事ニ御座候、多分寄

手被打取候由、火事ハ益盛ニ相成、追々町家へ火移、

大騒動ニテ、近辺ノ者ハ逃去候得共、鉄炮等ニテ怪我

人等有之様子、火事ハ只今最中ニ御座候、右ニ付、俄

ニ御城内ハ勿論御見附町家等(本邸)ニハ、御大名様人数・銃

砲・大筒ニテ、御固有之候、今日ノ騒動一方ナラス大

混雜ニテ、此末如何成立候哉、大心配ニ御座候、下店
ニモ逃去度致居候、

卯十二月二十五日未下刻

追々、御大名様人数御繰出ニ相成、

別紙ノ通、堺筋砂糖屋共方ヨリ、注進仕候間、京都へ

ハ早速御届申上候、尤押取候申云々文言、敵吟味ノ間、

分明分リ兼申候間、相糺申候得共、江戸ヨリ申參候俟

ニ御座候由、且又、飛脚屋近江屋九兵衛ト申者ヨリ、

同様ノ趣申出、書付ハ無御座候、今日平運丸出帆仕候

付、不取敢此段御届申上候、以上、

卯十二月三十日

大坂

(傳告)
木場傳内

御家老中様

六二 十二月廿五日江戸御屋敷戦争等ノ次第

一去年十二月二十三日、江戸城内出火ノ事、

一同二十五日、江戸芝御屋敷へ、幕人共蹈入ラフセキ致、

幼少ノ者ニ至ルマテ殺害イタシ(本邸)、定府ハ陸路出立、跡

残り人戦争ニ相及候半トノ事、

但

(本)〔虚説〕(佐土原)
櫻田・小山御屋敷ニモ同断ニ相聞得候、

一 御船翔鳳丸、品川沖へ致廻船居候処、幕勢取掛砲発、

神奈川沖迄付越シ、相引ニ相分レ、少々ハ相痛ミ、修

補相加へ、兵庫迄廻船ノ事、

一去ル二日、平運丸大坂川口へ廻船ノ処、幕船ト相見得、

跡ヨリ付越、両度砲発一発相当リ、士官部屋少々相痛

ミ、兵庫滞船ノ処、去ル三日夜、幕船五艘終夜滞船ニ

テ、互ニニラミ居、翌日モ外四艘ハ不相見得、右ニ付、

春日丸・翔鳳丸・平運丸三艘類船ニテ出帆ノ処、幕船

付越シ、互ニ砲発、夫ヨリ相引ニテ、春日丸今日御当

地へ廻船ノ事、

翔鳳丸ハ相痛ミ、類舟難相成、土州辺へ相向廻船候欵、

六二三 当時江戸邸人名

御留守居

篠崎彦十郎

御留守居附役

脇田一郎

右 同

柴山良助

御金方

堀 勘兵衛

見聞役勤

兒玉雄一郎

手形所書役

川崎四郎左衛門

右 全

山本辰次郎

右 全

堤 彦太郎

御進物蔵役

天辰勇右衛門

御進物蔵手伝

一人

御兵具方足輕

八人

右之通、是迄通詰被仰付置、其外減少ニテ、仕廻次第

出立被仰付候段、伊勢殿ヨリ御差図ニテ候間、其段可

申達事、

但山本辰次郎・堤彦太郎家内之儀、此節定府御国許

引越一列ニテ差立、勤番ニテ可相詰事、

右卯十二月四日、御留守居方ヨリ仰渡ニ相成候事、

右通、江戸御屋敷詰被残置候処、十二月廿五日徳川勢

押寄、火ヲ掛切入候由ニ付、右人数生死之程、未相分

候事、

六一四 丁卯十二月廿五日江戸芝邸焼亡之事實

概略

蒸氣船翔鳳丸乗付追田届出口述、此翔鳳丸乗付ハ、乗頭白石彌左衛門、見聞役兒玉彌右衛門、士官伊地知八郎其外久見崎御船手、御船頭並水夫・機関師等二拾余人ニテ候、

一江戸定府人数之内、帰国ノ為メ、乗付居候モ有之、十二月廿四日・五日両日ノ間ニ、乗付候モ有之、其人数凡ソ男女二拾余人モ有之候半、

一滞泊中、白石・兒玉ハ折々上陸、鮫洲・品川辺ヘモ参リ候由、兩人ニモ、廿三日ニハ鮫洲ヘ上陸候由、酒ナト吞居候処、火事ト騒キ立、段々大火之模様ニ成立候処、御城ナリト申ス事ニテ、其時皆々心配ニ考候ニ付、直ニ其座ヲ引取り、本船ニ立帰り候由、是ハ前以テヨリ察度之訳モ有之、旁破裂ニ成立候ト存居候処、廿四日朝御留守居篠崎彦十郎ヨリ、乗頭白石彌左衛門ヘ、御文書類曳渡シ相成候テ、定府中小姓才領ニテ、大切ニ格護致シ、御国元之様持届候様トノ趣ニテ、曳渡相成り、白石ヨリ受取書可遣旨、才領人ヘ申聞候得共、受取書ニハ及ハスト申断リ、才領人ハ立帰り候由、尤モ其人ニモ便船願申出候ニ付、早目ニ乗付可然、ケ様ノ時節ニハ、必ス今日中ニ乗付候様、申聞候得共、家

内ノ仕舞方等モ有之候ニ付、廿五日ニ乗付度申出、立帰り候、終ニ其人々ハ乗付無之候ニ付、多分ハ死亡候半ト存候、

一白石・兒玉ハ、芝御屋敷ヘ参リ居候由、廿五日芝ノ方ニ当リ、火事相見得候ニ付、弥事初リ候ト考居候処、無程軍艦三艘翔鳳丸ニ近寄り、四五丁位モ隔リ、差抜掛候ニ付、気味悪ク、砲発致スナラント存候ニ付、此方ニモ水夫廿人ヲ選ヒ、大砲四丁ニ銘々打手ヲ配リ付、予メ用意致居候処ニ、陸ヨリ白石・兒玉ヨリ、ミニール拾挺早々遣候様、申来候ニ付乗セ付、四十丁有之、其内乗付ノ人々、銘々携ヘ残り、七丁有之ヲ遣申候、右ハ多分ハ届キ不申哉ト存候、尤白石・兒玉ハ船ニハ不帰、外ニ存慮有之候ニ付、御船ハ宜シク頼ムトノ掛合有之候ニ付、勝手ニ乗出シ可然趣モ申来候、右之次第二ニ付、蒸氣ヲ立テ、碇上ケ方ニ取付候処、幕船モ同シク蒸氣ヲ立候由、暫時アリテ、幕船ヨリニ発砲発仕掛候得共不当、然レトモ此方ニハ、先ツ砲発ハイタシマシクト堅ク申聞、折角錨ヲ上候得共、砲発イタシ掛候ニ付、其促切り捨スヘク、下知イタシ候、折柄蘭牟田尚平(茂啓)ヲ初、浪士二十人計、舟ヲ目懸ケ、乗り付ケ来

り候ニ付、直ニ為乗込候、是ニハ大ニ力ヲ得候、猶又大砲打方、且戦争ノ手配等申談候、

一 蒸気船既ニ乗出候折ニ、十五六人計リ、小舟ヨリ乘り来ルモノアリ、定テ敵ナラント、船中何レモ致用意、先ツ此方ヨリハ、砲発ハ致スマシク、近寄候上小銃狙ヒ打可致旨申渡、早々船ノ梯ヲ曳取り待掛候処、其船ニ乗組居候者、半首或ハ甲冑・鉄砲・鎗・長刀等ヲ携へ、血ニ染候モノトモニテ、至極血戦致候様子ニ相見得候、其時蘭牟田尚平申スニハ、中間ノ浪人ニテ、重囲ヲ打破リ遁レ来候モノトモニ付、乗セ呉候様申候得共、茲ニ至リテハ、乗リ入セ難シト申聞候処、尚平申スニハ、夫デハ自分トント申分ケ無之候ニ付、切腹可致トテ、既ニ脇差ヲ抜キ候ニ付、夫程ノ事ナラバ、其方受合ニ可乗旨、申聞ケ候テ乗セ候由、兎角スル内ニ又幕船ヨリハ、砲発仕掛ケ候ニ付、何分早く船ヲ乗出シ、戦ハサル方宜シ、仮令此方ヨリ、砲発致候トモ、敵ハ軍艦三艘、此方ハ商船一艘ニテ、迫モ必勝ハ難期候ニ付、此場ヲ遁レ、再戦スルヲ良策トノ衆議ニテ、乗出ントスル処ニ、又々小舟二艘ニテ、浪人トモ遁レ来リ、本船ヨリ三丁計リモ間近ク乗来候得共、是モ同

シク浪人ニテ、重囲ヲ切抜ケ遁レ来候ニ付、是非ニ乗セ候様申候得共、既ニ本船ハ乘リ出シ候上、幕船ハ追掛、其上早船ニテ、大砲打掛ナカラ、追迫り候ニ付、

浪人トモヲ乗セ候事不相叶、不便ノ事ナカラ、夫形リ

(悉一發命直亮記事卷四)

ニ見捨候、其後如何相成候哉不相分候、敵船ヨリ打懸

候砲丸ノ為ニ、船腹一ヶ所打抜レ候ニ付、此方ニモ仕

掛置候大砲為打候処、其内第一ノ大艦回天丸ト申ス船

ニ、破裂丸一ツ打当、定テ要所ニテ候半、暫時ハ猶予

之様子ニテ、外二艘ニテ、本牧近迄追撃致候、船ハ所

々弾丸ヲ受ケ候ニ付、蒲団ナトヲ以テ、水入リヲ防キ、

弥蒸氣ヲ強ク立候ニ付、漸ク走セ抜ケ申候、

一 右之通りニテ、漸ク走抜ケ、廿六日ニ相成リ、遠州灘

ニ乗掛リ候処、殊ノ外時氣ニ逢ヒ、已ニ船モ覆ラント

致候ニ付、船中皆精願ヲ相立テ、髪ヲモ切り候時機ニ

シテ、漸ク廿七日大坂マテ走付キ申候、

(廿五日)

一 蘭牟田尚平ヨリ、江戸芝屋敷ノ次第嘯ニ、廿四日ノ早

朝、甲冑ヲ着候モノ兩人来リ、酒井左衛門尉使者之由

(忠篤、庄内藩主)

ニテ、西御門へ参リ致案内候ニ付、応接ノ為メ、柴山

良助・關太郎兩人出会イタシ候処、彼ヨリノ口上ニ、

此方屋敷内へ浪人共數十人抱へ置候由ニ付、御用有之

モノトモ候間、差出候様申掛候ニ付、兩人ヨリ答ニハ、
左様ノモノハ、此方屋敷内ニハ罷居不申、皆手人計リ
ニテ候段、申断候へトモ、一向不聞入候ニ付、左様ナ
ラハ、屋敷中御見分ニテモ、可被成トノ訳申入、夫ハ
小山屋敷ニテモ、御見分御同道可致、強テ申入候へ共、
此屋敷へ使者ニ罷越候ニ付、外屋敷ノ事ハ、主人ニ不
伺候テハ、一存ニテハ不相成ト申候、左様ナラハ其通
可被成、早目ニ御取計可有之申候テ、為扣置テ、軍議
ニハ、此上ハ無致方候ニ付、イツクマテモ申取見可申
相談ニテ、暫時ニシテ、又使者へ曳合候処、未タ何分
モ不相分由、相答申候、其内蘭牟田申スニハ、此時機
ニ成立、最ハ無致方候ニ付、柴山初外七人ノ人数、彼
ノ浪人百六十人計ニテ、中二囲ヒ候ヲ、切り抜ケ舟ヨ
リ曳取り候策可然ト、頻リニ勸メ候へ共、柴山初拙者
共ニハ、此屋敷話ニテ此場ニ相成リ、無故引取り候訳
無之候ニ付、御志ハ忝候へ共、其筋ニ難致旨申切り揺
キ不申、彼是トシテ、時刻モ移リ候内ニ、三田ノ方阿
波屋敷ノ境ヨリ、扉ヲ押破リ、数十人乱入致候ニ付、
此上ハ致方無之逆、浪人并蘭牟田尚平ヲ始メ、直ニ備
へ、銅御門ヨリ切出候テ、重囲ヲ抜ケ候へハ、爰彼所

ノ辻々家ノ内ヨリ、寄手押合ヒ、鉄砲ヲ打掛ケ、或ハ
鎗等ニテ戦ヒ、ヨウノウノノ切リ抜ケ、海辺ニ出候処、
舟ハナシ、如何カセントスル折柄、幸ニ石積舟一艘、
漕ヲ漕キ通候ニ付、為乗候様呼ヒ掛ケ候処、沖ノ方ニ
漕キ通候ニ付、鉄砲ヲ構へ可射殺ト仕掛候処、右舟無
抛漕キ戻シ、右蘭牟田始為乗候テ、翔鳳丸へ無難乗り
付候由、右式故後ノ始末ハ、全ク存セサル由、御屋敷
モ火掛リ候ニ付、定テ柴山始討死ニテ候半、且小山ノ
佐土原屋敷ハ、御国脱走人毛利覚之丞・益満新八郎・
中村幾之介・伊東四郎左衛門ナト、潜リ居候、是モ一
緒ニ囲ヲ切り抜ケ、後ヨリ舟ニ乗り付候人数ノ由、白
石・兒玉兩人モ、柴山一緒ニテ候半ト存申候、
一上州辺ニテモ、浪人共押込等ノ事ハ、多々為有之由、
中ニモ江戸ニテ小笠原・酒井等吟味ニ、諸浪人等ヲ集
メ、悪事ヲ為働候ハ、全ク薩摩ノ所為ニ付、早く薩州
人ヲ追ヒ払ヒ、浪人共ヲ可除トノ評議ノ由、或ル時宇
田川町辺ノ町家ニテ、三十人計リ八丁堀同心共相集リ、
右等ノ手段吟味ノ座席ヲ、伺ヒ居候浪人共六七人、不
意ニ其座ニ切り込ミ、短筒ニテ射殺シ、切捨又ハ悉ク
追ヒ払ヒ候由、ケ様ノ事毎々有之、夫故幕役中ニモ、

甚タ恐れ居候由、或ハ旗本ノ宅ヘモ押入り、殺害イタシ候モ有之候由、

一此節之事ハ、全ク小笠原壹岐守ノ策ニ出候事ノ由、京

〔長行唐津藩世子〕

師ノ事、兎角難事ニ成り立候ニ付、慶喜公ハ早ク関東

ヘ曳取り、箱根ヲ占メ切り、割拠ノ策ニ決シ、右ニ付

薩人屋敷ニ居候テハ、如何ナル悪事仕出スモ難計候故、

先ツ是ヲ悉ク追ヒ払ヒ、浪人ハ殺シ尽シ候テ、内ヲ心

易クシテ、大坂ニテハ慶喜公曳取りニ付、薩・長ノ蒸

氣船アリテハ、若哉慶喜帰路ニ、如何ナル難事到来モ、

難計候策ニ出候由、右故春日丸・平運丸・翔鳳丸ヘ、

砲發ニ及ヒタルニテ候ヲハンカ〔推量ノ説〕

〔朱〕

一浪人ノ内、江戸旗本ノ末子等モ交リ居候由、此者共ハ、

〔朱〕〔俊土中ニ〕

幕府ノ間諜ナリシモ難計ト、申スコトノ由、又西丸ヲ

焼キタルハ、全ク浪人共ノ所為ニ、相違無之トノ評判

ニ候由、天璋院様御召仕ノ女中ニ、花川ト申モノ、外

二三人御下ケ相成候ハ、廿四日ノ事ニテ、花川申開キ

ノ事アリテ、登城致シタルモ、廿四日ノ事ノ由、定テ

此女中モ途中ニ於テ、殺害セラレタルナラントノ評判

ノ由、

一定府ノ妻子・児童マテモ、殺害セラレ候者多ク有之、

御屋敷中残りハ無之由〔朱〕〔虚説〕、御留守居附役南部矢八郎モ、殺サレ候ノ評判有之候〔朱〕〔南部ハ戦死スト云〕

一其後ノ説ニ、江戸ノ土州・藝州・宇和島・岡山ノ四家

屋敷モ、悉ク焼払ハレ候トノ評判ニ候〔朱〕〔虚説〕

一蒸氣船翔鳳丸、大坂川口出帆、兵庫ヘ汐掛リ、春日丸

ナト一緒ニ相成リ候処、一ト先ツ大坂御屋敷ヘ参リ、

形行ノ届申出候処、黒田嘉右衛門ヨリ、京都ヘノ御届

ハ、可申越候ニ付、此上ハ一日モ早ク、無難ニ御国元

ヘ乗着候儀、肝要ノ段承リ、夫故早々曳取り、兵庫ヘ

廻リ、御国廻リニ相決候処、蘭牟田尚平初メ、浪人共

ニモ、御国許ヘ参リ候テハ、無申訳候ニ付、是ヨリ御

暇イタシ、直ニ上京イタシ、京都ヘ登リ、東征ノ趣意

相貫キ度旨、頻リニ申立候ニ付キ、皆々舟ヨリ卸シ、

尚平一緒ニ致上京候由〔朱〕〔命巻〕、左候テ定府又ハ使人等モ、小

豆屋ヘ上リ、小舟雇入レ、米銭ヲモ遣シ、定府等ヲ送

リノ手都合致候、此時久見崎船頭モ引キ分レ、無暇ニ

テ、定府人数ト後先ニ陸ヘ引取候由、右ニ付舟ニハ搦

米拾俵ヲ為乗候テ、伊地知八郎ト兩人外ニ、町人便舟

彼是七八人ニ候、是ハ廿八日、幕船付キシタヒ、砲發

モ可致模様ニ付、定府人数等ノ取計致シ、夫ヨリ翔鳳

丸ハ乗出候処、幕府ノ軍艦二艘追掛来り、阿波ト伊豫トノ間ニテ、數發砲發ニ逢ヒ、彈丸數ヶ所ニ受ケ候ニ付、春日丸ノ救助ニ依リテ、夜ニ入り無難ニテ、夫ヨリ春日丸ニモ曳キ分レ、阿波ノ内何方ニテモ、乗上ルヘクト談合ニ及ヒ、船ハ數ヶ所ノ疵ヲ受ケ、帆柱モ二本ハ打折ラレ、端舟モ二艘ハ打碎カレ、殆ント舟ハ進退モ不出來故、阿波ノ内小湊ニ乘リ付ケ候処、幕府ハ付キ来り、二艘ナカラ、三四丁ノ所ニ掛リ候ニ付、迎モ難遁候ニ付、此舟ヲ敵ニ取ラレ候テハ、直チニ大坂ヘ引キ行キ、乗取ラレタリト、申サレテハ、薩摩ノ名折レ故焼捨テ、我々トモハ、御文書等ヲ才領致シテ、曳キ取リ候吟味ニ決シ、夜明ケニ、一艘ノ端舟ヲ卸シ、乘リ付キ、先キニ一艘卸シ、伊地知外二人ハ、後ニ焼草ヲ三ヶ所ニ仕掛ケ、火ヲ付ケ、焼ケ上ルヲ見テ、其ノ脇ノ小島ニコキヨセ、相待候処、漸ク一ヶ所燃上リ、直チニ燒キ立候ニ付キ、皆々陸ヘ引キ取候、暫クシテ、船ニ仕掛ケ置候大砲四挺ニ火移リ、砲發シ夥シキ音イタシ候、其浦ハ一人モ不居候ニ付、一里計リノ山坂ヲ越シ、御文書類ヲ持チ、ミニーベルヲモ携ヘ下リ候処、人家有之小浦ニテ、人家ニ立チ入り、舟借入レノ

相談ニ及ヒ候処、色々難渋ガリ候ニ付キ、三円金ヲ送り候約束ニテ、乘リ付キ候テ、一丁計リモ出候処、跡ヨリ立付ケ着候人兩人立出、舟ヲ返候様、頻リニ呼ヒ掛候ニ付、色々吟味ニテ候ヘトモ、舟乘返シ候処、其人ニテモ候半、挨拶致シ、三円金送りノ筈候ヘトモ、十三円送り候様申聞候、且ツ薪水モ用意致シ候都合故、段々丁嚙ニ取計候ニ付、厚礼申入相分レ候、夫ヨリ土佐ノ内ニ乗付ケ、宇和島ノ様送り、爰ニテ馳走ナトニ逢ヒ、爰ニテ三四日ノ伏水戦争ノ説トモ、役人ヨリ承候、薩摩大勝利ノ由ニ相聞得、夫ヨリ舟ニテ細島ヘ差送ラレ候云々、

六一五 壬生前修理権大夫上京達書

薩州

壬生前修理権大夫、早々上京之儀
(基修)
御沙汰候間、為心得申達候事、

御書附 一通

但

壬生前修理権大夫様、早々上京之儀、

右今晚参与御役所ヨリ、切紙ヲ以、可罷出旨御達ニ付、罷出候処、非蔵人羽倉肥前ヲ以、被成御渡候間、可申上旨申述置候、

右之通私共差支、御留守居附役勤永山左内、相動申候(卷「鑑」)

間、相添此段申上候、以上、

卯十二月廿四日

内田仲之助

佐次右衛門様

六一六 少将公至急参朝御召

六一六ノ一 御用之儀有之候間、唯今参 朝可有之候事、

十二月廿四日

薩摩少将殿

六一六ノ一 私事、唯今参 朝可仕旨、蒙 命候得共、不快有之、参 朝難仕御断申上候、此段宜敷御執奏奉願候、以上、

十二月廿四日

薩摩少将

六一七 四藩兵隊天覽御達書

正親町三條前大納言様・正親町少将様ヨリ、薩州・長土・藝州兵隊人数調練、来ル二十七日巳ノ刻日ノ御門於前、被遊 叡覽候段、被仰付候間、人数取調可申上、当分諸所へ、警衛等へ差出有之候右人数引揚、 叡覽ト申事ニテハ無之、手明ノ人数丈ケ罷出候様相達、左候テ、当時ノ事故、砲声等イタシ候テハ、人氣動揺ニ可有之候付、砲発無之様御達有之候事、

卯十二月二十五日

六一八 藩政改革刑法改正

十二月廿五日

此節変革被 仰出候付、先ツ刑法之変革相成候由、大目附座被為廢、御裁許掛御役場モ被為廢候テ、別ニ糺聞新納刑部殿并ニ伊地知壯之丞(貞徳)・橋口彦二・橋口與一郎三人、取扱被仰付候由、

六一九 帖佐・池田探偵書(江戸邸在勤)

十二月廿五日 雨

今日ヨリ大坂城中ヲ発シ、會・桑・新撰等追々軍勢ヲ繰出シ、川舟二百余艘ヲコキツラネ、陸行ヨリモ殺到シテ、八幡・山崎等ヲ根拠トナシ、淀城伏見ニ出張シ、其勢ヒ当ルヘカラサルニ似タリ、依之薩・長ノ軍兵追々被差向、互ニニランテ、陣営ヲ張ル事ニ及ハントスルコト、度々ナレトモ、未タ時不到シテ、味方ノ兵氣ヲ養ヒ居タリ、今夜歩兵六七人、市中ノ財ヲ奪取コトヲ知ツテ、カラメ捕ル、

廿八日 晴

伏見出張ノ都城兵七人、命ヲ受ケテ斥候トナリ、奉行所ニ新撰組ノ扣ヘ居タルヲ伺フ、新撰組其体ヲ見テ、三十人余追掛、小銃ヲ発ス、私領兵其場ヲ逃去リ、散々ニカヘル、依テ軍律ヲ以テ、七人ノ首ヲ斬テ、衆ニ示ス、

廿九日 晴

今日東寺宿陣ノ兵ヲ、上烏羽村ノ要害ニ繰出備ヲナス、伏見両方ノ軍勢、互ニニランテ对阵ス、

一去ル廿五日朝五ツ半比ヨリ、江戸三田通・西御門通・表御門通・銅御門通、都テ松平山城守様(信康、庄内藩主)・間部様(信康、庄内藩主)・酒井左衛門尉様、其外公儀役人多人數、具足・鉄砲・拔

身刀・槍・大砲備立、大目付衆又ハ御使番衆ノ間、篠崎彦五郎殿御長屋へ被參、御談央三田通御物見ヨリ、此御罷居候浪人共ヨリ、銃砲打掛ケ申由、夫ヨリ外堅方ヨリ、大砲ヲ御物見ヘ打込、双方ヨリ戦ニ相成、私共被召置候御長屋銃砲打込、出火相成、固メノ人數モ、過分死手負モ御座候、此方モ浪人上下死人モ、二十余モ御座候(二十六人ナリ)

一篠崎彦五郎殿儀ハ、公義役人同道ニテ、御長屋被罷出候、何方ヘ同道被越候事ハ、今日迄ハ分リ兼申候(町奉行所ニ於テ死シタリト云)

一勤番定府人數之儀ハ、手向イタシ候者ハ、打捨候者モ御座候、又ハ手向モ不致候者ハ、身分応シ、堅メ人數ニテ、何方ニカ引渡申候由、私共早朝ヨリ外方御用有之、差越罷帰掛候處、右次第其場ヲ漸々相凌キ、罷居申候付、当日ヨリ姿ヲヤツシ、市中之風聞氣寄ヲ以、

承合申候處、御国ヲ敵ト見請、此頃ニ至リテハ、被仰渡候御通達モ、此御方様・松平安藝守様(長野長訓、美州藩主)・松平土佐守様(山内豊範、土州藩主)ニハ不及御達、臨被仰渡候由、此節之異変ニ付テハ、都テ御藏迄モ火ヲ掛ケ、御長屋モ同断之仕業ニテ、勤番定府大小着之俵ニテ、其場凌次第込入居申候(事実)

一私共儀ハ、金子等モ余計ニ兼テ持合無御座候、公儀御
 要意勤者ニ付テハ、仕度モ漸々一度位、出入町人所へ
 忍ヒモラヒ位ニ御座候得共、此上ハ早々御手当ニ相成、
 御要意御出陣、御尤ト奉存候、其内私共身ヲ忍ヒ、公
 義御手当向、委曲実正之所ヲ承合置申候、其上ハ我々
 身之上ハ、イカ様ニ相成候テモ、苦敷無御座候、誠ニ
 残多次第二御座候、

一浪人者共、御屋敷へ何様之筋合ニテ、諸方ヨリ参リ候
 哉、兼テ御留守居衆ヨリ、勤番定府へハ、御知ラセ一
 切無御座、私共ニハ何様成御用之向ニテ、多人数入込、
 朝夕三度ツ、御賄酒ハ望次第被下由、承居申候、就
 テハ此節之儀ニ付テハ、右人共死ヲ究、十死一生ノ働
 ニ相見得、我トモ儀ハ、兼テ何之要具等モ、手当イタ
 シ候儀モ、御知ラセ無御座候、其外右人罷居候御長屋
 へ、一切入込候儀ハ無用ト、御達シニ相成申候、(事
 末)

一高輪御屋敷焼払ニ相成、御長屋へ罷居候者ハ、何様相
 成候欝、承合候得共、今日実正分リ兼申候、高輪御屋
 敷辻番人迄モ、公儀役人列渡候由、軽キ者ハ繩掛、士
 分ハ繩不相掛由、此節之儀ニ付テハ、兼テ何モ不存者

ハ、下々迄モ難儀仕候事ニ御座候、
 一上野増上寺ハ、御大名御固メ、内外之見付ハ、都テシ
 メ切ニ相成申候、

一右御差図之御掛リハ稲葉之由、
 一御三方公儀ヨリ余程御ウラミ由、色々外方評判仕申候、
 一立花直記殿ハ被死候由承候、其外付役衆ハ、何方ニ被
 罷居候事実正ニ分リ不申候、

一御蔵金モ過分焼失之由、
 一米モ過分焼失仕候由、

一市中へハ、浪人者薩摩ト見詰候得ハ、早々申出候様、
 敵敷被仰渡候由、御出入町人共へモ、最始薩摩者参リ
 居候ヲ、見当候得ハ、踏込召取可致由、申渡御座候段

モ承候、

(末)一佐土原
 一三田島津様モ、同日御固メ人数ヨリ、大砲打込火ヲ掛
 焼払ニ相成、今日大圓寺へ火ヲ掛可申トノ段モ承候、
 一櫻田御屋敷之儀ハ、去ル廿五日固メ払ニテ、火ハ掛リ
 不申候、

一芝御屋敷近所へ、酒井様固メ出張、一ヶ所屋夜御座候、
 一二ノ丸天璋院御住居、薩摩浪人火ヲ掛候様、外方專評
 判仕候、(末)「(行商)「(霖時)当事専ラ唱へタリ、或ハ益満、蘭牟田カ所為ナリ

シトモ二〇」

一見付外浪人薩摩者ハ、見当り次第捕方イタシ、其方掛
役人諸所へ相廻リ申候由、御出入町人方ハ、市中名主
共、被掛置聞合央ニテ、夫故私共儀ハ、夜ハ氣ヲ付、
昼ハ時分ヲ見合、諸所へ様子ヲ替、公義之御要意聞合
方仕候、

一浪人計召捕候儀ニ御座候得ハ、是非ナキ次第奉存候得
共、御屋敷へ態々火ヲ掛、都テ焼払ニ相成候テハ、何
共残多至極奉存候、殊ニ酒井勢ハ〔千人内外ナリ〕三千人余ト申評判ニ
テ、松平山城守様ハ四十人位、間部様三四十人位之由、

一高輪御屋敷之儀ハ、表長屋ハ都テ焼失ニテ、内バカリ
残居申候、御殿廻残居申候由、右旁私共不被參場所ハ、
政田屋嘉兵衛并仲藏手先ニテ、聞合方仕申候、公義諸
事御手当等之儀ハ、能々届申候由〔本〕「〔事実〕」

一乍恐、私共御賦等モイタ、キ候儀不相調、早々罷下右
形行言上仕度、夫而已昼夜片時モ不寝、夜明シ候テ、
身ヲ忍ヒ聞合方仕申候、

一横濱異人館方モ早々固メ、嚴敷御座候由、
一御譜代御大名并旗本武器手当、公義ハ勿論御手当、追
々御座候由承候、此上可成文身ヲ忍ヒ、御府内御手等

之実正承付置申候、

一私共当月御賦等モ不被下、外ニ持合金モ無御座、何方
へ借用仕候事モ、相叶不申候間、私共兩人御賦ニ準シ、
乍恐金子頂戴被仰付度、幾重ニモ奉願候、此上ハ外方
ハ公刃聞合承合候者無御座候付、此所ハ私共十死一生
ニテ、其御許之御都合、可宜ト相働仕申候、

右之通形行、早々荒々飛脚ヲ以、如斯奉申上候、追テ
異変ハ追々可申上候、以上、

卯十二月廿七日〔ママ〕

御兵具方肝煎勤

帖佐藤太左衛門

右同足輕

池田喜平太

御用部屋

御役人中様

六二〇 立后冊命御沙汰布告

十一日達、

准后御方立后之事、

親王御方厚被為在 思召候之間、明後年春立后冊命

御沙汰被

仰出候事、

十二月廿七日

右通被 仰出候旨、御到来候、此旨向々へ不洩様、

早々可致通達候、

正月十一日

刑部新納久脩

此報十二月廿九日京師出發、正月九日夜着慶ス、

六二二 西郷吉之助ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

別紙寄通、三田尻ニて談判相成居候約条書ニて御座候

間、為御見合差上申候、此内末之条ニ、〇ト有之候は、玉之事ニ御座候、外白紙之書面ハ、世子君直書

を以、御渡相成候ものニ御座候間、是又差上置申候、

此旨乍略義、以書中奉得御意候、頓首、

十一月廿七日

黒田嘉右衛門様

西郷吉之助

要詞

〔天西郷全集所収写真にて校訂〕

〔別紙〕
一三藩とも浪花根拠之事、

一根拠守衛薩藩二小隊へ、長・藝之内相加候事、

一薩侯御一手は、京師を專任とす、

一長・藝之内一藩京師を応援す、

一薩侯御着坂廿一日にて、廿三日御入京、廿六日三田尻

出浮之兵出帆、廿八日西の宮着、薩藩より京師之模様、

報知之上進入之筈、

一〇之義は、山崎路より西之宮へ脱、詰り藝州まで之事、

六三二 池田喜平次書翰

歳暮ノ御祝儀申上候、弥以御祖父母様奉初、其外皆様

被御揃、御機嫌能被遊御座、恐悦御儀奉存候、次ニ於

爰許モ、兄様ヲ初私ニモ無事罷居申候間、乍大成合易

尊意思召可被下候、然ハ爰元ニモ將軍職等被廢、其段

ハ別紙ヲ以仰出、又ハ聞合書等差上申候間、御覽可被

下候、就テハ右様大變革相成候テ、既ニ砲発ニモ相成

候半、九日御所堅メ、五藩へ被仰付、多人數ノ事誠ニ

〳〵賑々敷事ニ御座候、其上追々長藩人數モ着相成、

右人數直様相國寺へ繰入、夫ヨリ見廻リ被仰付居申候、

左候テ、一橋公儀ハ、当十二日夜下坂相成、會津・桑

名同断、最早念遣モ無之故ヨリ、十三日解兵相成申候、

其内ハ、都テ大砲・小銃ニハ玉込合、今日ヲ限ノ命トモカナト、申処ニ御座候間、万事御察可被下候、将又

御所ヨリ御警衛人数へ、大儀ニ被 思召、御酒并スルメ三度頂戴被仰候、難有事ニ御座候、右頂キ候スルメ、差上申候間、少々ツ、ニテモ、皆様御頂キ被下度、尤此已前ハ、九門内サヘモ、銃砲・筒袖・バツチ相用候テハ、踏入事不相成事御座候へ共、此節非常ノ事故、六門内或ハ御書院迄モ御警衛ニテ、踏入申候、諸所拝見仕候、且又、昨二十九日ニハ、土州・藝州・長州・薩州四藩ノ調練

観覧被遊、是又賑々敷事ニ御座候、イツレモ御国様調練ノ次第ハ、外ノ国ヨリモ抽、益盛ニ御座候云々、三條様ニモ昨日御光着相成、旁左様思召可被下候、

一 上別府善次郎・久保矢九郎・松崎小吉此両三人列立、爰元拔出、大坂ノ様差越、御銀司三井トヤラへ押込イタシ、金五百両差出候様申候処、三井申ニハ、夫丈ケハ在合無之、四百両カ四百五十両カノ間差出、右ヲ持直ニ罷婦、大坂新町ノ様差越、芸子遊ヒイタシ、酒ニ酔、銘々居間へ相起居候処、見廻組ヨリ相捕ラレ、就テハ右大菱革相成候上ハ、彼是邪魔ニ相成、早ク殺方

可宜ト吟味ニテ、最早命ハ有之間敷評判ニ御座候、(本)江戸詰足輕ナリ

一三條様御供へ、島津良馬殿組、大坂へ被差越居候処、右兵糧方指宿五左衛門ト申人、大坂ニテ被殺、相手何方ノ者トモ不相知、右五左衛門列立ニハ、右へ相付居候医師前田何某ト申人ニテ、難ナク御屋敷へ罷帰候付、糺方等有之候処、何モ不相分内自殺ニテ、于今々々在手ノ儀相分不申候、決テ會津ニテハ、無之哉ト承居申候、

外略ス

卯十二月二十八日

池田喜平次

御祖父様

御祖母様

尚々伏見ノ方へ、未會藩等相残居候付、右ヲ早々引払様ニ、御達相成候処、中々コト、モイタス体無之処ヨリ、尾州様藩中何某、又ハ吉井幸輔殿(外略) 勅命ニテ被差越候処、是以引払体無之、追々大坂ヨリ歩兵人数モ、罷登様子ニテ、最早砲発相成候賦ニテ、御国人数一大隊計、其外長州・土州人数、伏見ノ様差越居候処、尾州藩中吉井幸輔殿へ申ニハ、今両三

日ハ相待呉候様、成程 勅命ノ事ニハ候得共、若拙者差越、不聞入候ハ、主君直ニ差越、取ヲサヘ方イタシ候賦御座候間、夫迪モ不聞入候ハ、大坂ヘ下坂イタシ、一橋ヘ直談相成筈御座候間、待呉々々ト、再三申合、夫故先無事ニ御座候ヘトモ、砲発ナシニハ、相治事六ヶ敷トノ評判ニ御座候、

六三三 大久保一蔵ヨリ蓑田傳兵衛ヘ書翰

(形勢ノ事表)

尚々、別紙よろしく奉頼候、且恐入候得共、私封相達候様御懸声奉合掌候、
一輪拝呈、嚴寒之砌乍恐

中将様益御機嫌克被為遊御座、恐悅奉存候、於御当地太守様御同然被為遊御座、御同慶奉存候、次ニ貴所様ニも、弥御安康被成御奉務、奉欽然候、陳ハ去ル九日、朝廷大御菱革、十二日迄之形情略申上置候通ニて、其后之模様別紙ニ相綴差上候、徳川氏為鎮撫下坂末、朝命奉戴之実行挙リ不申候、尾・越公而公御周旋之處、正月元日之期日ニ御座候間、夫迄ニ結局相分可申候、

外国江徳川氏ヨリ、返詞之書面等、一見いたし候得ハ、中々恭順之趣意相見得不申、真実

朝命ヲ奉シ、反正ニいたり候事ハ、無覚束被存申候、乍去尾・越・土公之御趣意ハ、是非輕粧ヲ以、徳川氏ヲ上京せしめ、両事件御受之

奏聞ヲナサシムルトノ御見込ニて、此節御達之御文面も、尾・越之御願通、

朝廷ヨリ被相下候間、必定上京と申場ニハ、相成候半ト被伺候、

朝命通無異議御受ニ相成候ヘハ、重畳ノコト候得共、旁熟観仕候得ハ、中々意底不可測候得は、必ス安心難仕事ニ御座候、固より會・桑埴国等之一事も有之、無事ニは治り相付間鋪かと愚考仕候、

朝廷上之處、岩倉公御一人ニて、余ハ不足取、実ニ心痛之次第御座候處、三條公御上京相成、大ニ力を得候事ニ御座候、是ニハ

朝廷一層ノ御氣力相増、御同慶此事ニ御座候、勤王之藩も段々相起り、戦ニ相成候ても、

朝廷御兵力ハ十分ニて、決て懸念無御座候、外国之処も、サト（余也）江寺島ヨリ引合セ、彼之口氣も、旧幕ヲ助

ケ候儀ハ無御座候、今日ニ相成候ては、下一同之人心、今般徳川氏ノ不底(是力)之所為ヲ惡ミ候様相成、大幸之至御座候、兎角結局之次第ハ、追々可申上候、平運丸就開帆、別紙二冊相添、大略之形行申上候、奉達御聴候儀、可然御取計可被下候、御伺旁公私取交、草々如此御座候、頓首、

十二月廿八日

大久保一蔵

蓑田傳兵衛様

(島津忠承氏所藏本にて校訂)

右別紙二冊ノ内

一 紀州勤 王ヲ唱候事、

右ハ是迄、尊幕ヲ主張シ候三浦休太郎・津田某暗殺ニ

逢、死ニイタラスシテ帰国イタシ、正義之論相立、安

藤ノ類等、国論ヲ盛返シ、有志ノ者ヲ挙ケラレ、横井

次大夫ト申者坏上京ニテ、追々面会イタシ候処、随分

模様ハ変シ候様子ニ御座候、紀州モ此節依召、大坂迄

出掛リ候処、称病氣滞坂、帰国ノ御暇願出被免候、而

端ニワタリ候カモ不被図候得共、帰国イタシ候得ハ、

徳川氏勢ハ、ヨホド弱リ候場合ニ御座候、

一 彦根モ同様勤 王ヲ唱、公卿方へ愁訴歎願ノ由、

一 因州モ同断、

右三条実行ヲ御責相成候事、

一 備前モ大ニ国論変シ、王師挙リ候得ハ、打テ出候迄ニ

決定之由、

一 其余畿内小藩等、頻ニ 王事ニ勤勞セン事ヲ願出候事、

一 加州候上京相成居候処、九日一挙ニテ、例ノ通逃ケ下

リ候、(本一)元治元年卒然
帰国ヲ志ス

一去ル十二日、九門内警衛ハ、新古共ニ解兵相成、別段

ニ日御門土州、御台所御門前御国、南門尾州、朔平御

門前藝州固メ被仰付、洛中外巡邏被仰付候事、

一 長州蛤御門固メ被仰付候事、

一 廿三日徳山侯着、廿六日参 朝之事、

右之通、今日迄大略之形情申上候、多少之事实、紙

上ニ難尽、御洞察可被下候、以上、

十二月廿八日

大久保一蔵

蓑田傳兵衛様

六二四 中原猶介ヨリ岩城喜左衛門へ書翰

猶々、時々御保養專一奉存候、彦四郎殿至テ御壯健

ニ御座候、

一筆啓上仕候、寒冷之節、尊翁様益御安祥可被遊御

座、芽出度恐悅御儀奉存候、二私ニ於テ、爰元生不相

変無事相動罷過候間、乍憚御放意可被下候、陳ハ爰元

ノ形勢ハ、先日池田次郎兵衛・大橋次郎助下向便ヨリ、

委曲申上置候、早御披見被成下候半、其後一橋・會・

桑等ハ、矢張浪花城へ屯集、穴勝籠城之姿共、相見得

不申候へ共、御譜代諸大名召呼之吹聴杯有之、喧承候

へ共、榊原・姫路杯外ハ、召ニ応シ候諸侯モ無之様子

ニ候、紀州・彦根モ徳川氏ニ稍相背キ、紀州ハ帰国、

彦根ハ、近々大坂ノ出兵引揚候哉之風評モ有之候、

一尾州老公・越前春嶽公、又々一橋説得之為、昨日下坂相

成候間、此一挙定テ和戦之一事ニ、相決シ可申候存候、

一筑前宰府へ、御越相成居候三條公初五卿方、昨日御帰

路芽出度事ニ御座候、

一昨廿七日、薩・長・土・藝之四藩兵隊操練、

叡慮被仰渡、最初行軍ニテ、日之御門前御棧敷ニテ、

拜礼被仰付候、土州二小隊・藝州五小隊位・長州一大

隊・御国三大隊ニ、拙者隊之大砲隊砲隊ノ操練、八ツ

時分ヨリ暮比迄有之、難有仕合ニ御座候、外差テ相交

候儀モ無御座候、先ハ歳暮御祝儀旁、早々如此御座候、

謹言、

卯十二月廿八日

中原猶介尚書

岩城喜左衛門様

御史

六二五 園田新左衛門ヨリ父母へノ書翰

(切迫ノ事情)

一筆啓上仕候、寒冷罷成候処、先以被為揃御機嫌克被

遊御座、恐悅御儀目出度奉存上候、随テ私ニモ、無事

至極之大元氣ニテ、相動罷居申候間、乍憚易尊意思召

可被下候、

一当月九日朝四ツ時分ニ、本宮役所ヨリ一統隊長へ、只

今御用有之罷出候処、御参代(代)ニ付、銃服ニテ早々御警

衛トシテ、罷出候様承知仕、直ニ仕廻屯集場へ罷出候

処、直ニ繰出シ、乾御門前之六門之内、准后御門前ニ

大砲相備、御警衛仕居候処、四ツ過時分ニ御参代ニテ、

夜八ツ時分ニ御帰殿ニ相成申候、扱御所之内ハ筒袖・

バツチハ相成不申候得共、銃服ニテ踏入、御警衛仕居

候処、銃服之御免、直ニ刻付ニテ相廻リ候、扱又今日

ハ晴天ニ、雪ハチラ／＼降り、朝四ツ時分ニ、白西洋
布合印相渡り、暮六ツ時分ニ、布屋打張り内ニ入御警
衛、夜八ツ時分ニ交代ニテ罷帰り、今日ノ御参代外ニ、
尾州・越州・藝州・土州五藩ニテ御座候、會津并桑名
杯ノ御固メ杯ハ、御免ニ相成、左候テ、長ノ一条モ先
年ノ通、御免相成申候、扱又戰爭相始り候時ノ合ヒ詞
ハ、向ヨリサツカ、答ハヲイ、同十日大砲隊之儀ハ、
半隊ツ、御警衛ニテ、急変ノ節ハ、直ニ馳付候様相極
リ、今日朝六ツ過時分、罷出交代イタシ御警衛、朝四
ツ過時分ニ御参代ニテ、夜七ツ時分ニ御帰殿ニ相成申
候、今日ハ御所ヨリ、御酒・スルメ被下、何共難有事
ニ御座候、長藩人数モ四百人程、御屋敷之陣營・相國
寺之内本寺ニ、今日着ニテ御座候、扱又會津モ、今晚
守護職屋敷ヨリ、大砲ナト押立、二條之城へ楯籠候由、
一橋モ内ニ居、桑名モ同断、楯籠候様承り候、長藩モ
九門之内ニ入、巡邏杯イタシ申事ニ御座候、私共ニモ、
今晚四ツ時分ニ、交代罷帰申候、今晚之合ヒ詞ハサツ
カ、サツ、同十一日朝五ツ時分ニ罷出、交代イタシ、
右同断准后御門前ニ御警衛、夜四ツ時分罷帰り居候処、
一橋・會津・桑名、今晚寄掛トノ趣、私共隊之監軍村

田平右衛門殿ヨリ承り、直ニ准后御門前ニ馳付、自分
預リノ大砲ニ相付、御警衛仕居候処、風説ニテ候半、
何事モ無御座候、海軍隊之監軍村田新八殿、夜五ツ時
分ニ巡邏ニ被差越候処、守護屋敷前ニテ、會津藩三人、
村田氏へ切掛ケ候テ、向一人戦死、外二人ハ逃去り候
由、村田氏ハ頭ニ疵ニケ所、背ニ一ヶ所有之候得共、
命ニハ差支無之候様承り申候、今晚ノ合ヒ詞ハ、山オ
山、同十二日大砲隊ノ分ハ、准后御門前ハ引取ニテ、
下立賣御門外ニ、布屋打張り、内ニ入御警衛、朝時分
ニ交代ニテ、罷り帰申候、昼時分ニ、又候會津屋敷ニ
火ヲ掛候テ、寄掛ト之事承り、直ニ御本門前ニ馳付候
処、風説ニテ候半、何事モ無之、罷帰り申候、今日又
候、御所ヨリ御酒并スルメ被下候、屋七ツ時分ニ御参
代ノ筈候処、越前様急御病氣ニテ、御参代無御座候、
今日一橋・會津・桑名〔桑名〕〔宇坂ノ懸〕下國ノ願、上り候処、願通御免
被仰付候様承り候、夜五ツ時分ニ、御屋敷近クヲ、會
津藩人数、大砲七八挺押上り候様、藤堂藩ト名乗り為
知候由、〔桑名〕〔全上〕下國之願上候テ、今晚御屋敷へ寄掛トノ趣、
本宮役所ヨリ承知仕、今晚コソ相始候半ト、必死相成、
一信之尽力御奉公仕考ニテ、直ニ出陣イタス計リニ仕

舞居申候処、何事モ無之、下坂之御届ケ、一橋ヨリ上候由、左候テ會津・桑名、大坂迄列下リニテ、大坂ヨリ国へ下候之処、長々爰元へ置候得ハ、既ニ砲發イタス勢之様、大坂ヨリ国へ下シ候テ、一橋ハ上京イタスノ処、御届ニ相見得候由、夜五ツ時分ニ、二條之城ヨリ繰出シ、騎馬隊・銃隊半里程引続、千本通りト申所ヨリ、致下坂候由物見ヨリ為知、左候得共又二條之城へハ、過分二人數入居候様、承リ申事御座候、今晚之合詞サイカ配、同十三日朝五ツ時分ニ罷出、致交代、右同断下立賣御門外、布屋ニ入御警衛、今晚之合詞ヨイヲイ、今日又候、御所ヨリ御酒并スルメ被下候、同十四日朝五ツ時分ニ交代ニテ、罷歸リ、今日庭鳥之汁給候得共、一人ニ付金子式朱ツ、被下、難有事ニテ、直ニ鶏并酒ナト取入、喰^(食)リ申事ニテ御座候、扱又御所内杯ニ、急ニ御堅メ被仰付候場所ハ、今日迄ニテ御引取ニ相成申候、今日別段御堅メ被仰付南門尾州、日ノ御門土州、朔平御門藝州、御台所御門薩州、會津相堅メ居候九門之内、蛤御門ハ長州ニ被仰付候、扱又私共今当分、迎モ罷下ル模様相分り不申、又々当廿日比ヨリ、伏見へ會藩・桑名人數杯、過分ニ出来リ、御屋敷

ヨリモ、三小隊差越、外ニ長州・土州・藝州差越、イマタ歸リ不申、右之人數下国イタシ候様、応接ニ尾張様御越之由、廿七日迄ニテ歸リ不申、返答次第ニハ、打方薩州・長州・土州・藝州ニ被仰付候、決テ下国ニ相成ル模様承リ申候、若又相始リ申候得ハ、一信之尽力、御奉公仕考ニテ相待、毎日々々暮シ申事ニ御座候、扱又大砲隊之儀、御台所御門前ニハ、半隊ツ、ニテ、一昼夜ノ御堅メニテ御座候、然処衣服袴ニテ罷出候儀ハ相成不申、筒袖・バツチニテ罷出申候得ハ、寒サ中々難凌、最早衣服ニテモ売払申候テ、筒袖杯相求度ト相考候得共、先相見合置申候、又候、追々ハ外出之節モ、銃服ニテ外出イタシ候様、相成筈ニ咄御座候、金子六七両丈、御都合被成下、若又御都合出来不申候ハ、残シ置候刀ニテモ、御預ケ被下候^(奉)テ、得能氏^(長助)ニテモ御頼被下、一日モ早目便ヨリ、御登セ被下度奉願上候、人ヨリ見苦敷様子ニテ、出陣仕候得ハ、実以残念之次第御座候、右思召ヲ以、少シニテモ、御登セ被下度奉願候、左候得ハ、衣服杯売払申候テ、相添難有相求申候、何分ニモ飛脚便ヨリ、待奉申上候、扱又伏見之一条モ相分り申候ハ、早々可申上候、此節別紙式通差^(奉)

上申候間、御拜見可被下候、昨日ハ五ツ半時分ニテ、罷出候処、別紙ノ通順々有之筈ニテ候得共、少人数ノ処、先キニ相成、土州・藝州・長州・薩州右通順番ニ相成、私共昼八ツ時分ニ大砲手続仕、乍恐

朝廷日ノ御門前ニ出御、実以恐入難有事ニテ、能キ時ノ上京ニテ、無此上事ニ御座候、扱又三條様ヲ始、其外皆様、昨日御着ニ相成申候、当分ハ御国ノ御趣意通りニ、何ニテモ相成候御勢ニテ、無此上目出度御事ニ御座候、先ハ時候御伺奉申上度、最早当年モ無余日罷成、折角無御痛様被遊御保養候処、呉々ニモ奉祈上候、且歳暮之御祝儀奉申上度、一左右迄荒々如斯御座候、恐惶謹言、

卯十二月廿八日

園田新左衛門

實明



父上様
母上様

参人々御中

追テ申上候、当月五日飛脚便ヨリ、書状並菓子、御用部屋へ相頼差上申候間、最早相届候半奉存候、村岡氏へ別紙差上申候間、右之一条、委ク御咄シ可

被下候、扱又金子ノ儀ハ、返ス〜早自便ヨリ奉願上候、

六二六 伊地知左右衛門ヨリ同喜十郎へ書翰

只今、川北氏両士着伏相成、則拜面至極之御元氣ニテ、明朝爰許御出立ノ筈、任幸便一筆啓上仕候、寒氣之禰御座候得共、御両親様初上其外家中長幼、御無事之筈、大慶此事ニ奉存候、扱私ニモ去ル廿二日、三番四番隊へ、当月中伏見詰被仰付、当日ヨ（引脱乙）当所之様差越自于今元氣宿陣仕居申候間、左様思召可被下候、去ル九日以来之一条、追々御聞及モ候半、暫時之間、大騒動ニテ、何方へモ罷出相勤申候、当所ニモ、幕ノ歩兵其外新撰組杯籠居、大概千人余モ罷居候半、淀八幡辺へモ余多罷居候由、右取押へ方ニ、前件ノ通我々人数被仰付候、去ル廿五日尾州・越前両候

勅命ニテ、大坂ノ様被差越、一橋へ当所罷居候人数引取方其外、何ヶ条モ有之候半、申含方相成、若違背人数モ不引候ハ、イツレ

勅命ニテ討伐ニ相成ヨリ外（亦）〔分ノ趣〕ニ仕舞無之、左様候ハ、

此節ハイツレ一番ニ進ミ、高名ト日限ヲ日々相待居候事ニ御座候、何分今四五日モ日ヲ送り候ハ、黑白可相分、トフデモ此節ハ、必死ト相究居申候、昨日ハ京都ニテ、御国・土州・長州・越前四藩之調練、日ノ御門前ニテ有之、

朝廷御覽ノ由、誠ニ不容易事、皆々難有事、我々共前文通ニテ不罷出、残多事ニ御座候、只陣中ニテ師走モ正月モ頓ト不分、明ルモ暮ルモ、今日カ明日カト決心相待申候、此節ハ天下治乱之境ニテ、六ヶ敷所ニテ、可成無事治ル処、平ニ祈居申候、折角運強キ所、神仏御立願御願申上候、今度ノ一条委敷申上度、山々奉存候得共、当所宿陣ニテハ不相調、又々無異帰京ニモ候ハ、巨細可申上候、其方ヨリ十一日立之飛脚モ、今日京都へ着ノ由、決テ書状モ参居候半云々、此度ノ一条 御所ヨリ之書附杯モ写置候得共、御長屋へ残置候間、差上候儀モ不相叶、御遠察可被下候、当所每晚夜半ツ、交代、分隊ツ、不寝番、其上拾人計ツ、伏見中巡邏イタシ候事ニテ、中々退屈千万、御推量可被下候、未申上度事山々存候得共、後便ヨリ可申上候書余川北氏ヨリ御直、左右御聞取可被下候、節季ニテ彼是御

取込之筈ト被察申候、末筆ニ歳暮之御祝詞申上候、先ハ元氣存命之一左右旁申上度、如斯御座候、恐惶謹言、

伏見兼春宿陣ヨリ

十二月廿八日夜眺

伊地知杵右衛門

七ツ時認

伊地知喜十郎様

其外略ス

六二七 西郷隆盛ヨリ蓑田傳兵衛へ書翰

中将様先以御快方可被遊御座、恐悦之御義奉存候、陳ハ爰許之義、墓々敷運兼不申、徳川氏鎮撫之為、下坂相成候処、尚更模様悪敷相成、根拠ヲ占候場合ニテ、淀・伏見辺江人数を繰出、弥不平之色を顕し候様子ニ被相伺候候、尾侯憤発ニテ、御下坂と申時宜ニ罷成候処、越候杯御談合と相見得、御両侯より御建言之趣被為在候間、惣御参

内被成下度趣、御申建ニ相成候、其節ハ早尾公江ハ、御下坂御暇被下候折柄ニ御座候処、又両侯より之建言と相成候次第、御打合相成候事と相見得申候、然処両侯

より被仰立候趣ハ、畢竟是迄延引之義ハ、御尽力不被
為届処、斯迄遅々罷成候義、对 朝廷可申訳義と奉存
候間、此上ハ御沙汰書を以、被仰達候ハ、右を以申
諭、其上承服不仕候ハ、無致方義ニ御座候間、速ニ
追討之命を被下候ハ、親藩たり共親を絶て、可打と
の言上ニ相成、誠ニ立派之御口上にて御座候、然るニ
御沙汰ニ御注文有之、所領ハ矢張徳川氏之ものニいた
し置、御政務ニ付て之御用途文、差出との趣意ニ被相
伺申候、土・藝此説ヲ助けて、頻ニ御周旋相成候処、
朝廷ニおひてハ、確乎して御動不被為在候処、頻ニ歎
願いたし、別紙之通之御沙汰書ニ相成申候、右之御請
之有無ハ、正月元日中と、期限相立候間、其内ハ相分
可申、此義ハ必定御受之都合ニ相運候半、被相察申候、
是より慶喜を議定ニ引出し、何と欽策を廻し候半欽と、
大ニ苦心仕候事ニ御座候、乍然五卿方も昨日御着京相
成、余程 朝廷上ニおひても、御力付候訳ニ御座候間、
後藤之奸策も、被行申間敷と奉存候、此度こそ
朝威光輝不仕候てハ、不相濟時ニ御座候間、偏ニ渴望
仕居候、人心之帰向ハ、誠ニ奇妙なものにて、
王政を願ひ候義ニ御座候、紀州侯も上坂相成居候処、

是も勤

王を始掛、勤幕巨魁田中善一郎を誅戮し、其余五六人
擯斥し、京都江相詰居候三浦休太郎と申者も打下し、
国論余程相変し、此上ハ実行を挙て、衆人之疑惑を晴
すとの論にて、大坂より御暇ニ相成候処、

朝廷より御免相成、惣体大坂御引払ニ相成申候、是ハ
徳川氏ニおひてハ、余程之痛と被察申候、彦根藩ニお
ひても、是迄幽閉被致候人被召出、正論被相行候模様
にて、国中も半方ハ、勤

王論ニ相変し、是以始掛候義ニ御座候、備前ハ、確乎
として正論相居り、君公此廿四日御発足と申訳ニ御
座候処、只今御登相成候てハ、尾・越之論ニ説込られ
候半との壹岐・長門杯議論相起、暫上京ハ御見合相成
候て、事有る日ニ至り、王事ニ勤勞いたし候様、

朝廷より御達相成申候、因州杯も段々勤 王説を唱へ
出し、そろ／＼直掛候勢ニ御座候、近畿之小藩ハ、多
クハ帰向仕候勢ニ相見得申候、土州之論、勤幕欽、勤
王欽、訳か分り不申候、肥後之溝口孤雲・津田山三郎
并高崎^{正徳}左京、此三人ハ参与、戸田大和守ハ議定ニ被仰
付候様、容堂侯より御建言相成、決て参与ニハ御聞せ

なく、議定計にて被相決候様御申建、直様相運候義ニ御座候、高崎丈ヶハ

太守様江御尋と申訊ニ相成候故、御断ニ相成、一人丈ハ相残、外ハ皆被仰付申候、肥後之論是迄とハ、大ニ相違ひ候趣ニ被相聞候へ共、全反正之ものニハ無之候

処、悉後藤之論ニ説込られ、同論之味方を、駆込候手段と相見得申候、乍然追々長人も出来、五卿方も御着相成候故、少しハ後藤めも、落胆可致事と相考申候、

国中ニおひてハ、一人も後藤江服し候ものも無之、^(朱)乾^(退介)等江寄り、正論を立候者にて御座候得共、全体臆病も

の故、戦を恐れ、奸策を施し候次第、残懐之仕合ニ御座候、御苦察可被下候、桂大夫・小松大夫御兩人共、御召しニ相成、御兩人ながら、御登相成候てハ、御

国元之処、不相濟義と奉存候間、小松家早々御登相成、桂家ニハ御見合相成候方、宜敷ハ有御座間敷哉、御一人御京着之上、右辺之処、宜敷御願相成候ハ、

朝廷之処ハ、如何様共被成方ハ、可有御座と奉存候、いつれ桂家ニハ、御国元江不被為在候てハ、相濟申間敷と奉存候、全体

朝廷より之御召之訊ニハ御座候へ共、国を以被為尽候

ものなれハ、いつれ国之本堅不相立候てハ、被為濟間敷と奉存候付、宜敷御周旋可被成下候、

朝廷向之処ハ、如何様共尽力可仕候付、其段ハ御合可被下候、細大詳成義ハ、大久保より可申上候付、文略仕候、当分ハ昼夜寸暇無之、

朝議ハ毎徹夜、中々難儀之次第ニ御座候、少し道か付候ハ、御暇仕候て罷下度御座候得共、一向墓取不申、苦心此事ニ御座候、御遙察可被下候、恐々謹言、

十二月廿八日

西郷吉之助

養田傳兵衛様

追啓上、昨日土・藝・長・薩四藩之調練

観覧ニ相成、冥加至極難有次第ニ御座候、

日御門前にて御座候、

(島津忠承氏所蔵本にて校訂)

六二八 島津家記抄

去ル九日、從

朝廷依 召、

太守様御衣冠ニテ御參

内、尾張前大納言様・越前宰相様・安藝少将様、追々御参

内、右二付、当朝兵隊戎服之俣ニテ、罷出候様、御門並穴門等御警衛被

仰出、且当夜

摂政・関白・前左大臣様外、御二十人被止参

朝、三職入体総裁 (鎌仁親王) 有栖川宮様、議定仁(善形親王)和寺宮様、此

御方様迄御十人、参与大原卿外御五人、五藩士之内ヨ

リ、三人ツ、被 仰出候付、此御方ヨリ岩下(方世)佐次右衛

門殿・西郷吉之助・大久保一藏名前被差出候、左候テ

三條實美以下一族被止義絶入洛御復位、同夜

御室宮御還俗被 仰出候、且嚴寒之砌、苦勞被思召上

候ニ付、兵隊等へ御酒肴、追々頂戴被

仰付候、

一 右同日、

太守様議定職被為蒙

仰候付、御別紙御書付、一統可奉承知、左候テ

太守様

中将様へ月次御礼罷出候面々、席々謁之格ヲ以、佐次

右衛門御長屋へ相越、御祝儀申上、諸士之儀モ同断、

諸組与力ハ、夫々支配頭御長屋へ、貞君様並 (近衛忠房夫人、島津斉彬養女)

大奥其外様へ、兼テ御祝儀申上来ル面々ハ、毎之通申

上候様致通達候、右御書付写相添差越候条、其許御祝

儀之儀ハ、何分モ可被取計候、

一 右付、御家来三人参与被

仰出、左候テ、追々御酒肴等御頂戴ニ付テハ、口宣御

頂戴、即日御礼被 仰上、総裁様御初、議定職・参与

之御方々へ、

御廻勤被遊、将亦詰合御家来並隊中へ御酒肴等被下候、

御礼前文御礼済、御留守居以御使者、総裁様御初へ御

礼被仰上度、御留守居申出候付、其通被仰付答候、就

テハ口宣御頂戴ニ付、御献上物等之儀ハ、御同列様御

同様ノ被成向、可被仰付哉之旨申出候付、是亦其通取

扱可致候、

一 太守様議定職被為蒙

仰、且御家来三人参与被 仰出候段、

中将様被遊

御承知候上、参与衆へ御連署御使札ヲ以、御礼可被仰

上哉之旨、申出候付、尚亦御右筆頭等へ被致吟味、其

通之御書被差越度、左候ハ、爰許詰等之内ヨリ、御

使者ヲ以、被差出候様、取扱可仕候、

一隣国為御知且中山王承知、佐土原為知等之儀ハ、御吟味次第可被取計候、

一口

宣御渡相成候ハ、追テ何分モ可申越候、

右ハ

太守様御參

内、並佐次右衛門殿始之參

朝等之手続、且

禁中ヨリ之御達書等、別紙九通之廉々、御留守居申出

候付、相添此段申越候条、

中将様可被達

御聽候、先以不容易重大之御事件、御尽力御都合能被

為運、殊ニ議定職被為蒙

宣下、恐悦御同意奉存候、以上、

但

議定職被為蒙 仰候付テハ、

御所向御取扱向、軽重之次第、御留守居へ為致吟

味候処、何分重大之事柄ニハ候へ共、御官位等之

御振合ヨリハ、御軽目之御取扱之由、申出候段、

御意見等之儀ハ、及間敷哉ト致吟味候、乍然尚亦

於其許、何分被致吟味度ニテモ可有之候、此段モ為御心得候、

卯十二月廿八日

岩下佐次右衛門

島津伊勢

島津圖書殿

桂 右衛門殿

小松帶刀殿

川上龍衛殿

新納刑部殿

町田内膳殿

六二九 卯十二月二十八日付伊勢仲左衛門書翰ノ

内

一橋其外一味滞坂ニテ、伏見奉行所并淀城へ、歩兵・

新撰組四五百人計籠城、此御方人数四小隊、其外長・

土・藝ノ勢、去ル二十一日方ヨリ、伏見へ出陣相成居、

対陣之由ニ候、乍併只今迄ハ無事、右ニ付尾・越両候

可成不破様ニ、周旋ノ為トヤラ、願濟ノ上下坂有之候、
当分ニテハ如何成行トモ、難被推量御座候、末文略之、

六三一 中将様御召達書

御書付一通

但御変革ニ付、 中将様御召之儀、

参与御用掛

橋本安藝

羽倉肥前

伏見表狼藉者有之趣付、巡邏鎮定有之候様別紙ノ通、從
御所被仰渡候付、去ル二十一日七ツ時分ヨリ、三番隊
并高岡一番隊・臼砲手半隊被差出、私領二小隊ノ儀モ、
被差出置候得共、右丈ケハ翌二十二日引取相成、同日
四番隊一組被差出、自今出張相成居、只今ニテハ、先
平穩ノ向ニテ、何モ異変ノ儀無之候、御留守居首尾書
相添、此段申越候条、 中将様可被達 御聽候、以上、

卯十二月二十八日

島津圖書殿

島津伊勢

桂 右衛門殿

小松帯刀殿

川上龍衛殿

町田内膳殿

朱書

本文致承知、達

御聽御別紙等扣置、此旨及
御返答候、以上

右ヨリ御用之儀有之候間、只今一人可罷出旨、切紙到
来罷出候処、右兩人ヲ以、被相渡候ニ付、可申上旨申
述罷歸候、

右之通、私共差支、御留守付役遠武橋^(秀行)ニ相勸申候間、

御別紙相添、此段申上候、以上、

卯十二月十八日

内田仲之助

^(島津)
伊勢様

六三二 岩下佐次右衛門ヨリ新納刑部へ書翰

(白山上坂事件外国布告ノ事)

此節長崎表ヨリ、^{モンブラン}白山御同道、兵庫迄御出張相成、御
用筋ノ儀、禰寢武右衛門へ被申合越趣、致承知候、右

ノ内白山上坂、御屋敷へ止宿ノ儀ハ、兩三日相過、何分可申越候間、夫迄ノ間先只今通、兵庫滞在相成候様有之度、尤大坂御屋敷へ致出入候儀ハ、何モ差支無之候間、左様御含ミ、宜敷御取計可有之候、且外国布告

一条ハ、此内ヨリ朝議ニモ相成、既ニ勅使御差立ノ筋ニ、御内決相成、拙者ニモ致下坂候様、被仰付置候処、

五藩連印ノ場ニ至リ、物議相生シ、何分其筋運兼、乍然尾・越ノ兩侯、兵權差上ノ儀御尽力ノ賦ニテ、一七日ノ期限ヲ以テ、下坂相成、今明日中ニハ、何分御返

詞相成候日賦ニ候間、其趣ニヨリ、尚布告ノ運相付候様取計ノ筈ニ候、右ニ付テハ、委細ノ事情、書面ヲ以

難解候間、武右衛門儀爰許へ留置、右ノ兩条決シ次第、委細申合、早々可差返候間、左様御納得可給候、此段

申越候、以上、

卯十二月晦日

岩下佐次右衛門

新納刑部殿

六三三 太守公年始御礼参朝御断

私事、年始御礼元日辰刻参 朝可仕旨、蒙 命候得共、

不快有之参 朝難仕、御断申上候、此段宜敷御執奏奉願候、以上、

十二月晦日

薩摩少将

六三四 原市之進切害一件

一去ル十四日、原市之進横死ノ始末、処々ヨリ之探索ニ

テ、大体相分候得共、〔悉〔對馬〕〕榎本亨造ハ、当日板倉閣老旅宿

へ、始終詰切、諸事取計為有之由ニ付、翌十五日一同

榎本へ差越、相尋候趣左ノ通、

一十四日朝、遊撃隊ノ者ト申候テ、兩人原旅宿へ参リ、

対面願出候処、一応ハ取調候儀有之候間、逢候儀出来

不申段、被為断候由ノ処、一口申上度義有之候間、御

登城掛ケニテモ宜御座候間、鳥渡拜謁仕度段申出候付、

左候ハ、逢可申ト、居間之次之間へ通シ置、原ニハ丁

度食事中ニテ、食事相済月代取掛、家来共ハ勝手ニテ

食事イタシ居候砌、鏡モ不見、自身ニ髭ヲ剃居候処、

右ノ兩人、兼テ通口ヨリ居間へ踏込、市ノ進ハ矢張家

来ト相心得、振向モ不致、声モ不立、後ヨリ両肩ニ切

込、手モナク首ヲ刎、其俣首級ヲ提テ、玄関へ脱置候

刀モ不取走出、板倉へ差越、公用人へ面会イタシ度段申入、取次往復中、右兩人首級ヲ携、門へ參、幕人ニテ有之候段相答候得共、門ヲ不入、其趣玄闕へ相答候間、恒太郎ハ狼狽イタシ候歟、便所へ參リ候座立、他ノ間へ這入、書付ニ名札ヲ添置、致切腹候由、市ノ進旅宿ニハ、前条ノ物音ヲ知ル時ハ、最早首級ヲ提遁出候間、若党兩人中間忝人、直様追掛候由、兩人ノ者、板倉ノ門ハ明キ不申、追手ハ迫リ候付、忝人ハ門外ニテ切腹、忝人ハ急キシ故歟、脇差モ持不申候、自刃出来不申、彷徨イタシ居候内、原市ノ若党走り付仕留、兩人ノ首ヲ取、主人ノ首モ取返シ引取候由、原市ハ内奸ノ強人間ニテ、梅澤トハ雲泥ノ違ノ由、是迄ハ原市忝人計ノ邪魔人ト申事ノ由ニ御座候、勿論將軍ノ氣ニ入候由ニテ、尚更自威強キ事ノ由ニ相聞得候（幕吏中ニモ憎ム者多シト云）」

六三五 久光公御上京布達

近年海内多難、不容易形勢、就中長州御再討以來、益紀綱相乱、各藩割拠之勢相成候付、中將様天下之為、

深御憂慮被遊、御見据之次第、具ニ御認、昨年 朝廷へ御建白被遊、只管正大之御処置被 仰出候儀ヲ、御待相成候折柄、不凶モ 先帝崩御、当今御踐祚被為在候処、乍恐未御幼帝之御事ニ付、此末猶更異論紛起、人心混乱、竟ニ不可謂之世体、可立至歟モ難測、殊ニ又、攝海開港之期限モ相迫リ、旁以 朝廷之御安危、皇国治乱之界此時ニ候間、王臣ノ分ニ於テ、暫モ御傍觀ニ不被為堪、断然王室之御為、永世安固之御基本相立候様、御尽力被遊度御趣意ニテ、御上京御座候事、

六三六 五代才助ヨリ桂右衛門へ書翰

慶應三年比カ

從長崎

桂 右衛門様

五代才助

御直披

此節京師ニ於て、兵端相開候儀ニも立至候節は、各国江布告一条之云々、（幕老若上立也）岩下大夫より、細々御聞取被下候半歟、此件ハ最緊要之重事件ニテ、御布告之御書面ニ

より、各国の動静を究候事之由御座候付、克々御吟味之上、御認相成候様奉存候、勿論我朝ニ於て、感動いたし候文意と、彼の感する処は、大ニ異申候付、夫等之処も、御注目有御座度、岩大夫方御退崎後、長藩伊藤侯伊藤侯不傳之東春助出崎、彼よりも布告之議論相立、既ニ草稿相認参申候付、(家老新納判部)刑大夫より御披露相成候半、右之草稿は、彼之意ニ応相認候趣ニ候得共、拙もの欵と存居申候、乍恐右趣意大体御認、御送相成候ハ、(モツラ)白山ニも申談候機ニも、可有御座候哉、此段も御含迄奉申上候、
(桂久春氏所蔵本にて校訂)

六三七 〔伊勢左七郎ヨリ兄へ書翰〕

一筆啓上仕候、然ハ益御勇健被遊御座、無此上奉大悦候、随テ私ニモ無事、当月十二日、板橋宿へ安着イタシ候間、易尊意思召可被下候、爰許干戈ハ相止候模様ニテ御座候間、左様御納得可被下候、(編本興定利也)築田戦争ハ余程四番隊功ニテ、大垣モ同断ニテ、暫時ハ難戦ニテ御座候由、大垣ハ兼用隊ト申農兵兵隊四拾人・築造隊四拾人、城下兵共什長ニテ候半、長州ハ式拾人計之由、敵ハ七百人計ニ、大砲六挺所持、大砲分取相成、此方ヨリ式

挺相分候由、味方式百目計之筒、大垣ニ屯挺ニテ候由御座候、此節五番六番援兵無之候所ハ、甚以存外之儀共ニテ、御直ニ御咄可申上、本ノマ張巡之賀蘭ニ援兵ヲ頼候様事ニテ、戦前(編註)二川村與十郎殿へ逢、長々咄共イタシ、其後モ川村氏差越、色々咄共イタシ候、先ハ京師麥革ノ儀共起候由、形ヲ変候様之説承知、至テ愚存ハ残念之至存罷在候、先ハ任幸便如斯御座候、恐惶謹言、

辰乙 卯三月廿一日 伊勢左七郎

京師ニテ

兄上様伊勢奇七時在京師

参人々御中

尚々、伊勢仲左衛門様無事御座候間、左様思召可被下候、仲左衛門様ヨリ、別段書状差上不申候間、宜敷申上候様御頼ニテ、仲左衛門様ヨリ御用心金式両拝借候故、返済心配仕候、黒田次右衛門兄弟、無事ニテ御座候、

六三八 〔長崎奉行ト清国役人トノ往復書翰〕

六三八ノ一
三月

是ヨリ先、旧長崎奉行河津祐邦、書ヲ清国江南道ノ道台ニ遣リ、我航客ノ路引照驗ノ事ヲ謀ル、是ニ至リ、道台應寶時ノ復書至ル、

大日本長崎奉行河津伊豆守謹致書

大清国江南道大司憲台下、曩于壬戌年、前任高橋和美作守在崎間、特差僚属數員拜于 貴衛門面叩、通商事宜及伊等返權聞之、其在 上邦多承 垂青、懇切俾獲諸凡順遂、輒想、殷々之誼感不可言、極心早年申謝縁、前任交代、加以国家多故、遂致久曠音信罪甚々々、頃者我国与歐羅巴諸州迭相往来、我国或有公使奉 命出海、或有紳士商民附洋舶而、西者時常頗多行者臨發官給路照、又將其照驗印章、先行頒送西洋各国、以便查照、過客以此到处俱安、惟貴邦乃我航客首過之境、針路必由之地、況自往昔以来夙有交誼、非他国比、但此等事未曾举行、却与隣近貴国似不能、公然往来俾入境者、恰如平沙落雁、甚是失体、今者更有稟請、欲赴貴地伝習學術、或經營商業、就便僑寓者、向後、或有此等人來、望為照應、但恐干闌攔入、茲擬將其照驗印章呈送 貴衛門、以便查核符束、以照兩國符信、今託在留敝邦之

英国官吏、先行寄奉一書、即請 貴台斟酌金允一俟、咨回另当、專差縷述一切也、務望速賜答覆曷勝幸甚謹致、
慶應三年丁卯月 日

六三八ノ二

大日本長崎奉行河津伊豆守、謹ト書ヲ清国上海道台足

下ニ致ス、去ル壬戌歲、先職高橋美作守在崎中、我国官員數輩ヲ貴地ヘ差遣シ、通商等ノ儀面談セシメシニ、諸事都合克ク、懇切ニ取扱ハレシ趣、帰帆ノ上申聞、厚誼ノ段感謝ニ堪ヘス、速ニ謝辭可申進処、先職交代、加之国家多事ナルニ依テ、隔年疎闊ニ打過候段、多罪ノ至ニ候、然ルニ近年歐羅巴トノ往来相開、我ヨリ彼ニ航スルモノ亦多ク、時々我使節モ往来スル事アルニ、貴国ハ最隣近ニ在テ、針路必由ノ地、加之多年ノ交誼モ、他邦ノ比ヘキニアラサルニ、イマタ照應之印章ヲ附シ不置ニヨリ、却テ隣近ノ貴国ヘ、公然渡航不相成姿ニ相成居候ハ、甚以不都合ノ儀、且貴国ヘ商業相營、及学科修業ノ為メ、一時上陸、或ハ僑居等モイタシ度、願出候モノモ有之、右等ノモノハ、相当ノ免許ヲ得度、尤将来干闌取締、旁兩國符信ノ印章附送致シ置度候、是等ノ事情足下斟酌シ、承諾有之ニ於テハ、猶屬吏波

海セシメ、委曲縷述ナサシムヘシ、一応吾国ニ在留セ
ル英国官吏ニ托シ、書簡差贈候、速ニ回答アラハ、幸
甚ノ至ニ堪ヘス、謹言、

慶應三年丁卯月 日

六三九 大山格之助ヨリ大久保一藏へ書翰

一筆啓上仕候、先以貴公様、愈御壮常被為成御在京、
奉恭賀候、陳ハ西郷(從道)信吾之事、其御許ヨリ、先般廣島
表迄、被差出候由御座候処、夫ヨリ山口へ通行、馬關
迄、先月廿一日方出張相成、然処、吉井孝輔殿(友吏)へモ、
於同所面会相成候処、承知之趣有之、筑前宰府迄被差
越居候、然処、小倉表先月廿七日戦争後瓦解、九州筋
至極之穩ニ相成候得共、倉藩殘党、城下ヨリ七里程有
之候河原宿ト中所江屯集、又々廿七日方ヨリ、日々突
出イタシ、于今戦不相止、右ニ付、肥後藩ヨリ宰府表
ニ於テ、談判之趣有之、小子ニモ同所ヨリ、西郷氏同
道ニテ、六日爰許江着到、則前原彦太郎(一誠)、木戸貫治等(孝允)
江、引合次第二相及ヒ、当地ニ於テハ、程克打合モ相
付賦御座候処、又々一昨九日未明、倉藩島村志津馬手(家老侍取備)

勢ヲ以夜襲相掛、城下迄進入、同刻ヨリ昼八ツ時分迄
苦戦有之、乍去、双方共為指死亡モ無御座候、公通總
之小廻合ニテ、戦士ヲ苦メ候儀、当藩モ至極難波之様
子ニ御座候間、尚又、肥藩打合相付候様、乍不及尽力
仕事ニ御座候、尤倉藩之儀ハ、肥藩ヨリ何篇引受ト申
事御座候得共、島村一人動揺不致、是非奮死迄之決心
ニモ可有御座、彼方一向止ミ不申候間、自然ハ当藩ヨ
リ押詰、追落シ候場合ニ可立至奉存候、右之往々西郷
ヨリ委細御届申上候間、御聞取可被下候、先ハ右之形
行貴様迄申上置度、如此御座候、恐々頓首、
(慶應三年九)
九月十一日

大久保市藏様

大山格之助(綱長)

侍史

六四〇 加世田士指宿静藏送家書翰

一旧臘朔日ヨリ伏見御屋敷江、四小隊ニテ、半隊ツ、
一昼夜詰之警衛被仰付、我々隊ハ、去ル五日警衛ニテ、
朝六ツ時ニ、東寺出立イタシ、右ノ通首尾能相勤、堅
陣へ罷帰リ申候、就テハ最初有馬次郎兵衛殿組ニテ候

得共、隊中御吟味ノ詔有之候欤、萩原善助殿ト繰替相成、緒方諸右衛門殿与伍長役被仰付、愚子預リ与人数衆ハ、大山彌一殿・泊彦七郎殿・森裝次郎殿・有馬十郎兵衛殿ニテ候、然処、西剛右衛門殿・川越善内殿並愚子迄三人江、何篇ニ不限、第一急變ノ付候役被仰付候ニ付、私ニモ御存之通、万事不行届、素ヨリ愚情ニ候得ハ、旁以大功成役儀等、難勤存申候処ヨリ、頻リニ御断出候得共、強テ可相動様被仰付、無是非只今相動居申候、誠ニ不肖愚人ノ身ニ余リ、難有恥入次第御座候、乍併私ニモ能キ時世ヲ得、君ノ御用ニ相立様ニ相成、一人嬉敷存申候、若哉變動致到来於懸命之地ニテハ、一向身命ヲ投打、田舎生立之垢ヲ磨キ落度、折角励誠忠之存念御座候間、御明察可被下候、

臘月八日丁卯

指宿靜藏

貞綱

六四一 加世田士西剛右衛門送家書翰

一旧冬十二月九日王政復古御決儀ニ相成、會・桑九門内御固メモ、御差免被相成、帰国被仰付候得共、徳川慶

喜ト致同心、致下坂居、其以来始終物騒ニテ、私共ニモ昼夜不安寢食、毎夜程諸所へ斥候へ出張、寸暇無御座候処、去月三日晝七ツ時分、鮫島武兵衛殿・川越喜内殿・私三人江、隊長土持雄四郎殿ヨリ、御有之差越_{用腕}候処、伏見江変事有之候段承り候ニ付、斥候トシテ三人同道、直ニ出張、伏見御邸へ差越、出水・阿久根監軍有馬藤太殿へ致对面候処、会人並新撰組之者共、入路イタストノ事ニテ、本ノ幕府奉行所へ、会人共致滞陣候由、我国ヨリ有馬藤太殿・淵邊直右衛門殿、長藩兩人、土藩兩三人、都合六人、会人江応接ニ迄差越候処、終ニ手切レノ場合ニ相成候付、依 勅命此方ヨリ防キ候ヲ、無理ニ押通ラントイタシ候付、直ニ追払可相成候、左候テ、徳川内府事ハ、鳥羽街道通行ニテ、押々入洛賦候段承候付、依時機ハ、鳥羽街道ニテ相防ク儀ニ可相成旨、伏見出張御軍賦役有馬藤太殿ヨリ承リ、直ニ我々共ニモ罷歸リ、右ノ成行、隊長並監軍衆江届出、直ニ出陣ノ支度イタシ、相待居申候、

六四二 市來士高崎半兵衛書翰

一橋勢多人数上京之段相聞得候付、出陣用意ニテ罷在候様致承知居、私事早天本宮方へ御用差越候処、御城下隊追々繰出相成候御方へ、途中ニテ行逢相尋候処、都テ繰出相成候段承候ト、否走出、御屋敷迄走付御用承知仕、其俣東寺之様走帰り候処、鳥羽街道ノ様繰出相成候跡ニテ、即堅メ場所上鳥羽小枝橋マテ差越候処、御城下大砲隊・小銃隊、加世田・高岡隊ニモ、同所相堅メ罷在候処、大概七ツ時分ト思フ比、六七百人計之多勢相見得、即此方大砲隊監軍被差出、応接被相成候処、一橋明日上京ニ付、同人命ヲ請上京之段、彼方ヨリ相答へ、然処、此所 大命ヲ蒙リ相堅罷在候間、通行不相成旨御達相成候処、是非共罷通度及再三任申、夫迪モ是非等之思召モ御座候ハ、其御方考ニ可被成旨答へ相成候処、左様候ハ、形行ヲ以 天朝江御伺被下度申出、其通ニ可取計候間、其内御扣可被成ト申入置、参与御役所へ御引合相成、否モ不相分内、無程又々差越、暫ハ間モ有候得共、為何御返答モ不^{有脱カ}如何延引相成候哉ト相尋、無程可相分候間、今暫御扣有之様御達相成候得共、不得止事、多勢押寄踏通ノ勢ニ相見得候処、無致方此方大砲・小銃打出、互ノ砲戦相成、

市來分隊ハ御城下隊先へ繰出、堤ノ陰ヨリ横打ニ打掛、四方八方ヨリ相応相戦候処、敵散々相成、過半ハ上鳥羽村人家へ、城取候形チ相見得、火矢打込ミ相成候処、無間モ燃立、無程夜入大火相成、四ツ時分田之中へ兵引廻、終夜相戦、明ケ六ツ時分、砲声暫ク相止ミ、味方打死手負等モ無之、敵数多打死生捕、大砲・小銃其外武器分捕相成候、尤伏見之方ニモ、同刻時分ヨリ合戦相成、大概五ツ時分、同所火之手相見得、爰カシコ之大火ニテ、白昼ノ如ク有之候、
一賊徒打払候様 御勅命相下り候、

六四三 加世田土土持雄四郎送家書翰

一去月五日ヨリ、追々御仕出之御尊書追々相届、忝拜見仕候処、御家内様ヲ始、御親類中様御堅勝被遊御座候由、目出度奉存候、随テ私ニモ、不相變元氣ニテ相勤申候間、易尊意思召可被下候、扱当表ニモ、先書ニ申上候通、静謐之模様ニテ、諸藩ノミ誠ニ賑々敷、諸侯方モ追々御上京、土佐公・廣島公杯モ、最早疾御着京相成、長州モ先頃幕ヨリ御召トヤラニテ、山崎辺

迄三百人位モ罷登リ、跡残りハ、西之宮辺迄罷登居候由、是迄余程會津ナト、余程威張り居候由候得共、右式勤

王之兵多分上京相成候処、少シハ辟易ノ姿ニ風評有之、不遠目出度御代ニ立歸リ候半ト被察候、

一 去月廿六日、御屋敷ヨリ御用有之、罷出候処、

太守様御同座、且脇差帯シナカラ、御城下並諸郷一番隊ヨリ、順々同席、小隊長・監軍・差引入ト席順ニテ、御拜謁被仰付、

太守様御直ニ 御沙汰被為 在候趣ハ、先度ヨリ罷登リ致苦勞、就テハ不容易時節ノ事故、隊中ノ取締ハ勿論、毎朝ノ訓練ヲ致勉強、非常之節忠勤ヲ頼存候ト、御沙汰被為 在、誠ニ以難有恐入次第御座候、何事モ御城下同様被仰付、御賄料等モ別紙ノ通被仰渡、重畳難有次第実ニ身ニ余リ、十方ニ暮罷在候、乍然田舎ノマヤスミマニ、頭ノ下ケ通シヨリハ、武門ノ冥加不可過之ト奉存候、御歛可被下候、

右任幸便、一左右迄奉得尊意度、如此御座候、誠惶謹言、

卯十二月八日

土持雄四郎

父上様

追々別紙写差上申候、

諸郷小隊長其外諸役者御賄料ノ儀、御城下同様、被成下候条申渡、可承向江モ可申渡候、

但私領ノ儀ハ、是迄ノ通被成下候、

十一月

伊勢

右之通被仰渡、小隊長ニ八十一人賦被成下候、

六四四 薩・長・土三藩合議ノ要目

薩州小松帶刀・西郷吉之助・大久保一蔵、長州廣澤兵助、

品川彌二郎、藝州辻將曹・植田乙次郎、寺尾庄十郎ノ諸

士、打揃ヒテ、中山忠能・中御門経之ノ両卿ニ謁シテ、

三藩合議ノ要目ヲ呈シタリ、其文ニ曰ク、

一 三藩軍兵、大坂着船ノ一左右次第、朝廷向断然ノ御尽力、兼テ奉願置候事、

一 不容易御大事ノ時節ニ付、為朝廷抛国家必死ノ尽力可致事、

一 三藩決議確定ノ上ハ、如何ノ異論被聞食候トモ、御疑惑被下問敷事、

六四五 薩・長・藝三藩大議ニ依テ事ヲ挙ルノ旨趣

ヲ述タル文

即今皇國ノ形勢ヲ、推考熟慮スルニ、乍恐旧臘先帝崩御、新帝御幼弱ニ在シ、天下諒闇ノ時ニ方リ、万人悲歎号泣、実ニ皇國ノ御厄運、御大事無此上候処、近年外患内憂、日二月ニ差迫リ、不可謂ノ御危急、宝祚ノ命脈存亡ニ可相係折柄ニテ、深淵薄氷ノ心地、晝夜忘寝食苦慮致候次第ナルニ、猶幕府ハ、癸丑・甲寅以來、違勅調印取結、其余失体ノ条々不少、畢竟朝廷へ奉對、君臣ノ大道ヲ取失ヒ、就中幕府若・老連署ニテ、七八年乃至十ヶ年ニハ、必然攘夷成功ヲ可遂ト御約束、皇妹ノ隆嫁ヲ乞ヒ候等、欺罔万端、其余偏執邪曲放肆縱橫ノ政、人望殆ト尽キ、痛怨離叛ノ極、終ニ上巳・上元ノ變故、或ハ大和・筑波ノ擾乱ト相成、殊ニ御再討以來、人心洶々、米価騰貴、諸色高料、民不堪命シテ、京播間畿内ノ商民、混乱ヲモ相呈シ候ニ至リ、且又防長ノ儀、甲子冬尾張總督御征伐トシテ被差向、三謀臣首級備実檢、伏罪ノ道相立、解兵相成、朝廷寛大仁恕ノ御趣意ヲ以テ、五卿護送、大膳父子出府等ノ暴

令ヲ閣キ、早々大樹公上洛有之候様、乙丑三月再庇勅命ヲ下シ賜リシヲ、御構モ無之ノミナラス、不容易企有之趣ヲ以テ、再討トシテ大軍ヲ率シ、御進發上洛參朝ノ節、尚ホ寛裕ノ聖慮ヲ以テ、被及御沙汰候御書面返上、同冬大小監察下藝、一応御礼明有之候処、御不審筋無之候ニ、軍勢御引揚モ無之、大膳父子蟄居、與丸家督十萬石削地ノ御裁許被仰渡、為名代差出置候家老穴戸備後介等、御拘留ニ相成、右御沙汰ニ付テハ、長防士民歎願中、父子達命ニモ及ハサル内、期日ヲ刻シ、問罪ノ師ヲ被差向、^(挿九)擲命ノ者、御誅鋤ノ布告ニ候処、丙寅六月七日ヨリ、大島郡へ乱入、無辜ノ婦人小兒迄、襲殺ノ暴挙ヨリシテ、始テ戰ト相成、天下ノ大乱ヲ引出シ、幾許ノ蒼生ヲ殺シ、暴戾慘刻ノ所為、絶言語次第ナリ、固ヨリ無名ノ妄挙、条理顛倒ノ始末、長防士民中ニ於テ、堂々タル天幕ノ旗旆ヲ奉迎望道理モ無之、於是天下益々異議ヲ生シ、憂國ノ諸藩(尾州・越州・因州・備州・藝州・阿州・宇和島・薩州)名分大義ヲ論シ、屢建言致シ候ヘトモ、反テ嫌疑ニ触レ、同八月言上ノ趣有之、為名代、一橋中納言追討トシテ下藝、御暇迄モ相濟候処、九州出兵ノ諸藩、解兵ノ一左右ヲ

以テ、忽チ名代発向、追討ノ御断被仰立、大樹公喪ニ依リ、兵事見合候様、御沙汰相成、尚ホ諸藩ヲ被召、見込御推問、衆議帰着スル所ヲ以テ、御処置可被成旨被遂言上、昨冬ヨリ追々諸藩上京、及当春再応ノ詔命ニ奉応、於四藩モ拜趨致候形行ニ候処、前件幕府從來ノ失体ヨリ、災害百出、事蹟顕然、就中長防再征討ノ始末、是非曲直瞭然相分リ候ヘハ、大樹公御継業、御維新ノ時ニ被為当、善惡邪正ノ分御猛省、断然反正悔悟、天下ノ公議ニ被為則、朝廷尊奉、百姓撫恤列藩ヲ親ミ、納諫求治、国事御奮勵被為在候ヘハ、拯溺扶顛ノ御功業相遂ケ、皇国ノ治可足見ト、四藩談合決議、再三登宮ノ上言上、長防ノ儀、御行掛リノ事ニ候ヘハ、第一大膳父子官位復旧、平常ノ御沙汰ニ被及候ハ、御反正ノ実蹟相顕レ、国内和同一致ノ基本モ、相立候筋合ニ候間、次ニ兵庫開港事件ニ被及、順序相可適旨ヲ以テ、及論議置候処、終ニ五月廿三日、大樹公參朝、両事件言上、朝廷紛議、衆評御一定ニ至リ兼ネ候ヘトモ、強テ被遂奏聞、無御余義御沙汰相免シ、全ク両三ノ御方ニテ、御私決相成候姿ニ候処、四藩モ同様言上云々御文言等、事実顛倒致シ、再三御伺ニモ相及候、然

ルニ長防寛大ノ処置、早々取計候様御沙汰ノ処、不可行妄議ヲ以テ、遷延候内、藝州モ(紀伊守)上京、四藩同様ノ趣意ヲ以、屢及建言候ヘトモ、是亦度外ニ差置、今日ノ次第ニ相及ヒ、実ニ不堪慨歎、痛切之至候、抑モ征夷大將軍ノ職任タルヤ、誠心ヲ披キ、公道ヲ布キ、揆乱濟世ノ職ヲ被尽候テコソ、当然ノ事ニ候処、反テ列藩ノ公議ヲ退ケ、蔽非遂邪ノ御趣意増長相成候儀、徳川氏衰運ノ然ラシムル所以歟、将タ天不祚宗社ノ謂乎、今日大樹公列藩公儀ノ御取捨ハ、御心術ノ正否ニ依ル、御心術ノ正否ハ、皇国浮沈ニ関スル所、皇国浮沈ニ関係スル、何ヲカ是ヨリ大ナラン、此時ニ方リ、苟モ安ヲ偷ミ、傍觀黙止スル時ハ、益々禍心相募リ、朝廷ヲ掌握シ、暴政意ノ如クニシ、外患内憂一層ノ大事ニ相及ヒ、股鑑不遠、戊午以來、皇国今日ノ大難アランコトヲ恐レ、憂国ノ諸藩東西ニ奔走シ、王事ニ鞠躬シテ、国家疲弊シ、終ニ斃レント欲シテ止ズ、今般ノ一挙トナル、人事既ニ至レリ尽セリ、前件重大ノ罪蹟、明カニ御心術正否、著ク皇国浮沈ノ機、燦然タル上ハ、寸毫モ余論ヲ容ルノ地無之候ニ付、大義ノ所在ヲ明ニシ、王室恢復ノ赤心ヲ貫徹シ、干戈ヲ以テ其罪

ヲ討シ、奸兇ヲ掃攘シテ、国家長久ノ基ヲ開キ、上奉安宸襟、下万民塗炭ノ苦ヲ救済シ、万死ヲ以テ、藩屏ノ任ヲ尽シ、累代ノ洪恩ヲ奉報度、今此両三藩不可制ノ忠義、暗合奉朝命揚大義、敢テ吞噬奮攘ノ意、端ニ不出ノ至情ヲ陳述スル者ナリ、

六四六 三藩連署建言

一今般幕府、政權ヲ

朝廷へ奉還仕候次第、誠ニ以復古之御大業、数百年來之英断ニ御座候テ、御国体御変革、宇宙間ニ御独立可被遊御基本ニ候得ハ、微賤之私迄モ、深ク天下之為ニ奉恐悦候、就テハ衆庶議事之意ヲ以テ、諸藩士共へ被召出、廉々御下問被仰付候義ニテ、謹テ奉言上候、

一德川家取扱掛之廉々、当時伺出之通被仰付置、召之諸侯会議之上、御確立被遊可然哉ニ奉存候、

一脱走公卿方、近々上坂之聞有之趣ニ御座候得共、推テ

右等之次第ニ相成候義ニハ有之間敷候、召之諸侯會

議初発ニ御裁断被仰出、長防御所置、同時ニ相成

可然哉ニ奉存候、

一外国取扱之儀ハ、暫時趣方之通被聞、召之諸侯會議之上、

皇国一体ヲ以、

朝廷之門条約可被為結、尤兵庫開港之処ハ、今般右変革ヲ以、国体変換之談判ニ及ヒ、被差延ニテ可然哉ニ奉存候、

右件々、当時上京仕候三藩之者共、同意仕候付、乍恐連名ニテ申上候、尤書外猶又口達ヲ以、言上可仕候、誠恐誠惶頓首謹言、

御名内

關山 札

松平安藝守内

辻将 曹

松平土佐守内

後藤象二郎

福岡藤次

神山左多衛

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編

慶應三年十二月ノ三止

目錄

金子清邦小伝

贈位者列伝

侯鯖録

茂久公密示王政復古ノ発端

伏見市・在取締被命

大政奉還藩内布告

方今ノ形勢総論愚考内田政風

薩・長・土・藝調練天覧

壬生修理權大夫上京

尾・越両侯参内ニ就テ参朝御達

戦死者へ恩賜

茂久公相國寺林光院御参詣

広ク人材御登用云々小松帶刀御召

桂右衛門御召

長州薩・藝二藩ニ依頼ノ書

岩下・西郷・大久保意見書

茂久公議定職御拜命布告

久光公御上京御召達書

品海ニ於テ薩艦ノ砲撃始末

旧上山藩江戸鹿兒島藩邸浪士討伐始末

芝三田鹿兒島藩邸討伐始末補遺

栗本鋤雲翁ノ自伝

某將軍昔日談江戸薩邸焼討チ並徳川ト薩摩ノ海戦

向山黄村翁

阿久根新助書翰抄

勝安房守意見書

六四七 金子清邦小伝(島津藩邸焼亡ノ概況)

(堤和保氏寄稿)

金子氏名ハ鎌、字ハ鳴郷・得處ト号ス、通称初與三郎ト云ヒ、後六左衛門ト改ム、清邦ハ其諱ナリ、文政七甲申、出羽ノ国村上郡上ノ山ニ生ル、人ト為リ温良寡言、幼時遊戲スルニ、群童ト是非ヲ争ハス、人以テ痴鈍トナス、然レトモ天性文武ヲ好ムヲ以テ、古今治乱興亡ノ談ニ至リテハ、成人ニ讓ラス、論判頗ル明確ナリシト云フ、天保十年秋年十六、友人二三ト山行ノ帰路、壽仙寺ノ境内ヲ過ク、寺ハ城下ノ一大禪刹ニシテ、住持壺天和尚ハ、当时行解相応ノ聞ヘ高カリシカ、時偶庭中ニ在リ、留メテ酒ヲ勸メ、視ルコト良久フシテ杯ヲ挙ケテ、氏ニ囑シテ曰ク、吾子ノ眼中、人ニ異ナルモノアリ、若シ事アラハ、宜シク憤發スヘシ、他日蔵王岳ニ雲ヲ起サンモノハ、必ス吾子ナルヲ知ルト、岳ハ陸・羽二州ニ跨リ、封境第一ノ高山ナリ、和尚依テ言フ、友人栗山道紹氏ヨリ長スルコト四年、同行ニ在リ、和尚ノ言ヲ奇ナリトシ、交ヲ結フ愈深フカリシ、同十二年栗山道紹ト共ニ、仙臺ノ儒臣大槻平泉ノ門ニ入り苦学ス、往々徹夜スルニ至レリ、

一日諸子ト大學ヲ輪講シ、徳ハ本也・財ハ末也ノ章ニ至リ、問フテ曰ク、凡ソ国家窮乏シ、既ニ沈淪セントスルニ及ハ、如何ナル才徳ノ人ト雖、財ニ非スンハ仁モ徳モ施スル処ナカラン、是時ニ当リテヤ、財ハ本ニシテ、徳ハ末ナラン歟、平泉笑テ曰ク、固ヨリ国家ヲ治ムル、一日モ財ナキ能ハス、左レトモ徳ヲ以テ生スルニアラサレハ、皆道ニ悖テ入ルノ財ナラン、故ニ徳ト云ヘハ、財ハ已ニ其中ニ在リト、是ヨリ意ヲ国家經濟ニ注ク、益深カリシ、年二十一大槻氏ヲ辞シ、江戸ニ赴キ、昌平覺ニ入り、昼間甚タ勉メス、好テ人ト談論ス、人以テ怠惰生ナリトス、夜間人定マルノ後、兀坐シテ書ヲ読ミ、天明ニ至ルヲ以テ常トナス、同僚皆之ヲ異シム、独リ頼三樹(樹)三郎挙止ヲ同フスト云フ、弘化四年春年二十四、昌平覺回禄ニ罹ルヲ以テ国ニ歸リ、藩校明新館ノ都講ニ任ス、二十五ニシテ徒頭ニ任ス、時ニ太平ノ余弊士民率ネ都雅文飾ヲ喜フ、氏深ク之ヲ憂フ、又政道ノ旧習ニ拘泥シテ、時ト推シ移ラサルヲ歎キ、将ニ大ニ之ヲ矯正セントシ、数々建白シテ時事ヲ痛論シ、為メニ譴責ヲ蒙ルコト数回ニ及フモ、曾テ心ニ介セサルモノ、如シ、常ニ朴素ヲ旨トシ、粗服独行、古格ニ合ハサルノ挙動多キヲ以テ、人

多ク目ヲ側テ、唇ヲ反スニ至ルト云フ、兵式ニ於テ一藩中独リ所見ヲ異ニシ、山形藩士山田^(兵馬丸)丘馬ニ就キ、高島流即チ蘭式ノ操練及火技ヲ学ヘリ、當時ノ藩士未タ蘭式ヲ学フモノナキヲ以テ、人皆以テ奇ヲ好ムトナス、此冬文武修業ノ暇ヲ請ヒ、北陸ヨリ畿内・山陽・山陰・四国・九州ニ至ルマテ周ク經歷シ、広ク有志者ヲ訪ヒ、学理ヲ論シ、時事ヲ談シ、且ツ長崎ニ於テ新式ノ火技操練ヲ伝習シ、嘉永六年夏帰国シテ、徒弟ヲ集メ新式ヲ授ク、當時攘夷鎖國ノ論盛ニシテ、洋風ヲ用フルヲ忌ミ、之ヲ排斥スルモノ少ナカラス、終ニ百方尽力薰陶シタリ、後藩主大坂城加番ノ命ヲ奉スルニ、從フニ方リ英式ニ改メ、竟ニ一藩ヲシテ同一ニ帰セシムルニ至リタリ、且旧風ニ拘ラス、新法ヲ採用スルニ付テハ、屢々執政ヲ面責シタルヨリ、是年八月禁錮セラル、コト三旬、禁錮中日ニ七律一首ヲ賦スルヲ以テ、課定トナシ、東ヨリ威ニ至リ、悉ク慷慨悲壯ナラサルモノナシ、外舶ノ浦賀ニ來ルヤ、海内人心恟々、氏窃カニ水藩士藤田虎之助ニ就キ、中納言齊昭公ニ書ヲ獻ス、杞憂臆策ト題シ、凡テ二十二ヶ条、現在ノ事実ヲ述、將來ノ勢ヲ計リ、之ニ処スルノ方策ヲ切論ス、其大意ハ海岸防禦ノ要ハ富國ニ在リ、大業ノ根

本ハ政道一新ニ在リ、大樹公主トシテ天子ヲ尊奉シ、勉メテ簡易ニ隨ヒ、總テ民ノ障害トナルヘキモノハ、悉ク之ヲ除キ、小勢ヲ以テ國主諸侯ヲ率ヒ、時々上洛アルヘシ、海岸防禦ハ奏聞ノ上、最寄其國ノ遠近ヲ測リ、參勤交代ノ日數ヲ減縮シ、以テ諸侯ニ及ホシ、又諸侯ノ内室ヲ封地ニ就カシムヘシ、農兵ヲ起スヘシ、和蘭陀ヨリ、船工ヲ傭入シ、大艦ヲ製造ス可シ、冗費ヲ省キ、虚飾ヲ去リ、人材ヲ選ミ、事ヲ施スヘシトノ方法ニシテ、一モ緊要ナラサルモナカリシ、安政二年書ヲ執政ニ致ス、心ノ俛ト題シ、人ヲ用フルノ道又施政ノ要ハ、古格旧例ヲ顧ミスシテ、決斷ノ二字ニ在ルコトヲ詳述シ、読者ヲシテ敬服セシム、後チ命アリ、世子ノ傳トナル、氏建議シテ世子ヲシテ、安井^(貞軒)仲平・鹽谷^(世弘)甲蔵ニ家ノ門人タラシメ、一月兩三回、各其家ニ就キ講義ヲ聞カシメ、又桃井春蔵ヲ師トシテ劍術ヲ学ハシム、當時諸侯ノ世子ニシテ、文學ノ師ニ其家ニ就クモノ、蓋シ世子ヲ以テ初トナス、同五年建議シテ曰ク、世子齡已ニ志学タリ、藩士ノ情況及邑民ノ苦樂ヲ察シ、加フルニ山川ヲ跋涉シ、風雨ヲ冒シ、軀幹ヲ強健ナラシムルハ、尤モ今日ノ必要ニシテ、地理人情ヲ実視セハ、將來ノ裨益多カラント、終ニ之ヲ幕府

ニ請フ、然レトモ諸侯ノ世子ヲシテ封地ニ就カシムル、未タ其例ナキヲ以テ、幕議之ヲ聽サス、是ニ於テ氏、閔老久世大和守ノ臣杉山某ニ就キ、諸侯ハ一藩士卒ノ元帥(分属 関宿藩主)タルヲ以テ、徒ラニ旧例ヲ墨守シ、累茵安居ス可キノ時ニアラサルコトヲ陳弁シテ、固ク請フテ止マス、久世侯窃カニ命ヲ伝テ曰ク、幕府モ亦其挙ヲ以テ不可トナスニアラス、然レトモ唯未タ其例ナキヲ以テ、公式ヲ以テ之ヲ許スベカラス、子夫レ宜シク之ヲ謀レト、是ヲ以テ病ニ托シ、封内ノ温泉ニ浴センコトヲ請フ、許サル、秋世子ニ扈從シ封地ニ入り、藩内諸般ノ実況、封邑庶民ノ情況ヲ視察セシメ、大ニ養老ノ典ヲ挙ケ、其七十以上八十ニ至ルマテ、延テ之ヲ見ル、九十以上ハ、世子自ら其家ニツイテ之ヲ見ル、皆賜フニ金帛ヲ以テシ、各差等アリ、是皆氏画策スルトコロナリ、又規則弁言四十七目ヲ撰ミ、近傍ノ士ニ示シ、且ツ曰ク、時世ヲ鑑ミ、少・壯・老三時ノ順次ニ随ヒ、例令旧規家法ト雖、其改ムヘキハ改ムルニ如スト、是ヨリ士風民情大ニ新シタリト云フ、同年物頭ニ任ス、上書之ヲ固辞ス、藩主親書ヲ賜ヒ、慰諭シテ聽サス、竟ニ拜シ益々文武ヲ鼓舞シ、士風ヲ振起セント訓メ、規模宏遠能ク人ヲ容ル、ヲ以テ、名當時ニ著ハ

ル学士文客ニ論ナク、志士ノ来リテ交ヲ入ル、モノ多カリシ、若シ志士ノ窮スルヲ見レハ、贈ルニ金衣ヲ以テス、故ヲ以テ自家ノ生計常ニ薄キヲ致セリ、又曾テ劍客齋藤彌九郎ノ門ニ於テ、萩藩士桂小五郎ノ塾長タルニ際シ、(電喜)門人不平ヲ鳴ラシ、小五郎ヲ刺サントス、齋藤之ヲ苦シム、氏ニ依リ調和センコトヲ需ム、氏即チ其塾ニ至リ、衆ニ説キ和解セシメ、小五郎ノ塾長タルコト元ノ如シ、小五郎之ヲ徳トシ、尔後親シク相往来シ、他ノ壮士モ亦来リ交ハルモノ多シ、小五郎ハ則故參議木戸孝允ナリ、其重ンセラル、コト斯ノ如シ、萬延元年三月、側用人ニ擢テ、參政ヲ兼ネシムルノ命アリ、上書固辞スル數回、再度親書ヲ賜ヒ、懇諭シテ職ニ就カシム、藩地ハ山間ニ僻在シ、運輸便ナラス、瘠地貧民少シトセス、民智開ケ、動モスレハ争鬪訴訟シ、刑辟ニ陥ル者多シ、(ママ)群吏ハ法ニ依リ聽断セサルヲ得スト雖、畢竟無智ノ頑民ニシテ、教ヘサルノ責又政道ニアリト、常ニ之ヲ憂フ、政務ニ參スルニ及テ旧慣ヲ变革シ新政ヲ施スモノ頗ル多シト雖、首トシテ冗費ヲ省キ、次テ社倉ヲ起シ、之ヲ各村ニ設置シテ、以テ凶荒ニ備フ、又窮民ニ米金ヲ貸与シ、田畑ヲ質入セシモノ、如キハ、之ヲ請返サシメ、其額ニ応シテ數

年間二年賦トシテ、之ヲ返納セシムルノ法ヲ設ケ、尚教導方ヲ置キ、封内ヲ六区ニ画シ、三名ヲ以テ区内ヲ負担セシメテ、日々区内ヲ巡回シ、専ラ人倫ノ要道ヲ説示シ、傍ニ農事ヲ奨励セシメ、又徒刑場ヲ其役処ノ側ラニ設ケ、犯罪者ヲ繋留シ、詢々教戒シ、相当ノ事業ヲ採ラシメ、其賃錢ノ内ヲ以テ食ヲ償ハシメ、余ハ改心ノ実跡顯ハルノ日、之ヲ附与シテ其業ニ就カシム、是レヨリ先キ罪人ヲ遇スル苛酷ニ過クルモノアリ、是ニ於テ漫ニ鞭笞セシメス、又徒刑中片鬢片眉ヲ剃リテ、常人ト異ナラシムルハ、懲戒ノ意ニ外ナラスト雖、赦免ノ後尚數月ヲ經サレハ、常ニ復スルヲ得サルヲ以テ、刑ヲ無罪ノ日ニ及ホスモノナリト、乃チ幼者ノ如ク前髪ヲ蓄ヒ、赦免ノ日之ヲ除カシム、蓋シ成童ヨリ進ンテ、丁男ニ入ルノ儀ニ取ルト云フ、又藩ノ子弟ニシテ、文武ニ志アルモ^{多脱カ}字資ニシク、為メニ志ヲ果タサ、ルモノアルヲ憂ヒ、程度ヲ定メ、藩費給与ノ方法ヲ設ク、是ヨリ藩士文武ノ道大ニ進ム、又明新館ノ書籍ヲ普ク藩士ニ借覽セシムルニ難キヲ慮リ、活字版ヲ購求シテ、諸書ヲ翻刻セントスルニ当リ、国家益多事、竟ニ果サス世子ノ封ニ就クヤ、米澤ノ儒臣山田長四郎ヲ聘シ、世子ヲ始メ一藩子弟ノ師トナス、其往来

必ス世子親ラ其封境ニ送迎ス、是ニ於テ、庶民文学ニ務ム可キコトヲ知り、子弟ヲシテ学ニ就カシムル、日ニ多シ、文久元年五月、世子ニ随ヒ封境ヲ発シ、越後ノ別封ニ至リ、普ク之ヲ巡視シ、農事ヲ奨励シ、養老ノ典ヲ行ヒ、江戸ニ入ルノ途次、草莽ノ学士原俊蔵及高田ノ儒員東條文蔵ヲ訪ハシメ、上田藩ニ至リ、擊劍ヲ試ミシメタル等、皆氏ノ誘導スルトコロナリ、同二年四月俸ヲ加フ、秋幕府頼三樹三郎其他国事ニ死セシモノ、碑ヲ仆シ、其銘ヲ消スト聞キ、慨然夜ニ乗シ潜ニ之ヲ復ス、十二月大將軍家茂、其国家ニ勤勞アルヲ嘉スト云ヲ以テ、延見ノ命アル前後三回、毎ニ病ト称シテ拝セス、慶應二年正月、中老ニ進ミ、禄二十石ヲ加賜ス、秋大旱米価騰貴シ、小民之ヲ苦シム、時ニ有司廩米千苞ヲ発シ、之ヲ救助セントスルノ議アリ、氏之ヲ聞キ建議シテ曰ク、凡ソ民ハ徒食セシムヘカラス、宜シク事業ヲ与ヘテ、之カ糊口ヲ授クヘシ、今ヤ川口村忠川築堤ノ事ハ、尤モ必用ナリ、貧民ヲシテ之ニ従事セシメ、食糧ノ外日ニ米一升ヲ給セハ、飢ヲ免カル、ヲ得可シト、議行ハル、欣然役ニ就クモノ四百人、翌年三月ニ至リ功ヲ竣ル、其周圍三十余町堤防五十間、深サ二丈五尺、下流ノ村落灌溉ノ便ヲ得テ、旱

損ノ憂ヲ免レ、瘠地ヲ開墾シテ良田トナスモノ、年々ニ増加シ、今ニ至テ其徳ヲ称ス、是ヨリ先キ藩負債多ク、累年用度乏キヲ告ケ、一藩ノ供給殆ント支ヘ難ク、吏員之ヲ苦シム、氏ノ政務ニ参スルヤ、養老ノ典ヲ挙ケ、窮民ヲ救恤シ、文武ヲ奨励シ、諸般ノ新法ヲ施キ、更ニ費額ヲ増スモノアリト雖、一ニ冗費ヲ除キ、不急ノ事業ヲ閑クニ止リ、毫モ民ニ課スル所ナク、十年ヲ出スシテ、殆ント藩債ヲ償却シ、社倉ノ外ニ數十ノ倉庫ヲ起シ、金穀ヲ蓄積シ、士風ヲ振作シ、風俗ヲ改良シ、終ニ民ヲシテ徳ヲ慕ヒ、醜金シテ以テ之ヲ助クルニ至ラシメシハ、皆氏ノ力ニ依レリ、山田巖堂詩ヲ賦シ、堯雨舜風三万封ノ句アリ、教化ノ蹟以テ証スヘキナリ、嘉永癸丑、外船ノ初メテ浦賀ニ来ルヤ、物議囂々人心恟々、内ニハ攘夷ノ勅命アリ、諸侯モ亦攘夷ノ議ヲ献スルモノアリ、外ハ則チ外国ノ要請アリテ、将ニ兵端ヲ開カントスルモノ、如シ、為メニ朝幕ノ間離隔シ、幕府ソノ措置ニ苦シム、氏憂慮シテ以為ラク、先ツ公武ノ一致ヲ為スニアラサレハ、之ヲ処スル難シト、是ニ於テ大藩ハ云フモ更ナリ、苟モ困事ニ志アルモノハ尽ク交通シ、就中既肥ノ安井仲平、山形ノ鹽谷甲藏、田中ノ芳野立藏、佐賀ノ古賀一平、

枝吉平左衛門、高知ノ松岡七助、久留米ノ作田脩平・池尻茂左衛門、鹿兒島ノ黒田嘉右衛門、三玉三平、萩ノ桂小五郎、熊本ノ津田山三郎、田中彦右衛門、仙臺ノ但木土佐、備中松山ノ山田安五郎・川田剛、和歌山ノ津田出三浦五助、會津ノ手代木直右衛門・秋月悽次郎・南摩綱紀・武田完平、米澤ノ山田長三郎、大瀧新藏、相馬ノ錦織四郎大夫、天草ノ吉田大八、幕臣ニハ杉浦兵庫頭、澤左近将監、処士ニハ頼三樹三郎・田口文藏・清川八郎等ト相往来シ、弥縫周旋、偏ニ調和ニ尽力シ、危険ヲ履ミ、身命ヲ顧ミス、曾テ(文久三年)英国軍艦數隻横濱ニ来リ、要請スルヤ頗ル倨傲不遜、迫ルニ兵威ヲ以テス、幕府閣老小笠原壹岐守外二三ノ吏員ヲ派遣シ、其使者ト談判セシメントス、氏形ヲ商人ニ変シ、潜行シテ其動靜ヲ偵察ス、警吏ノ探知スルトコロナリ、衛門ニ拘引セラレテ、訊問ヲ受クルニ当リ、長藩ノ儒員某、氏ノ名ヲ聞キ、未タ其人ヲ見ス、心窃ニ之ヲ慕フ、今氏ヲ見ルヤ、異シム処アルカ如ク、乃チ名刺ヲ懷中ニ取り、示シテ曰ク、子ハ此人ニアラサルヤト、是レ即チ氏ノ名刺ナリ、氏之ヲ訝カリ、亦匿スヘカラサルヲ知り、左右ヲ却ケンコトヲ請フテ後チ、其実ヲ告ク、是ニ於テ更ニ氏ヲ堂ニ延キ、

優待シテ還ラシム、又私カニ閣老ノ需ニ応シ、屢々出入シテ、建議対策スト雖、悉ク機密ニ属スルヲ以テ、之ヲ知ルニ由ナシ、然レトモ氏ノ主義タル公武調和ニアルヲ以テ、大將軍ノ上洛、及諸侯ノ室ヲ封地ニ就カシメタルノ挙ノ如キハ、皆氏ノ画策ニ出ツルモノナリト云フ、右ノ如ク幕老等ノ質議ニ答ヘテ、其意見ヲ採用セラル、コト往々アリケレハ、激徒ハ氏ヲ以テ幕府ヲ佐クル者トナシ、屢々暗殺ヲ試ミ、幕吏モ亦幕議ヲ妨クル者トナシ探尋止マス、氏毫モ意トセス、益奔走経画スルトコロアリ、藩主之ヲ危フミ、窃カニ壮士数人ヲシテ、常ニ陰カニ尾行セシム、仙臺藩主氏ヲ重ンシ、屢々近臣ヲシテ諮問スルトコロアリ、又氏ノ身ヲ危フセンコトヲ憂ヒ、窃カニ守衛ヲ為サシメタリト、後藩主命シテ国ニ歸ラシム、時慶應三年三月ナリ、是ヨリ先キ幕府ノ毛利氏ヲ討スルニ当リ、建言シテ曰ク、外患前ニ在リ、内怨ヲ結フヘカラス、罪アリ止ヲ得サレハ、命ヲ伝ヘテ之ヲ罰スヘシ、必スシモ兵ヲ動スヲ用ヒサレト、再度毛利氏ヲ討スルヤ、無名ニテ妄リニ兵ヲ動カシ、国力ヲ竭スヲ憂ヒ、其不可ヲ述フルモ、終ニ聴カレス、丙寅三月藩主ニ従フテ大坂ニ役スルヤ、大將軍既ニ大坂城ニ在リ、六月遂ニ長州ノ

役ヲ起ス、而シテ諸侯伯命ヲ辞シ、役ニ従ハサルモノ殆ント分裂ノ勢アリ、氏頗ル苦心ス、八月大將軍家茂公薨シ、十二月天皇崩スルニ及テ、物議益鼎沸ス、私カニ同僚某ニ語テ曰ク、我藩ハ幕府ノ庶流ナリ、而シテ幕府頻年政ヲ失ス、時勢遂ニ此ニ至ル、恐クハ公武一致ノ期見ルヘカラス、他日若シ幕府ヲ以テ朝旨ニ忤ルトナシ、討幕ノ命下ル如キ事アラハ、困是ヲ経画スル、焉ヨリ難キハナシ、是時ニ遇ハ、ヨロシク臣ノ將軍家ニ於ケル、固ヨリ君臣ノ名義アリ、而シテ今干戈ヲ取り軍事ニ従フ、情誼ニ於テ忍ヒサル処ノ衷情ヲ述ヘ、他ハ唯命ニ従ヒ、奔走尽力スヘキコトヲ表シ、哀訴歎願ノ外ナカル可シト、慶應三年十二月国ニ在リ、全国大ニ騷擾ス、座視スルニ忍ヒス、請フテ東上ス、時ニ激徒島津氏ノ三田邸ニ嘯集シ、夜ニ乘シ、市井ニ出テ、富商ヲ劫掠ス、市民業ヲ廢スルニ至ル、幕府先ニ上山・莊内・鯖江ノ三藩、其他譜代ノ諸藩ニ命シテ、市街ヲ警邏セシム、激徒出沒、市民ヲ苦マシムルヲ以テ、是月廿五日、三藩ニ命シテ之ヲ平定セシム、独り上山藩ニ於テハ、藩主親カラ士卒ヲ率ヒ、陝夾鹿兒島邸ヲ囲ミ、人ヲ遣シテ帰降ヲ諭ス、激徒言ヲ左右ニ托シテ聞カス、同邸ニ在ルモノ数十戸、家族ヲ提

携シ、相率キテ莊内ノ陣ニ投シ、哀ヲ請フ、莊内之ヲ容シ、直ニ激徒ヲ砲撃ス、上山・鯖江モ亦砲撃ス、激徒散彈ヲ発射ス、適々邸中火起リ、火勢甚熾ナリ、上山陣其風ニ在リ、激徒進退維谷リ、上山陣ヲ衝カントス、上山ノ兵迎へ討ツ、激徒南ニ向テ潰走ス、尾撃殺傷甚々多シ、此役ヤ氏令ヲ伝へ、藩主ノ側ニ在リ流丸ニ当ル、創深シ、輿ニ乗シテ邸ニ帰ル、藩主痛惜親シク臥褥ニ臨ミ、慰問懇到、即日家老ニ進メ、禄三十石ヲ加賜ス、幕府モ亦侍医二名ヲシテ病ヲ訪ハシメ、且酒肴ヲ賜フ、当時幕府ノ侍医ヲシテ陪臣ヲ訪ハシムルノ例ナキヲ以テ、人皆之ヲ榮トス、左レトモ創終ニ癒ヘスシテ没ス、時二年四十五、実ニ慶應三年十二月廿六日ナリ、戊辰ノ役起ルニ及シテ、氏ヲ知ルモノ皆曰ク、金子氏ノ會・米・仙三藩主ニ重シセラル、コト殊ニ厚シ、若シ氏ニシテ今日ニ在ラシメハ、王師ヲ煩ハスニ至ラサルヘシト、東京芝街二本榎松光寺ニ葬ル、

六四八 贈位者列伝

陸浦老漁

六四八ノ一 御堀耕助

御堀耕助初メ太田市之進ト称ス、姓ハ源、名ハ直方、長藩ノ士ナリ、人ト為リ魁岸勇武、年甫メテ十八江戸ニ遊ビ、齋藤彌九郎ノ門ニ入りテ、擊劍ヲ学ビ、其塾長ト為ル、居ルコト四年ニシテ国ニ帰ル、更ニ九州ニ遊ハント欲シ、豊前ニ至ル、藩主急ニ召還シ、旨ヲ授ケテ京師ニ上ラシム、既ニシテ国ニ還リ、世子定廣^(敬毛利元徳)ノ侍臣ト為ル、未幾自カラ請フテ京師ニ入ル、時ニ藩主父子専ラ尊王攘夷ノ事ニ執掌ス、耕助京攝ノ間ニ奔走シテ、大ニ其力ヲ致ス、文久三年ノ秋、中山忠光兵ヲ大和ニ挙ケテ利アラス、同志ノ士六七人ヲ従ヘテ、大坂ニ遁ル、耕助迎ヘテ藩邸ニ入り、潜ニ邸後ノ水門ヨリ脱セシメ、自ラ陪從シテ山口ニ帰ル、元治甲子ノ春、京攝ノ間ニ在リテ、久坂義助・來島又兵衛等ト共ニ、密ニ謀議スル所アリ、然レトモ其志ヲ達スル能ハス、同年ノ秋、長藩ノ志士相率ヒテ近畿ニ集リ、藩主ノ冤ヲ訴フ、耕助來島又兵衛ト俱ニ、衆ヲ率ヒテ嵯峨天龍寺ニ屯ス、時ニ家老福原越後^(元徳)伏見ニ陣ス、其部下勇將ニ乏シキヲ以テ、耕助ノ來リ援ケンコトヲ請フ、耕助乃チ勇士十余人ヲ従ヘテ伏見ニ至リ、其衆ヲ督ス、七月十九日ノ挙伏見ヨリ進ミ大垣ノ兵ト藤杜

ニ戦ヒ、勇進奮闘敵數人ヲ斬リ、大ニ驍名ヲ得タリ、然レトモ我中軍敵ノ伏兵ニ襲ハレ、首將福原越後傷ヲ蒙ムリテ退ク、耕助已ムヲ得ス伏見ニ退キ、敗卒ヲ糾合シテ回復ヲ謀リシモ、戦利アラス、走テ国ニ帰ル、会々英・佛・米・蘭四國ノ艦隊來テ、赤間關ニ寇ス、耕助山口ヨリ赴キ援ク、講和ノ議起ルヤ、其不可ヲ極諫ス、聴カレズ、乃チ建言シテ御楯隊ヲ編成シ、其総督ト爲ル、慶應元年、藩内正俗兩党ノ戦起ル、耕助正軍ノ將ト爲リ勇戦、其功アリ、二年徳川氏ノ兵來リ攻メシ時ハ、藝州口ニ進戦ス、三年政府ニ入り、王政回復ノ謀議ニ參ス、明治元年、山口藩庁ニ在リテ改革ノ事ニ当ル、二年朝命ヲ受ケテ歐羅巴ニ赴カントス、中途ニシテ病ミ、帰テ鹿児島ニ療養ス、朝廷屢々召スモ、疾ヲ以テ懇辭ス、四年四月周防三田尻ニ歸リ、五月十三日遂ニ没ス、年三十一、耕助武人ナレトモ又文事ニ通シ、時ニ詩ヲ賦ス、頗ル誦スヘシ、且才アリ弁アリ、風貌又凡ナラス、巖然タル偉丈夫ナリキ、

耕助ノ藤杜ニ戦フヤ、斥候乃木初太郎丸ニ中リテ馬ヨリ落ツ、耕助其馬ニ跨リ敵陣ニ突進シ、敵數人ヲ斫ル、時ニ我衆將ニ乱レントス、耕助血刀ヲ揮フテ馳驅シ、大声

叱シテ曰ク、走ル者ハ斬ラント、其勇壯ノ状今猶ホ眼前ニ在リトハ、此戦ニ与カリシ某老人ノ直話ナリ、元治申子ノ冬、(東行ト号ス)高杉晉作筑前ヨリ長府ニ歸リ、諸隊ノ將官連ヲ説キテ、義兵ヲ起サントス、諸將躊躇シテ輒チ応セス、晉作激怒ス、酒ヲ使ヒ諸將ヲ罵リ、傍ヲ人ナキカ如シ、耕助座ニ在リ大ニ憤リテ曰ク、我能ク東行ヲ斬ラント、諸將慰諭シテ誘ヒ去ル、

六四八ノ二

福田俠平

福田俠平、名ハ公明、初メ良助ト称ス、長藩ノ胥徒ナリ、人ト爲リ沈勇大度、略ホ書史ニ渉ル、文久三年奇兵隊ニ入り、書記ト爲ル、後參謀ニ進ミ終ニ軍監ト爲ル、攘夷ノ挙アルヤ、赤間關ニ於テ屢々外艦ト戦フ、慶應元年ノ春、山縣(前田名)狂介等ト奇兵隊ヲ率ヒテ、藩内ノ俗論党ヲ討ス、二年ノ夏、豊前小倉ノ兵ト戦ヒ、遂ニ進シテ小倉城ヲ抜ク、三年ノ冬上國ニ赴キ、廣澤兵助・品川彌次郎ト共ニ、討幕ノ密勅ヲ奉シテ歸ル、戊辰東征ノ役、越後ヨリ陸奥ニ進戦シ、常ニ帷幄ニ參ス、賊平ヲキテ後チ疾ニ罹リテ西還ス、其年ノ冬赤間關ニ没ス、

俠平体軀短小ナレトモ、大胆ニシテ度量アリ、慶應元年

正月、正俗両党ノ戦、奇兵隊ヲ率ヒテ太田ニ陣ス、俗論党精銳ヲ抜キテ来リ戦フ、隊兵殆ント支ヘス、隊將片野十郎援兵ヲ本營ニ請ハント欲シ、馬ヲ馳セテ還ル、俠平路傍ニ立チ戰報ヲ待ツ、十郎ノ急馳シ来ルヲ見テ曰ク、子何事ノ為ニ来ルヤ、十郎曰ク、我兵殆ント危シ、請フ援兵ヲ出タセヨト、時ニ諸兵出戦シテ本營一卒ナシ、俠平笑テ曰ク、援兵ノ事ハ且ヲ之ヲ措キ、先ツ一拳參ルヘシト、手ヲ打チテ藤八拳ヲ挑ム、十郎已ムヲ得ス之ニ応ス、俠平一拳ヲ贏チ得テ曰ク、我勝テリ、我勝テリ、子進ンテ我兵ヲ督励セヨト、十郎馬ニ鞭テ去ル、既ニシテ我兵大ニ捷ツ、

六四九 侯鯖録

一容堂ノ冷罵 土藩老侯容堂ハ洒落ノ人ナリ、善ク謙シ、善ク罵ル、一日蜂須賀侯茂韻、容堂ヲ三又ノ邸ニ訪フ、時ニ他客アリ、方ニ宴ヲ張ル、容堂一ノ小金杯ヲ出シ客ニ示ス、茂韻之ヲ手ニシ愛玩措カス、遂ニ割愛ヲ請フ、容堂曰ク、是レ余カ至愛ノ杯ナリ、他品ナレハ鬼毛角毛、此品丈ハ御望ニ応シカタシト、茂韻固ク請フ、

容堂頭ヲ振テ聴カス、茂韻強請已マス、公若シ予カ請ヲ諾セサレハ、予ハ唯タ之ヲ奪ヒ去ランノミト迫ル、容堂笑テ曰ク、子遂ニ乃祖ノ手段ニ出ツルカト、茂韻恥テ止ム(^朱祖先海賊小六ヲ云)

二容堂ノ奇譚 文久癸亥五月ノ事ナリキ、容堂一日伊達侯宗城ト俱ニ三條實美公ヲ其邸ニ訪フ、公未タ退食セス、待ツコト良久シ、会姉小路公知卿退朝ノ途次、又来リ訪フ、衣冠嚴然タリ、容堂公知卿ヲ見テ曰ク、予等退屈ニ堪ヘス、已ニ礼服ヲ脱シテ安座ス、卿其レ窮屈ナル衣冠ヲ脱セヨト、公知卿衣冠ヲ脱セントス、誤テ冠ヲ落ス、容堂戯レテ曰ク、姉小路ノ首落ツト、三人相對シテ笑フ、其後數日ナラス刺客アリ、公知卿ヲ朔平門外ニ殺ス、容堂凶報ニ接シ、其言ノ讖ヲ為シタルニ驚キ、宗城ヲ見テ曰ク、予以往戲讖ヲ慎ムヘシト、深く悔恨シタリト云フ、

三周布ノ攘夷論 (後藤田公甫、稱之) 周布政之助ハ長藩ノ人傑也、初メ航海遠略ノ論ヲ持セシカ、後深く慨スル所アリ、専ラ鎖攘ノ議ヲ唱フ、文久壬戌ノ年、長藩ノ世子長門守ニ從フテ江戸ニ赴キ、幕閣ノ諸老ヲ歴説シテ、攘夷ノ勅ヲ奉セシメントシ、周旋甚カム、一日越前老侯春嶽ニ謁シ、(松平慶丞)

頻りに攘夷ノ挙ヲ促ス、越ノ老臣中根雪江〔師哲〕曰ク、海外

ノ列強、彼レカ如ク、其レ多キナリ、我邦東洋ニ孤立シテ攘夷ヲ決行ス、果シテ勝算アルヤ、政之助曰ク、今ヤ太平二百余年、文恬武熙上下安ヲ愉ミ燕楽之レ耽ル、斯ル遊弱柔情ノ民ニシテ、彼ノ勇往進取ノ外人ト交ル、安ソゾ外侮ヲ禦キ、国威ヲ振フヲ得ンヤ、此積習ヲ一掃スルノ策ハ他ナシ、唯戦ノ一字アルノミ、今ノ時ニ当リ、霹靂一声太平ノ昏夢ヲ挽醒シ、邦内ノ士民ヲシテ、尽ク死地ニ陥ラシムルトキハ、遊惰ノ氣自ラ消シ、敵愾ノ氣自ラ奮ン、否ラスシテ徒ラニ武備ヲ論シ、海防ヲ説ク、是レ座上ノ空論ノミ、何ノ益アラシヤ、要スルニ三戰四戰、若クハ五六戰ヲ経タル後ニアラサレハ、後ヲ凌駕スルノ条約ハ、決シテ結フヘカラス、故ニ攘夷ノ実行ハ方今ノ急務ナリ、勝敗ノ數ハ姑ク度外ニ於テ可ナリト、以テ其持論ノアル所ヲ知ルヘシ、

四周布修理ヲ笑フ 佐久間修理象山開港ノ論ヲ持ス、嘗テ攘夷論者ヲ論シテ曰、今ヤ我邦武備海防廢弛全カラス、之ヲ修ムル、十年ノ後ニアラサレハ、攘夷ハ決シテ行フヘカラスト、周布政之助之ヲ聞テ笑テ曰ク、修

理ハ無識漢ナリ、十年ノ後ハ開交ノ世ナリ、豈ニ攘夷ノ時ナランヤト、

五一翁ノ卓見 文久壬戌島津久光勅使大原三位ヲ奉シテ

江戸ニ下リ、幕政ヲ改革シテ、攘夷ノ勅ヲ奉セシメン

トス、幕吏島津氏ノ徳川氏ニ利アラサルヲ疑フト同時

ニ、大ニ京都ノ所為ヲ惡ミ、議論紛々タリ、時ニ大久

保〔總中寺ト稱ス、大自付タリ〕一翁建言シテ曰ク、今ノ時ニ方リ、大政ヲ返上シ、

將軍職ヲ辞シテ駿府ニ退キ、駿・遠・參三国ノ主ト為

ルハ、徳川氏ノ為メ永久ノ策ナリ、宜シク速カニ上洛

シテ、此大決心ヲ実行スヘシト、予嘗テ幕府ノ遺老ニ

問フ、大久保ノ一言固ヨリ卓ナリト雖トモ、當時ニ在

リテハ、幕府ニ對シテ大不遜ナリ、而モ幕人カ之ヲ不

問ニ附シタルハ、深ク怪シム所ナリト、一人答ヘテ曰

ハク、余リ意外ノ言ナレハ、皆狂人視シテ度外ニ置キ

タルナリト、當時ノ事情左モアリシナラン、此事春嶽

私記ニモ見ユ、春嶽侯スラ、大久保ハ狂人カトテ怒怨

セリト記サレタリ、大声里耳ニ入ラサル皆此類ナリ

〔朱〕春嶽公親話記参照〕

六遠藤希莊燕石ヲ罵倒ス 遠藤希莊ハ、讃岐圓座村ノ処

士ナリ、少小ヨリ豪放ニシテ能ク飲ム、又好ンデ文ヲ

講シ劍ヲ学ブ、日柳燕石之ト友トシ善シ、文久中皇妹親子内親王ノ幕府ニ贅降シ給フヤ、浪士ノ閑衷ヲ疾ム者、皆口ヲ極メテ徳川氏不臣ノ事ヲ論ス、一日燕石同志ト某様ニ飲ミ語、此ニ及ビ独リ希荘曰ク、皇女ノ下降ハ古史ニ歴々タリ、源潔姫(嵯峨天皇ノ皇女)ノ藤原良房ニ於ケル、(宇多天皇ノ皇女)○内親王ノ忠平ニ於ケル、皆然ラサルハナシ、独リ徳川氏ノ門望位地、彼レニ如カスト言フカ、近時新井白石建議シテ、皇族ヲ僧尼トナスノ弊ヲ論ス、嗚呼人ノ情、子生レテ、之カ為メニ良妻アランコトヲ願ヒ、女生レテ、之レカ為ニ佳偶アランコトヲ願フハ、貴賤上下トナク一ナリ、抑白石ノ建議一ヒ行ハレテ、閑院ノ宮古ニ復シ、光格天皇入りテ大統ヲ継キ給ヒ、以テ今上ニ及ヒ宝祚ノ隆、今日ノ盛事ヲ親ルニ至ル、乃チ今ヤ内親王降嫁ノ事、吾決シテ其他日比丘怨曠ノ積弊ヲ一掃スルノ基タルヲ知ル、此レ豈国家ノ吉祥善事ニアラスヤ、吾独リ一時公武合体ノ為メニ、賀スルニアラサルナリ、吾輩平生書ヲ読ミ国体ヲ論ス、而テ我国史人情ニ迂ナルヤ此ノ如シ、何ソヤト燕石沸然トシテ曰ク、曲学阿世トハ汝ノ謂ナリト、將ニ劍ヲ拔キ、之ヲ斫ラントス、希荘手ヲ以テ刀欄ヲ叩キ笑テ曰ク、吾ニ骨ア

リ、汝ニ血アリ、能ク死セハ速ニ吾ヲ斬レト、燕石嗚咽暗唾力ヲ極メテ之ヲ拔カントス、刀毫モ室ヲ出テス、乃チ謝シテ曰ク、弟復敢テ降嫁ノ事ヲ言ハス、願クハ兄幸ニ吾ヲ赦セト、斯ヨリ燕石ノ徒希荘ヲ見レハ、皆ナ目ヲ側タテ敬セリ、

七内親王難波戦記ヲ徴シ給フ 幕府ノ夫人称シテ御台所ト云フ、故事ニ御台所ノ燕假書史ヲ読ム、難波戦記ノ類手ニ触ル、ヲ得ス、蓋シ其書始祖家康ノ密計、苦戦ノ跡記スルヲ以テナリ、親子内親王ノ東降營ニ入り給フヤ、令旨アリ、難波戦記ヲ徴ス、有司故事ヲ以テ奉對シ、敢テ献セス、内親王侍姫ヲシテ言ハシメテ曰ク、卿等親王ヲ見ルニ故事ヲ以テスルカ、皇女ノ武臣ニ降嫁シ給フハ、果シテ何ノ故事ニ拠レルカト、有司恐惶罪ヲ謝シ、乃チ閣老ニ稟請シ、難波戦記ヲ奉ル、此ヨリ幕府ノ後房、靡然トシテ日ニ觀ヲ改ムト云フ、(忠愍)八小栗上野介ノ警語 小栗上野介ハ幕府ノ有司ナリ、慶應年間建議シ兵ヲ佛国ニ仮リ、薩長諸藩ノ幕府ニ抗抵スル者ヲ、(頭註志)一掃再紀事及ヒ黒田清綱總記 石坂義興等參照 誅夷センコトヲ謀ル、議用ヒラレスシテ止ム、上野介歎シテ曰ク、吾レ閣老諸公ノ言ヲ聞クニ、皆胸ニ成竹アルニアラス、但曰国家今日ノ政苟モ無事ニ

經過スレハ則チ足レリ、後日ノ事ハ其時ニ臨ンテドウカ成ルコトナラント、此ノ其時ニ臨テ、ドウカナルノ一語ハ、豈所謂一言以テ國ヲ喪スヘキモノナラスヤト、嗚呼古今國家ノ大政ニ与カル者、其國ヲ誤リ禍ヲ貽ス、大抵皆ナ此ノ其時ニ臨ンテ、ドウカナルノ一語ニ出テス、上野介ノ言、亦未タ人ヲ以テ言ヲ廢スヘカラサルナリ、

六五〇 茂久公密示 (王政復古ノ発端)

方今我国ノ形勢ヲ察スルニ、内外ノ憂患目睫ニ接シ、実ニ神州浮沈存亡之秋也、長州処置之事ニ至テハ、彼藩ノ存亡ハ暫差置キ、皇國ノ安危ニ關係スル処不少、一度戦端ヲ開ニ至テハ、兵禍連結分裂之勢、不可收拾ニ至ラン、其害トゞマル所ヲ知ラス、故ニ力ヲツクシテ之ヲ救ハスンハ不有也、救之ノ策ニ至テハ、名義ノ正ヲ得、人心ノ向背ヲ察シ、之力策ヲ不可不建、故ニ今日為薩藩謀之ニ、幕議弥征長ニ決シ、勢既ニ成ルノ機ニ投シ、兵力ヲ挾ミ、京攝間ニ出張シ、長州不可討ノ正論ヲ以テ 天幕間ニ建言シ、諸藩ニ説諭セハ、肥

後ノ如キ頗ル幕府ニ〔朱〕「(維新ノ際)幕ヲ廢シタリ」阿順スル藩ト雖トモ、固ヨリ好兵ノ意ナケレハ、同意セサルコト不可有、況其他ノ藩ノ如キ異議アル可ンヤ、各藩ノ形勢如此ナレハ、幕府独二三ノ親藩ヲ特ミ、孤軍ヲ以テ防長ヲ討コト不能、軍氣大ニ沮喪シ、議論頗逡巡シテ、終ニ征長ノ暴挙止ニ至ラン、然ル時ハ幕府大ニ威權ヲ失シ、天下諸藩ノ方向予メ定ル可ク、長州ノ処置モ弥寬典ニ可処、將軍家空ク可東歸、於是薩長戮力同心大ニ張兵威ヲ、策略ヲ出シ、不戦シテ人ノ兵ヲ屈シ、橋・會・桑ノ姦ヲ除キ、皇室反正ノ事業可成也、〔朱〕「第一策也」万一幕府之ヲ不聴、強テ再討ノ挙ニ及ハ、此ノ時ニ至リテハ幕府ノ罪ヲ鳴シ、命ヲ 天朝ニ請ヒ、之ヲ討スルト雖トモ、名正シテ事順ナリ、誰カ之ヲ非義ト謂ヘケンヤ、諸藩ノ如キ与スルヤ否不可知ト雖トモ、幕兵ヲ援ルコト決テナカル可シ、如此ナレハ長藩弥感憤激發、士氣百倍奮起ス可シ、於是相謀リ相応シ、挾ミ討ハ大事可成、〔朱〕「第二策也」是則中策也、若或ハ不救之ヲ幕長兵ヲ交ユ、或ハ幕府勝利ヲ得ハ、勢ニ依附スルノ藩、必ス兵ヲ出テ応援シ、益幕威ヲ助長ス可シ、幕府若シ敗衄ヲ取ラハ、必ス諸藩ニ援兵ヲ促ス可シ、此時ニ当テハ、縱令不出兵ノ藩

ト雖トモ、幕府ノ敗セシヲ座視スルコト不能、勢ノイ
タル処、不得已応援ノ兵ヲ出テ戦ニ至ラン、長州ト雖
トモ、外援ノ応スル無クシテ、諸藩ノ兵ヲ受ニ至ラハ、
衆寡ノ勢必ス勝ヲ得コト又不可知、縦令一二ノ戦ニ勝
利ヲ得モ、国ヲ出テ敵ヲ百里外ニ追撃スルコト、万々
アルヘカラス、恐ラクハ固守ノ策ニ出シカ、其時ニ至テ
救之ハ、カヲ用ルコト弥難シテ、功ヲ成スコト弥可難、
是則下策也、
〔采二第三卷〕

一時機變遷シテ処ス不可ニ於テハ、細密復考、其宜ニ叶
候様取計緊要ノ事、

一兼テ定置候通 勅詔ヲ奉戴シ、条理名分ヲ正シテ、輕
挙無謀ニ不陥事、

一機密四方ニ露顯セシ由ニ付、尚深く廟義可入念事、

右委細之義ハ、〔采〕〔備細旧名〕黒田嘉右衛門へ申付置候事、

一至尊ヲ奉守護候事ハ申モ乍疎、大事件ニ付、精々遂心
配、十分手筈ヲ合、遺算無之様肝要之事、

一此度之義実以 皇国之一大事ニ付、此方出先之者トモ
ヘ、氣付筋有之節ハ、万端存分ニ教示之儀相頼候事、

〔采〕
〔黒田清綱親話記参看〕

六五一 伏見市・在取締被命

薩州

伏見表今度御變革、彼是多端之虚ニ乘シ、狼藉之者横
行、人心不安趣相聞候付、急度巡邏鎮定可有之、

御沙汰候事、

但伏見市・在取締之儀ハ、田宮〔電報〕如雲へ兼勤被 仰付
候、尚又巡邏之儀、長州・土州・藝州同様被

仰付候間、為心得相達候事、

六五二 大政奉還藩内布告

一諸藩上京之上追テ可有 御沙汰、夫迄之処、是迄之通

相心得候様 御沙汰候事、

一將軍御辞職之儀

朝廷へ御申立相成候処、諸藩上京之上、追テ 御沙汰
可有之旨、御別紙之通被仰渡候段、京都ヨリ申来候、
此旨御役人限詰衆へ可致通達候、

十二月

〔久世〕〔采〕
圖書「島津」

右卯十二月四日被仰渡候事、

六五三 方今ノ形勢總論愚考（内田政風）

薩・土・藝約ヲナシテ、不可言之大決策ヲ談ス、不日ニシテ二藩共約ヲ變ス、土ハ一涯王政復古之論ヲイフトイヘトモ、薩不肯、土イフ、若必死之尽力水泡トナラハ、必再約シテ、土挙国之力ヲ以応セント、終ニ薩孤立之姿トナル、然トイヘトモ、薩初之節ヲ不変、然ルニ邸中亦異儀紛々沸々タリ、且ワカ兵船遲着、兎角ト遷延ス、藝亦約ヲナス、然カスル内幕土之建言ヲ採用シテ、事陰ニ及フ、干戈ヲ不動シテ王政ニ復ス、実ニ美談、全

聖運之シカラシムル処、豈不尊也、畢竟事陰ニ至ル時、運之大幸トハイヘトモ、実ハ東ハ水藩且常野之患、既ニ破レントス、其上幕本府以下高半知ヲ減シテ、甚沸騰内乱殆興ラント聞、今水府ヲ征セハ、西ニ長アリ、鞏下ニ薩ヲ大指トシテ、大目ヲ塞テ時ヲ待候勢ヒ、是亦既ニ勃興之勢ヲ示ス、此弊ニ乗シ、外夷之所置ヲ失シセハ、印度之覆轍トナラン、実ニ十方ニ暮レ可施途ヲ失フ、故ニ美事ヲ面ニ飾リカク計ルハ、積年ノ多罪

之ナス業ナラスヤ、実ニ可憎、サリナカラ七百年来之旧習ヲ忽見事ニ捨、謝罪之道ヲ立ルニヨリ、決テ既往ヲ不咎、其善ハ善トシテ可置也、若事因循シテ、当月中ヲ経ハ、必ス内乱ヲ醸シテ終ニ乱ニ入、元弘・建武之如ク、長ク上

天子ヲ奉始、下億兆之人民塗炭之苦トナラン、嗚呼危哉、実ニ天地神明イマタ

皇国ヲ捨給ハス、此大一変順行セハ、今十ヶ年ヲ不出シテ、勢ヒ万国之上ニ秀、終万国ノ

大君ト奉仰、四海之醜主膝ヲ屈テ參ランコト、豈快然ナラスヤト、燭燈下ニ恐賀大笑シテ、筆ノマ、謹テ書ス、乱筆推読偏ニ奉希所也、穴賢、

右内田仲之助考書トイヘリ、

六五四 薩・長・土・藝兵調練天覽

正親町三條前大納言様、正親町少将様ヨリ、薩州・長州・土州・藝州兵隊人数調練、来ル廿七日巳之刻ヨリ、日之御門前ニ於テ被遊

観覽候段被 仰出候間、人数取調可申上、当分諸所へ

警衛等モ差出有之候付テハ、右人数引揚、

戦死人へ

叡覽卜申事ニテハ無之、手明之人數丈罷出候様御達ニ
候、当時之事故、砲声等イタシ候テハ、人氣動揺モ可
有之候付、砲声等無之様御達有之候事、

今度兵革、其藩士之輩・殉国戦死者共具ニ達

天聴、被為愴

叡情候条不淺、宜厚其葬礼恤其親眷、慰忠魂于九原之

下、依之宮弁之賞賜金五百両候、藩主ヨリ可頒与之旨

御沙汰候事、

六五五 壬生修理権大夫上京

但設一社、聚其忠魂、永可被命祭祀 思召候事、

薩州

壬生^{〔薩州〕}前修理権大夫、早々上京之儀

一当日九ツ半時御参 内相成候処、右之通御頂戴、同夜

四ツ時分被遊 御帰殿候事、

御沙汰候間、為心得申達候事、

十二月

六五六 尾・越両侯参内ニ就テ参朝御達

六五八 茂久公相國寺林光院御参詣

薩摩少将殿

一四ツ時分当番御供ニテ、相國寺林光院へ

当分尾張大納言・越前大藏大輔ヨリ、言上之儀有之候

御参詣、戦死一統御直ニ被成候事、

付、総裁始一同参 朝之儀相願候、仍此段申入候也、

一薩州戦死四十五人、手負百三十五人、合百八十人、

一朝廷へ御届相成候事、

一明日ヨリ太政官九條家詰之事、

一連日巳刻参集、申之刻退出之事、

一各独弁持参之事、

六五七 戦死者恩賜

薩藩

右三条御達、

六五九 広ク人材御登用云々小松帶刀御召

小松帶刀

今般御改政御一新ニ付、広ク天下之人才御登用被為在候、其方兼々被聞召入候儀有之候間、早々登京可致御沙汰候事、

六六〇 桂右衛門御召

桂 (久武)
右衛門

今般、無偏無党公平之御処置ヲ以テ、此天下更始被遊候付、人才御撰挙之筋ヲ以、兼テ奉
叡聞候輩ハ、博ク御諮詢被為在候ニ付、其藩右人体御
登用被為遊候間、早々登京致候様可申付候旨
御沙汰候事、

六六一 長州薩・藝二藩ニ依頼ノ書

長州ニハ、十二月二日ニ左ノ書面ヲ薩・藝兩藩ニ差出シテ、朝廷ヘノ取計ヲ依頼シタリ、同四日藝州ヨリ、コレヲ朝廷ヘ差出セリ、其文ニ曰ク、

先達テ從朝廷御召出ノ段御達有之候砌、末家中氣分不相勝罷在、重大ノ御沙汰筋等閑ニ打過候義奉恐入候ニ付、不取致家老計リ發途為仕候段、及御達置候処、末家ノ内病氣少々ニテモ快ク候ハゞ、一同大坂表ヘ可罷出トノ御事ニ付、種々保養相加ヘ候ヘトモ、今以駈々ハキト無之、余リ遷延仕候テハ、幾重ニモ奉恐入候ニ付、淡路名代毛利平六郎(元町、徳山藩世子)・家老毛利内匠(親信)・監物名代宮庄主水一同上坂為致候、兼テ藝州様御誘引ノ御約束ニテ罷在候処、御手洗ニ於テ、重テ朝廷ヨリ御沙汰被為在候迄ノ間、上坂被止候段承り候ヘトモ、今般於朝廷大政被聞召、猶列藩之公議ヲ被尽、御基本可被為建旨被仰出候旨伝承仕、皇国ノ大慶不過之奉存候、然処是迄弊藩ノ儀奉蒙天譴、意外ノ干戈ニ相及候次第、毫末モ奉対天朝異心無御座、大膳父子ニ於テモ、恐縮ニ不奉堪候ヘドモ、武門不可巳ノ場合ト相成、右及事宜候、父子勤王ノ至誠不愧天地士民一途ニ思込候情義難默止、屢御取伝ヲ以テ、幕府ヘ及言上候ヘトモ、微衷更ニ微

上仕兼、必定中間壅閉、暗雲掩天日候義ト、昼夜泣血
鬱塞罷在候処、豈計哉今日ノ御機会ト転変仕リ、実ニ
大早ノ雲霓ヲ望ミ候思ヲ為シ、西宮迄到着仕リ、御沙
汰相待罷在候間、此上ハ幾重ニモ宿志貫徹仕候様相願
候、旁朝廷向宜ク御取計御願致候、以上、

丁卯十二月

長藩

楫取素彦

國貞直人

薩州御藩

京詰御当役中様

藝州御藩

京詰御当役中様

六六二 岩下・西郷・大久保意見書

嵯峨ノ両卿ニハ、徳川氏処置ノ事ニ異議ヲ抱カレタルヲ
以テ、岩倉殿ハコレヲ憂ヘテ、西郷・大久保并ニ岩下佐
次右衛門ニ、其意見ヲ問レタルニ、三士ハ左ノ書面ヲ出
シテ、決シテ遲疑シ玉フヘカラスト、勸メ参ラセタリ、
其文ニ云ク、

今般以御英断、王政復古之御基礎被召立度御発令ニ付
ては、必一混乱ヲ生し候哉も難奉図候得共、二百有余
年之太平之旧習ニ汚染仕候人心ニ御座候得は、一度動
干戈候て、反て天下之耳目を一新、中原を被定候御盛
挙と可相成候得ハ、戦ヲ決候て、死中活を得るの御着
眼、最急務と奉存候、乍然戦は好て不可成事ハ大条理ニ
於て不可動者ニ可有御座候、然るニ無事にして、朝廷
上之御尽力貫徹、太政官代三職之公論ヲ以、大政を議
せられ候日ニ至り候ては、戦よりも亦難とすべく、從
古創業守成之難易論定し難く、俊傑之士ニ於ても、後
世識者之評を免れ不申候、況んや衰体之今日ニ於てを
や、詳考深慮、御初政之一令を御誤リ不相成候儀、第
一之事ニ奉存候、就ては徳川家御処置振之一重事、大
略之御内定奉伺候処、尾・越をして直ニ反正謝罪之道
を為立候様、御諭ヲ以て周旋命せられ候儀、実ニ至当寬
大之御趣意奉感服候、全体皇国今日之危機ニ至り候事、
大罪之幕ニ帰するハ、論を待すして明なる次第ニて、既
ニ先々月十三日云々、御確論之秘物之御一条迄ニ被為
(末「討幕詔勅ヲ云」)
及候御事ニ御座候、此末之論相起り候とも、諸侯ニ列
し、官位一等を降し、領地返上、闕下ニ罪を奉謝候場

合ニ不至候ては、於公論相背き、天下人心固より承伏可仕道理無御座候間、右之御内議ハ、断乎として、寸分も御動揺不被為在、尾・越之周旋若し不被行候節は、朝廷寛大之御趣意を奉せず、公論ニ反し、真之反正たらざるもの顕然ニ候へは、早々朝命断然右之通り御沙汰可相成儀と奉存候、右御定議より下ツて之御処置振は、公論条理上ニ於て更ニ有御座間敷、若し寛大之名被為付、御処置其当を被失候へは、御初政ニ条理公論を御破り相成候筋にて、朝権不相振ハ、論する迄も無之、必ス昔日之大患を生し候儀相違無御座候、若し御趣意通り、真之反正を以て実行挙り、謝罪之道相立候上ハ、御顧慮なく御採用可相成事は勿論ニ御座候、前条御尋問ニ預り、尚修理大夫趣意を奉し、評議之形行奉申上候、一点之私心を以大事ヲ不可論ハ、兼て奉言上候通りにて候間、宜敷御熟考、外三卿江御断決被為在候様御示談、千折万禱仕候、頓首謹言、

岩下佐次右衛門

十二月八日

西郷吉之助

大久保一蔵

岩倉入道様

六六三 茂久公議定職御拜命布告

六六三ノ一

薩摩少将

議定職被

仰下候事、

口 宣追て下賜候事、

六六三ノ二

太守様御事、依

召昨九日御参

内被遊候処、御別紙之通被為蒙

宣下候、此旨一統可奉承知候、左候テ

太守様へ今日月次御礼罷出、面々席々謁之格ヲ以拙者

御長屋へ相越、御祝儀申上、諸士之儀モ同断、且諸組

与力ハ夫々支配頭御長屋へ相越、同断可申上候、尤大

奥其外様江兼テ御祝儀云々、

六六四 久光公御上京御召達書

島津大隅守

御一新御変革ニ付テハ、從來

叡慮遵奉之次第モ有之、旁以御下問之儀被為在候間、

早々上京可有之、更ニ被 仰出候間、(以下脱カ)

但応召修理大夫モ早速上京ニハ候得共、尚又

思召之旨モ有之、本文之通

御沙汰候事、

六六五 品海ニ於テ薩艦ノ砲撃始末

左ノ一篇ハ、横井時庸君談話之大意ナリ、文中余トア

ルハ即チ君ナリ、

頃ハ慶應三年丁卯十二月二十五日午前十時許リナリキ、

余ハ當時待命中ニテ、(東京都墨田区)本所林町ノ宅ニアリケルカ、半鐘

ノ音喧ヒシクシテ、世間何トナク騒シクアリシヲ以テ、

何事ナラント出テ、様子ヲ見ルニ、陣羽織ヲ着シタル者

ナトノ、何地ニカ奔セ行ク有様、只事ナラスト思ヒケレ

ハ、余モ直ニ仕度シテ、海軍省ヘト出頭シタリ(海軍省ハ、

(同港区)當時ノ御濱御殿、今ノ延慶館ニアリ)、此時軍艦ハ大抵上方

ニ赴キテ、省中ニハ人甚タ少ナカリキ、其省中ニアリシ

ハ、福岡(軍艦役)・鈴藤勇次郎・伊勢権左衛門等ノ諸氏

ナリ、此人々ニ就テ、始メテ此日薩州藩邸ト共ニ、品川

沖碇泊中ノ同藩船ヲモ焼払ハントストノコトヲ知リヌ、

小時ニシテ柴誠一郎氏モ出省シテ、暫ク階上ニ於テ密談

ノ後、階下ニ降り、余ニ語りテ云フ様、是ヨリ直チニ帰

艦シテ、時宜ニヨリテハ、薩艦ヲ砲撃スルコトアルヘシ、

余ハイト面白キ事ニ思ヒテ、随行センコトヲ請ヒケレハ、

心好ク承諾セラレシニヨリ、直チニ海軍省ニ用意セル押

シ送り船ニ乗りテ、共ニ品川沖ヘト漕キ出シヌ、見渡セ

ハ、御台場沖ニ朝陽丸碇泊シテ、コレヨリ凡ソ一丁許リ

モ沖ニ薩艦碇泊シ、回天ハソレヨリ三四丁許リノ沖ニア

リ、船中柴氏又余ニ云ヘルヤウ、余先ツ薩艦ニ説諭シ、

砲火ヲ見スシテ、之ヲ捕獲セン心算ナリ、然レトモ彼若

シ之ヲ聴カスンハ、不得止一撃ノ下ニ沈没セシメンノミ、

余等ノ船漸ク朝陽ニ近ツキタル頃、薩船錨ヲ抜イテ前進

シ、続イテ回天モ亦同シク抜錨シテ、後進ヲ始メタリ、

彼是スル中ニ、回天ヨリ霹靂一声轟然ト砲発シヌ、柴氏

言フ、今少シ早カリシナラハ、砲撃サセマシキヲト、其

砲丸高く、薩艦ノ檣上ヲ飛過シテ、御殿山ノ辺ニ落下セ

リ、頓カテ又第二丸ヲ発シヌ、此砲丸ハ照準極メテ低カ

リシト見ヘテ、余等カ乗レル押送船ノ近傍ニ落チタリ、海水高ク飛騰シテ、其丈一丈モアリツラン、実ニ其物凄サ言フハカリナシ、是レ余等実戦ノ地ニ臨ミシ最初ナリ、舟人太タ恐怖シテ、何レモ腰ヲ抜カシ、只戦慄スルノミニシテ、又漕出テントモセス、復タ物ノ用ニモ立ツヘクモアラサレハ、柴氏大喝シテ、汝等若シ漕出サ、レハ、皆斬殺スヘシトテ、之ヲ威嚇シケレハ、纔ニ氣力ヲ復シ、漸クニシテ漕出シタレトモ、回天ニハ近寄ルヘクモ見えサレハ、止ムヲ得スシテ朝陽ニ乗リ移リヌ、同船モ戦争ノ用意ヲナシツ、アリテ、コレニハ二等士官小林平三郎氏乗組ミオリヌ、吾等ノ乗移リシヤ否、同船ヨリモ薩艦ニ向ツテ発砲シタレトモ、朝陽ニハ此時蒸氣船罐ノ据付ナク、運転自由ヲ得サレハ、只一発ノミナリキ、余等之ヲ觀ルニ、薩船ハ速力ヲ早メテ大森沖ヘト遁ケ、回天ハ、遙カ沖合ニ於テ、之ヲ要撃セントスルモノノ如シ、是ニ於テ余等ハ朝陽ヲ辞シ、再ヒ押送^(船脱カ)ニ飛乗り、折シモ北風吹来リケレハ、滿帆風ヲ孕ミ、様子如何ニト、眸ヲ凝ラシテ兩船ヲ見マモリツ、駛セ行クニ、兩艦羽根田燈台辺ト見ユル頃、形勢頓カニ一変シ、主客地ヲ異ニシテ、薩船ハ方向ヲ転シ東行シテ、回天ハ却テ追撃セラル、モノ

ノ如シ(是レ窮鼠猫ヲ嘯ムノ俚語ノ如ク、跡ニテ聞ケハ、所詮遁レ得ン事ト思ヒ、回天ニ衝突シテ、万一ヲ僥倖セントノ窮策ナリシ由、黄海ノ西京丸ハ、コノ式ノ舞ヲナシテ、能ク僥倖ヲ得ルモノ)、今マテ回天ヨリ発シタル砲丸ハ、五六ヶ所ナレトモ、三発程ハ空ク海上ニ落チテ、只海水ノ飛騰シタルノミ、暫クシテ又旧位地ニ復シ、共ニ西行シテ横須賀沖ト見ユル頃、余等ノ乗レル押送船ハ、纔カニ横須賀沖ニ至リヌ、此時殆ント午後五時頃ニシテ、蒼然タル暮靄ハ海上ヲ罩シテ、兩船ノ船体ハ影ダニ見ヘスナリ、果テ、余等ノ遺憾ヤル方ナク、シバシ茫然タルバカリナリシカ、且ツ見レハ、回天ハ敵船ヲ打チステ、、独リ空シク引帰ヘシ来レリ、是ニ於テ、回天ノ近ツクマ、ニ柴氏ハ大声ヲ発シテ、柴ナリ、早ク進航ヲ止メヨト命セリ、船ハ此声ニ応シテ、直チニ運転ヲ止メヌ、余等飛フカ如クニ之レニ乗リ移リ、士官室ニ入レハ、副艦長近藤熊吉氏等四五名室ニアリ、柴氏之レヲ見ルヤ否、烈火ノ如ク激怒シテ、コノ袋ノ鼠ヨリモ、尚ホ容易ナル薩船ヲ取り遁カストハ、何事ソヤトテ、太タ詰責シタレハ、各其ノ失敗ニ、一言ノカヘス言葉モナク、何レモ黙然タリキ、柴氏又云フ、既往ハ如何トモスルコトナシ、更ラニ速カニ追尾シ

テ、之レヲ捕獲セント、汽力ヲ速メテ観音崎沖ニ駛行シ、遂ニ翌日未明ニハ、豆州下田ニ至リヌ、上陸シテ薩艦ノ行衛ヲ問フニ、更ラニ誰レトテ之レヲ知ル者ナケレハ、最早詮方ナシト切齒シツ、憾ヲ吞テ空シク帰東セリ、跡ニテ聞ケハ、薩艦ハ要部ナラネト、船体ニ数ヶ所ノ砲丸ヲ受ケテ、毀損ヲ蒙リタレハ、下田ヨリ程遠カラヌ西方ノ一港ニ碇泊シテ、修繕ニ着手シヨリシトソ、当時ハ之レヲ聞テ、一層ノ遺憾ヲ感シタレトモ、今ニシテ之レヲ思ヘハ、薩艦ニハ、今日海軍部内ニ最モ有名ナル某將校モ乗組アリテ、当時魚腹ニ葬ラザリシハ、実ニ国家ノ為メニ、慶スヘキコトナリト言フヘシ(丁)

六六六 旧上山藩江戸鹿兒島藩邸浪士討伐始末

旧上山藩士 堤和保投稿

第一

余曾テ史談会発刊記事第四十八輯中、旧莊内藩士俣野時中君ノ演説速記ヲ見ルニ、該藩幕末江戸芝三田鹿兒島藩邸以下薩邸ト記スニ潜居セシム士討伐ノ顛末ヲ載セラレタリ、而シテ俣野君ハ説カル、親シク其戦況ヲ目撃セシニアラス、

旧同藩士ノ説明及書類ニ徴シ、証拠ト為セリト、故ニ之ヲ反復通覽スルニ、其狀況甲ニ密ニシテ、乙ニ疎ナルモノアリ、且ツ事実ノ相違セル点ナキニアラス、故ニ余モ史談会ニ向ツテ、旧藩ノ事実ヲ陳述センコトヲ希望セシカ、暇ナクシテ其事ヲ果サ、リキ、今之ヲ陳述センカ、時機已ニ後レタリ、然ラハ黙過センカ、明治歴史ニ或ハ欠典アランコトヲ恐ル、因テ茲ニ記述スル所以ナリ、幸ヒ貴社雜誌ハ、題号ノ如ク、其時代ノ出来コトヲ記載セラル、加之先キニ旧同藩金子與三郎(富郷)ノ記事ヲ連載セラレタリ、本件モ亦等シク同氏ニ関係アルヲ以テ、貴社ヲ煩ハシ、旧藩ノ薩邸浪士討伐ノ始末ヲ詳ニシ、併セテ俣野君ノ勞ヲ謝セントス、而シテ本記事ハ、余カ先人及旧藩士ノ雜記、又ハ余カ实地目撃セシ所ヲ、参酌シテ記スルモノナリ、

第二 幕政ノ頽廢

抑幕末政綱ノ頽廢セシコトハ、今更喋々ヲ要セサルヘシ、其御膝元ト称スル江戸南北両町奉行スラ、市内ノ警戒ヲ為ス能ハス、悪漢ハ白昼横行シ、市上賭博ヲ為スモノアルモ、之ヲ捕拿スル手段ナク、夜間ハ浪士カ兇器ヲ携ヘテ、良民ヲ劫掠スル等、枚挙ニ遑アラヌ、故ニ幕府ハ大

ニ戒心スル所アリ、譜代大名中若干名、及五千石以上旗本某々ニ、市中取締方ヲ命シタリ、江戸八百八街人口百有余万ノ大都、独リ荘内藩ノミニ命セラレタルニハアラサリキ、旧藩モ亦其一ナリ、即チ芝・伊皿子・二本榎・猿町及白金等ヲ以テ持場ト為シ、屯所ハ二本榎及白金ノ二所ニ設ケタリ、而シテ隊士ハ短槍或ハ小銃ヲ携へ、伍々ノ制ニ依リ、隊士四人ニ伍長一人ヲ以テ一組トシ、昼夜持場内ヲ巡邏セシメタリ、此ノ如キ有様ナレハ、荘内藩ハ芝三田最寄ヲ持場トシ、屯所ヲ薩邸付近ニ設ケシナリ、而シテ其屯所ニ向ヒ、浪士ノ発砲セシ事実ハ、俣野君ノ説ノ如ク、薩邸討伐ノ主因トハナリシナリ、

第三 討伐前薩邸及佐土原藩邸ノ偵察

上山藩市中取締ノ命ヲ受クルヤ、浪士夜間出沒、商家ヲ劫掠スルノ説紛々タレハ、其根拠タル薩邸内外、及佐土原藩邸ノ事情ヲ偵察スルノ必要アリ、故ニ先ツ浪士ノ挙動ニ注目シツ、アリ、因テ地形ハ勿論、牆壁・溝渠及家屋ノ構造ニ至ルマテ、大略検索セシノミナラス、偵吏即チ犬ヲ放チ、夜ニ乗シ浪士等何レノ門ヨリ出入スルヤ、又ハ人員ノ多寡、又ハ強奪セシ財宝ハ、何等ノ道ニ費消スルヤヲ偵察セシメタリ、其報スル所ニ依レハ、軍資ヲ

集メ、糧食ヲ蓄へ、同志ヲ募リ、而シテ関西相応シ、一挙相州萩ノ山中藩陣屋ヲ陥レ、之ヲ根拠トシ、後大ニ為サントスルノ陰謀アリト、其虚実ハ、今之ヲ確メ難シト雖トモ、其形迹ヨリ之ヲ察スルトキハ、或ハ捏造セシ説トノミ言ヒ去リ難キモノアリキ、又佐土原藩邸ハ芝三田小山ニ在リ、上山藩邸ヲ距ル三丁許ニ過キス、同シク偵察ヲ施セリ、同藩士中厚地某ノ如キハ、余友人ニシテ、相ヒ往来シ、内外ノ事情ヲ良知セシノミナラス、藩医某ハ業務ヲ以テ出張シ、加之某商ハ、彼我藩邸ニ日々出入シ、商業ヲ営ムニ依リ、金円ヲ与へテ内情ヲ索ラシメタレハ、疾クニ之ヲ偵知スルヲ得タリ、該藩邸ニハ、浪士ニシテ常住潜居セシ者ナシ、然ルニ薩邸ト共ニ藩邸ニ発砲シテ、焦土ト為セシハ、痛息ニ堪へサリシナリ、

第四 薩邸構造ノ大要

俣野君ハ、薩邸ノ表門ハ芝濱ニ向ツタ所タト言フモ、之レハ用心門ナリ、表門即チ正門ハ、矢張り芝山内ニ面シ五重塔ニ相對スルト云テ大差ナシ、黒塗リナリ、左右両番所アリ、破風造リ、（屋）家根ハ銅葺、鬼瓦ニ代ユルニ樟木形寺院ノ家根ニ似タリ、門ノ正面島津家家紋三ヶ所アリ、構造頗ル壯觀ナリキ、而シテ三田街ニ接スル所ハ、物見略図参照又ハ藩士ノ家屋アリ、芝山

内ニ面スル所亦同シ、芝西應寺町七曲リハ、総シテ土塀ヲ周クラシ、厚サ四尺、高サ七尺許モアルヘシ、加之ニ弓許ノ外濠、之ニ沿フタリ、徳島・高松二藩邸ノ境界ハ、板塀及ヒ小溝アリ、浪士ノ七曲リニ突出セサリシハ、蓋シ地利ノ不便ニシテ、徳島藩邸ノ南走スルニ、最利ナル捷路ヲ取りシナリ、

又正門ヨリ正面ノ所ニ、島津家家屋アリ、元ハ壮大ノ建物ナリシカ、同家夫人ノ国住居ト為リシトキ、取毀チタレハ、僅ニ其形ヲ存セシノミ、庭園中央ニ池アリ凡ソ四十間四方モナラン、池ニ対シテ築山アリ、築山ノ背後ニ土塀ヲ周クラシ、用心門一ヶ所アリ、土塀ニ沿フテ土蔵アリ、又馬場アリ、浪士等此地場ニ依リ、一時防戦セシナリ、

第五 浪士討伐ノ命

然シテ浪士討伐ノ命アリシハ、実ニ慶應三年丁卯十二月二十四日ノ夜ナリ、幕府大目付ヨリ、即刻家老ノ内西丸へ罷出ツヘキ旨、切り紙ヲ以テ召喚セラレタリ重大ノ事件ニアラサレバ重役ハ召喚セサルナリ、是ニ於テ旧藩ハ、藩老山村縫殿助・留守居役仁科大之進等ヲ登城セシメシニ、大目付木下大内記利義・目付松浦越中守・長井筑前守列座シ、大内記曰ク、三田一丁目松平修理大夫上屋敷内浪人共潜伏、夜々市中商家へ押

入り、金銀ヲ奪去候ノミナラス、容易ナラサル企有之哉ニ相聞、不屈ニ付、召捕方酒井左衛門尉家来へ申達候間、申談討手ニ差向フヘク、万一手余リ候節ハ、臨機ノ取計ヒ之レアルヘシ、且ツ曰ク、家柄ノ義ニ付、励精アルヘキ旨面命セラレタリ、因テ重役等帰邸セシハ、夜十二時九ツ過キナリキ、而シテ鯖江藩・岩槻藩モ亦同シ命アリシト聞キヌ、

第六 藩士隊伍ノ組織

上山藩ハ既ニ市中取締ノ職ニ在リ、故ニ予シメ、藩士ヲ分ツテ隊伍ヲ組織セリ、槍隊一隊・砲隊四隊・大砲隊一隊及輜重隊一隊ト為ス、一隊各五十人トシ、毎隊番頭若クハ物頭ヲ以テ隊長トシ、総シテ二百五十人トス、而シテ討伐ノ命アルヤ、槍隊四十人・砲隊百人・大砲隊三十人大砲二門・輜重隊三十人ヲ以テ攻撃隊トシ、五十人ヲ以テ後援隊ト為シ、藩主松平伊豆守信庸此隊伍ヲ統率シ、金子六左衛門旧名与三郎及医師三名之ニ從ヒタリ、下部五十人、合セテ総勢三百人ナリ、槍隊士ハ皆目錄以上ノ免許アルモノ、大小砲隊士モ亦、各其術ニ訓練セル者、下部ハ皆藩地ノ郷民ニシテ、各利刀ヲ帶セシメタリ、

第七 隊士ノ服装

槍隊ハ陣羽織・胴服・小袴・各鉢鉄入り白鉢巻、大小砲隊及輜重隊ハ立烏帽子形鉢鉄入り頭巾、淺黄色背ニ山道合印付ノ筒袖、及小袴ヲ一斉着用セリ、

第八 攻撃ノ地点

二十五日払暁^{時六}、麻布古川端藩邸ヲ發シ、芝赤羽橋^{藩邸角米}ニ於テ、隊士ノ整列ヲ為サシメタリ、而シテ莊内藩ヨリ、三田四丁目松平阿波守^藩 中屋敷ヲ根拠トシ、薩邸南方ヨリ攻撃スヘシ、緩急ハ猶ホ該藩ノ報知ヲ待ツヘキ旨ヲ以テセリ、是ニ於テ隊長ヨリ各隊ニ、槍ハ鞘ヲ扨ヒ、砲ハ実弾ヲ込ムヘキノ令ヲ伝へ、而シテ整々進ンデ徳島藩邸ニ繰入り、陣地ヲ占メタリ、

第九 地形及陣地ノ略図

然シテ戦況ヲ記スル前ニ於テ、読者ノ参照ニ便センカ為メ、左ノ地形及陣地ノ略図ヲ附記スヘシ、但シ當時ノ速写ヲ補フモノナレハ、全カラサルモノアリ、

第十 開戦前ノ光景及応接

薩藩重役トノ応接ハ、莊内藩之ニ任シタルハ俣野君ノ説ノ如シ、而シテ正門ノ西ニ沿ヒ、一ノ通用門アリシナリ、莊内藩士安倍藤藏君ノ門内ニ入り、玄関前ニ於テ薩藩ノ^先重役ト^副應接セラレ、又薩藩ノ重役某カ門外へ出て槍玉ニ

掛ケラレシト言フモ、蓋シ此所ナルヘシ、余等、戦後邸ノ内外ヲ一見セシトキ、門外及松本町ト称スル横小路ニ、死屍ノアリシコトハ、今猶ホ記憶セリ、上山藩及鯖江藩ハ、略図ニ記スル如ク薩邸ノ南方、高松藩邸及徳島藩邸内ヨリ攻勢ヲ取りシナリ、而シテ莊内藩ノ応接如何ンヲ待ツト雖トモ、輒ク談判ヲ了ヘサレハ、邸内ノ動静ヲ窺知スル能ハス、由テ屢々該藩ニ問訊スルモ、要領ヲ得サリキ、幸ヒ徳島藩邸内ニ火ノ見櫓存在セルヲ以テ、藩老金子六左衛門・藩士堤作右衛門外一人之ニ昇リ、浪士ノ動静ヲ瞰ルニ、浪士等邸内所々ニ点在シ、東奔西走、或ハ陣羽織ヲ着シツ、指図スルアリ、或ハ草鞋ヲ履キツ、私語スルアリ、又タハ大砲ヲ装置スル等、狼狽ノ形状アルノミナラス、頗ル挑戦ノ準備顕然タリ、総勢二百人許ト認メタリ、到底穩和ノ談判ハ望ミ得ヘキニアラス、是ニ於テ六左衛門ハ、急ニ一人ヲシテ、莊内藩ニ状況ヲ報道セシメ、又作右衛門ニ命シテ、攻撃地点ノ略図ヲ速写セシム、作右衛門ハ墨斗ヲ出シ、大略ヲ写了シ、共ニ櫓ヲ下リ、而シテ六左衛門ハ略図ヲ按シ、頓ニ攻撃ノ姿勢ヲ一變シ、各隊ヲ其要地ニ配置シ、大砲二門ヲ前進セシメ、号令一下、放火ノ用意ハ備ハレリ、

第十一 上山・鯖江二藩士ノ激戦

時ニ上山藩使番番頭松平輝太郎騎馬ニ鞭チ、莊内藩談判破レタリ、薩邸物見ニ発砲ノ用意ナレリト告ク、大砲隊長番頭松平八百太郎、打テノ号令ヲ発ス、霹靂一声、乍チ牆壁ヲ破碎シ突入ス、砲隊二隊統テ前進発射ス、槍隊其後ニ從フテ闖入セリ、同時鯖江藩モ大小砲ヲ発射ス、之レ其戦端開始ノ一班トス、時刻ハ七時頃ナリキ、〔全時間〕莊内藩開戦ノ前後ハ、其孰レカ先キナルヤ、間髪ヲ容レサルニ在リ、藩士等鯨波ト共ニ前進シ、各隊頗ル激戦セリ、蓋シ藩主率先陣頭ニ在リ、指揮スルヲ以テナリ、浪士等亦鯨波ヲ揚ケ、築山及土塀ニ抛リテ大砲ヲ発射シ、小銃ヲ連射應戦ス、我大砲隊及砲隊頻リニ連発シ、邸内ノ家屋忽チ黒烟ヲ吐キ、鯨波ノ一場ノ修羅ノ巷トハ化シ去リヌ、槍ヲ遣フ者、長巻ヲ揮フ者、太刀ヲ翳ス者、其勢凡ソ一百余人、我戦隊ニ向ヒ雲霞ノ如ク、又大河ノ決スル如ク襲ヒ来レリ、我戦隊之ヲ激へ、戦フコト最モ急ナリ、後援隊長物頭毛利敬太郎及隊士ハ、焰々タル中ニ突進シ、敵ノ右翼ヲ衝ク、又六七十人ノ浪士ハ、鯖江藩戦隊ニ向ツテ、突如トシテ進ミ、同藩戦隊亦能ク戦フ、彼我弾丸ハ雨降りシ百雷モ音ナラス、烟焰天ヲ焦シ、咫

尺ヲ弁スル能ハス、我藩士ハ嚴然拒守ス、然レトモ一団ト為リ、之ヲ支ユルノ不利ヲ感シ、伍々分裂展開セシメ、一進一退、激戦甚ダカム、是ニ於テ、槍隊長物頭門奈惣右衛門、采配ヲ揮ヒ、猛進セリ、槍隊一斉疾呼シテ進ミ、竟ニ格闘スルニ至ル、浪士等惣右衛門ヲ望見シ、四方ヨリ蝟集シ、刀槍ヲ揮ヒ突貫シ来ル、惣右衛門益々猛リ、采配打チ揮リ、指揮スルヤ、浪士一声突出セル槍右手掌ヲ貫キタリ、隊士土田雄之介・穴原五平治奮戦二兎ヲ倒シ、各首級ヲ揚ケタリ、五平治復ヒ進マントスルトキ、弾丸左腕ニ中リ、後陣ニ退ケリ、斯ル接戦ナルニモ拘ラス、六左衛門帷幕ニ在ツテ、此ノ戦況ヲ目撃シ、奮激ニ堪ヘス、自ラ進ンテ藩士ヲ督励セリ、是時一丸六左衛門ノ左胸ヲ貫キ、前ニ倒ル〔復野君ノ腰ヲ打ツハ誤リナリ〕、藩士等援ケテ後陣ニ退ク、藩士等益々勇奮前進シ、浪士等素ト南ニ向ヒ逃竄スルニ意アリ、故ニ上山・鯖江二藩ノ陣地ニ向ツテ侵撃セリ、而シテ二藩士ノ挾撃ニ堪ヘス、終ニ算ヲ乱シテ潰走セリ、藩士等其北クルヲ尾シ、之ヲ追撃ス、浪士等進退維レ谷リ、田町ニ至リ芋屋某ノ家ニ闖入シ、店頭ノ簀ヲ丸ケ放火ス、附近忽チ猛火トナリ、要路ヲ遮断シ逃去セリ、由テ藩士ハ、隊伍ヲ整ヒ引揚ケタリ、聞ク、幕

兵八田町及高輪ヲ扼シテ、一撃タモ加ヘス、匪徒ヲシテ
逃走セシメタリト、蓋シ兵ノ強弱ニアラスシテ、命令ノ
全カラサリシニ由ルナラン、

テ脱忍

此ノ如キ実況ニシ、莊内藩ハ苟クモ匪徒逮捕ノ幕命ニ対
シ、其ノ責メ重シトス、況ンヤ薩邸浪士討伐ノ主因ハ、
該藩ニ之レアルヲヤ、然ルニ味方二藩ノ苦戦シアルニモ
拘ハラヌ、藩士ノ中好シ軍装ヲ避クルニモセヨ、宗十郎
頭巾ヲ冠リ、或ハ鳶三羽ヲ打ツテ、余憤ヲ屈セシ一段、
果シテ事実ナリトセハ、其ノ苦戦ヲ対岸ノ火視セシナリ、
嗚呼堂々幕府譜代諸侯ノ首班ニアル莊内藩ニシテ、猶且
ツ然リ、其ノ他推シテ知ルヘキノミ、幕府伏見ノ一敗、
故ナキニアラサルナリ、

上山藩士ノ敵ヲ討取リ、首級ヲ挙クルモノ五、砲殺七人、
此他手負數ヲ知ラス、分捕鉄砲五挺・鞍馬一疋・大小刀
三腰・陣羽織二ナリ、鯖江藩モ亦死傷アリ、詳ナラス、
然シテ戦ヒ止ミシハ、十時^{四ツ}過キナリキ、而シテ上山
藩ハ留守居役仁科大之進ヲシテ、戦況ヲ幕府大目付ヘ申
告セシム、

第十二 上山藩士討死及手負

討死大砲隊成橋十内、討死大砲隊鈴木角助、討死砲隊小

川榮太郎、討死砲隊柏倉嘉傳治、討死砲隊早崎助市、討
死砲隊渡邊藤五郎、討死槍隊師岡孫三郎、重傷藩老金子
六左衛門^{廿七日}死去、重傷砲隊瀧口俊作^{廿六日}死去、重傷槍隊穴原五

平治、重傷砲隊高橋祐八、輕傷物頭槍隊長門奈惣右衛門、
輕傷槍隊三輪彦兵衛、輕傷槍隊青木新太郎、輕傷砲隊五
十嵐総之介、輕傷砲隊小松幸太郎、輕傷砲隊齊藤富彌等
ナリ、而シテ討死及重傷ニ依リ死去セシモノ、金子六左
衛門始メ九人ハ、芝二本榎松源寺ノ墓域ニ埋葬ノ日^{廿八}、
藩邸二本榎ニ至ル沿道ノ江戸市民ハ、男女ニ拘ハラヌ、
市民ノ為メ潔ク死ヲ遂ケ、為メニ枕ヲ高フスト唱ヘ、且
ツ痛ミテ、三々五々九名ノ柩ニ附随シ来リ、墓地ハ恰モ
立錫ノ地ナク、香華スルモノ暫クハ絶ヘサリキ、

第十三 幕府ノ慰勞及親族各藩ノ警戒

幕府ハ大ニ其戦功ヲ犒ヒ、殊ニ命シテ奥医師二名ヲ派ス、
當時以テ異數トナス、樽酒數個及鯛若干ヲ賜ヒヌ、又上
田藩・唐津藩・土佐新田藩及末家幕府旗下松平篤三郎ヨ
リ、隊士卅人乃至五十人宛、麻布ノ藩邸ニ遣シ、邸ノ内
外ヲ警戒セリ、

第十四 附録

上山藩士金子六左衛門清邦ハ、独リ藩治ニ功績アルノミ

ナラス、夙ニ正義ヲ主唱シ、大ニ朝幕ノ調和ヲ謀リ、幕

堤和保氏寄稿

府ヲ佐ケテ、而シテ尊王ノ意志ヲ致ントスルニ在リ、現
ニ、明治聖世ニ遭遇セシ各藩士、及処士ノ間ニ相往来シ、
斡旋至ラサルナク、一時名声アル士トシテ称道セラレキ、
而シテ不幸其死地ト時機ヲ得サリシ為メ、其名終ニ湮滅
ニ歸セントス、是余ノ遺憾トシテ休マサル所也、曩ニ旧
藩同志相謀リ、大方ノ賛助ヲ得テ、氏ノ為ニ紀念銅碑ヲ、
羽前上山旧城趾ニ建ツルニ当リ、撰文ヲ三島中洲翁ニ囑
ス、翁旧誼ヲ重ンジ速ニ請ヲ容レ、稿已ニ脱セリ、異日
亦將ニ同志ニ謀リ、貴杜ヲ煩ハシ、世ニ公ニセントス、
今本書ヲ記スルニ際シ、懐旧ノ情ニ堪ヘス、氏力創口苦
悶ノ間ニ於テ成レル辞世国歌一首ヲ録シテ、以テ貴社ニ
寄ス、其詩集ノ如キハ、今ヤ割剝ニ付スルヲ以テ、不日
公ニスルコトアルヘシ、

國ノ為メ捨ツル屍ニ照ル月ハ

ナカラヘシヨリ清クヤアルラメ

清邦

小石川区長佐藤正興氏ハ、旧幕臣ニシテ、旧名ヲ長堀雄
一郎ト称シ、従来小石川水道端ニ住セリ、幕府撤兵頭大
平備中守ノ隊ニ在リテ、同差図役タリ、丁卯十二月廿五
日鹿兒島藩邸討伐ノ際、備中守及氏ハ、隊士ヲ率ヒテ同
邸七曲リ通用門ニ向ヒ応接シ、薩藩南部彌八郎・肥後七
左衛門ノ両士ハ氏ノ隊ニ降服シ、西丸下撤兵營ニ護送ス
ト、而シテ開戦ノ際ハ同時発火シ接戦、匪徒一名ヲ銃殺
シ、首級ヲ揚ケタリト云フ、余當時此事ヲ詳ニセザリシ
ハ、藩士激戦中ナルヲ以テ、之ヲ知ルニ違アラサリシナ
リ、氏ハ維新後今名ニ改メ、学校ニ衛生ニ専ラ公共ノ事
業ニ熱心尽力セラレ、市制發布以來、小石川区会議員、
区学務委員、市會議員、市參事會員ニ推選セラレ、尋テ
現在ノ任ニ擢テラレシ也、氏ノ嚴父ト余ガ亡父トハ交誼
アリシヲ以テ、先キニ本誌ニ載セラレシ薩邸討伐始末ヲ
一見セラレ、氏ノ親シク余ニ面話アリシニ由リ、此ニ記
シテ補遺トハナセリ、

六六七 芝三田鹿兒島藩邸討伐始末補遺

六六八 栗本鋤雲翁ノ自伝

鋤雲初ノ名ハ喜多村哲三、後ニ栗本氏ヲ嗣キ、瑞見又瀬兵衛、安藝守ト改メ、鮑庵ト号シ、帰田ノ後、別号ヲ以テ通称ト為ス、

江戸ノ人、幕府ノ医官喜多村安正、号槐園ノ第三子、母ハ幕府ノ士官長谷川平蔵ノ庶嫡三木氏、文政五年三月小川町猿楽町ニ生ル、九歳ノ時ヨリ偶々咯血ヲ患ヒ、以來年一次或ハ二次病マサルナシ、是レヲ以テ父兄其自放ニ任セ、就家ヲ督セス、天保九年年十七、始メテ健全ニ復シ、乃チ父ノ遺命ヲ以テ、安積良齋翁ノ塾ニ入り、儒学ヲ受ケ、三年ノ後チ昌平齋ニ入ル、同十四年二十二歳、齋試甲科ニ中リ、城ニ朝シテ白銀十五錠ノ賞ヲ受ク、弘化三年夏友人ト甲州ニ遊ビ、富士及ヒ金峰ノ二山ニ登ル、帰途旧疾再ビ起リ、旅次ニ在ル一月余ニシテ治ス、嘉永元年歳二十七、入りテ幕府医官栗本氏ヲ嗣キ、医学ヲ多紀楽真院ニ、本草学ヲ曲直瀬養安院ニ受ク、同三年内班侍医ニ列シ、製薬局務ヲ管ス、同五年歳三十七、偶々和蘭国献スル所ノ汽船、靚光丸操練既ニ熟スルヲ以テ、旗下ノ士ヲ募リ、随意試スルヲ得セシム、茲ニ於テ募ニ応シ允ヲ得タリ、然ルニ時ノ医長以謂フ、洋方医術ハ近者発令アリ、官医ノ之ヲ学フヲ禁ス、然ルニ今其献スル所

ノ船ニ乗ルハ、医術ニ管スルニ非ラズト言フモ、違令ノ罪ヲ犯スノ嫌アリト効セラレ、譴ヲ蒙リ家居スル中ニ、蝦夷地移住ノ命下ル、此ニ於テ、蔵書二千卷ヲ箱館府ニ納ルヲ以テ、黄金二枚ヲ賜フ、六月族ヲ挙ケ、夷地ニ移ル、至レバ乃チ移住諸士ノ頭取ヲ命ゼラレ、箱館ニ止マリテ之ヲ統轄シ、兼テ綿羊ヲ牧スルヲ督ス、此年秋千歳畔ニ採葉ヲ始メテ、朝鮮産同種ノ北五味子ヲ得テ、台府ヲ經テ幕府ニ献ス、將軍ノ用品ニ適スルヲ以テ、以來年々貢スベキノ命台府ニ下レリ、又タ、鎮台ノ命ヲ以テ、財ヲ市中豪戸有志ニ募リ、病院兼医学所ヲ建設シ、貧者ノ人ヲ療シ、医者ノ子弟ヲ教育シ、及ビ妓館ノ梅毒驅除法ヲ行フ事ヲ督ス、又命ヲ以テ、佛蘭訳官メルメデカシヨシニ邦語及ヒ邦書ヲ伝フ、又命ヲ以テ、七重村ニ菜園ヲ闢ラキ、各種ノ菜草、及ヒ夷地ニ乏シキ松杉ノ苗ヲ培植シ、長スルヲ待ツテ、之レヲ各官林官道及ビ海岸ニ移植スルヲ司リ、是ニ於テ、請フテ久根別川ヲ疏シテ、小舟ヲ有川村ニ通ジ、以テ箱館市ニ達スルヲ得セシム、又官諭ヲ得テ、薩人肝付兼武ノ軍川ノ原ヲ拓シ、種牛百頭ヲ南部地方ニ購フテ放牧シ、畜殖ノ後チ窮窘ナク内外ノ需要ニ充ツルノ事ヲ督ス、

文久二年、歳四十一、幕府特命三世將軍ノ時、人見友玄ノ例ヲ以テ、予ガ医籍ヲ改メ士族ト爲シ、箱館奉行支配組頭ヲ爲ス、此時ニ方リ、北蝦夷唐太ノ地、其魯西亜國ト境ヲ接スルヲ以テ、事端漸ク稠ク、時ニ重官ノ臨撫ヲ要スルニ因リ、同地ノ巡撫ヲ畢リテ、駐在過冬ノ命アリ、於是七月箱館ヲ發シ、八月北渡東西巡視シ、我有司未ダ曾テ到ラサル北緯四十八度、アイノ人種住地ノ極端タライカ湖ヲ巡シ、還テ同島久春古丹ニ駐止ス、同三年三月、任滿ツルヲ以テ南渡シ、更ニ本蝦夷ノ北岸ニ沿ヒ東行シ、惠戸路府・久奈志利二島ヲ巡シ、九月箱館ニ還ル、此年十二月、新徴組頭ノ内命アリ、徴サレテ江戸ニ歸ル、昌平校頭取ヲ命セラレ、上士ニ進ム、

元治元年、歳四十三、七月監察ニ転シ、將軍親シク、横濱鎖港談判ノ委任ヲ命セラレ、唯退ク後、同僚言ヲ爲ス、何ゾ其難ヲ陳ベテ固辞セザルト、予対ヘテ言フ、將軍在京ノ日、既ニ親シク勅ニ答ヘラル、今其難易ヲ試ミスシテ、之レヲ辞スルコト、臣子ノ分ヲ尽サ、ルナリト、於是竹本淡路守・土屋豊前守トトモニ、横濱英・佛・米・蘭四国公使ノ館ニ就キ、往復論弁スルニ、彼レ堅ク条約ノ明文ヲ執リテ聞カス、両月ニ涉リテ、未ダ局ヲ了スル

能ハス、偶々此事ヲ以テ、前ニ欧州各国ニ涉リタル池田筑後守(長恩)・河津駿河守等(祐邦)、其事決シテ成ルベカラザルヲ悟リ、使命ヲ終ラス帰来スルニ会シ、遂ニ談ヲ此ニ停メ、風月ヲ以テ、老中阿部豊後守ニ隨ヒ京ニ詣リ、其旨ヲ上奏セリ、慶應元年、歳四十四、横濱ニ駐在ノ命ヲ蒙リ、野毛官舎ニアリ、更ラニ命ヲ奉シテ、佛国船工ヲ役シ、軍艦翔鶴船ノ修理ニ從事シ、成ルニ及ンデ、軍艦奉行木下謹吾ト、佛ノ工手エーデ等ヲ率ヒ、其船ニ乗シテ八丈島ニ航シ、去歲漂寄ノ長崎吏人ヲ救ヒ、又曩ニ横須賀製鉄所掛リヲ命セラレシヲ以テ、帰途大島ニ寄り、噴火山坑ニ臨ミ、其燒土ノ我カ横須賀造船所ノ用ニ足ルヤ否ヤヲ驗シ、又我カ国陸軍軍制ヲ改ムルヲ以テ、同国陸軍士官甲比丹ジャノアン始メ数名ヲ聘シ、騎・歩・砲三兵ノ技術ヲ伝習セシムルノ議ヲ定メ、又別ニ教師ヲ延テ、同国語学校ヲ横濱ニ設ケ、訳司ヲ借ラスシテ其語ニ通シ、其材ニ從テ、將校タルニ堪ユル士ヲ養成スルヲ得セシメ、又彼国養蚕ノ凶年ニ方リ、我政府ノ厚意ヲ以テ、純精卵紙万枚ヲ彼ノ政府ニ贈リ、彼政府ハ其ノ酬トシテ、我ニ無キ所ノ亞刺種ノ牝牡馬匹數頭ヲ致サシメ、又我ノ米価騰貴ノ兆ヲ察シ、佛国公使ニ説テ、其新ニ領スル地ノ西

貢米ヲ輸入シ、之レヲ抑ユル等ノ如キ、小栗上野介(長應)・淺野伊賀守二人ト協議建白シテ、皆可納セラレ、其施設スル所、尽ク好結果ヲ得タリ、其後長州ノ事久シク決セス、將軍長ク京師ニ在ルヲ以テ、英・佛・米・蘭ノ四公使、各其軍艦ヲ率ヒテ大坂ニ到リ、兵庫ノ先期開港ヲ促カシ追ル、官其輿論ヲ擾ルヲ患ヒ、権リニ之レヲ諾シタルニ因リ、却テ朝野ノ人心ヲ激動シ、復々奈如トモ為ル能ハス、之レカ為メ、阿部(正外、白河藩主)・松前(宗広、松前藩主)二老中職ヲ奪ハレ、封ヲ削ラル、ニ至レルガ、是ヨリ前事急ナルニ際シ、二老中ヨリ、水野痴雲(忠寛)・大久保一翁及ヒ予ヲ徵ス、二人偶々病ミ、予独リ先ツ発シ至レバ、即チ兵庫開港、定期ニ復スルノ談判、專任ノ命アリ、外国奉行ニ転ジ、安藝守ヲ受任シ、直チニ横濱ニ到リ、四国公使ト談ヲ接シ云フ、前日大坂ニ於テ、兵庫ノ先期開港ヲ諾シタルハ、各艦退去輿論鎮圧ノ為メ、一時ノ權宜ヲ以テ、施シタルニテ、二老中ノ現ニ退職シタルヲ以テ見ルベシ、偕開港ノ必ラズ定期ヲ待ツニ非ラサレバ得ベカラザルハ、我が大君殿下ト各国帝王陛下トトモニ、批准ヲ経タル所ノ確乎タル條約明文アレバ、其臣下タル者、決シテ私意更改スルヲ得スト断言シ、主張弁論、彼ノ語窮スルニ至リ、始メテ我カ意ヲ

達シテ復命ス、
 慶應三年、歳四十六、五月外国奉行ヲ以テ、階ヲ勘定奉行ニ進メ、箱館奉行ヲ兼帯シ、急使佛蘭西行ヲ命ゼラル、此時將軍京ニ在リ、徵ヲ被ムリ、至レバ乃チ親シク旨ヲ諭サル、意彼我が官民ノ調停ニ在リ、此ヨリ前我が政府、佛国政府ト交際頗ル親密ニ至リ、公使レランロセツ最モ信用ヲ得テ、其上書中ニ用材ノ道、宜シク広ク求メサル可カラズ、故ニ漸ヲ以テ、門閥高官ノ弊ヲ革メ、自由擢ノ法奉行セラル可シト論ズルガ如キ、深ク將軍ノ意ニ適シ、會計・海陸軍其他主任ノ為メ、旗下士ノ統々参政ニ昇ルモノ多ク、猶ホ其他ニモ、彼ノ制度ヲ詳ニシ、模倣スル所有ラント欲シ、彼国博覧会臨場ヲ詳ニシテ、弟民政部公使ヲ派シ、兼テ欧州各国周遊ノ後、巴黎ニ留学セシムルニ至レリ、然ルニ保伝ノ人、該テ僚屬ノ言ヲ偏信シテ、佛ノ官民ヲ阻隔シ、終ニ互ニ疑惑ヲ生シテ、彼ハ公子一行ノ人、政府ノ旨ヲ矯メ、各国巡回ヲ名トシテ、公子ヲ英国龍動ニ遣シテ、留学セシメントスルニ決シ、密ニ館ヲ龍動ニ賃シ、酒醪既ニ準備セリト喋々シ、我が一行ハ仏人ノ我ニ過スル毎ニ、薄待欠儀ト密啓ス、然ルニ一行輩ガ、仏人モンプラン氏(Mendreau)ノ説ヲ容レ、鹿兒島藩ノ

博覽會出品ニ標スルニ、日本薩摩政府ノ字ヲ許スニ至リテハ、一國ニ府ヲ示スモノニシテ、大ニ國体ヲ傷ク等ノ事、公使ノ建言ニ出デ、且ツ兩疑ヲ融解調停スルハ、能ク兩國ノ情ニ通ズル、其人予ガ右ニ出ル者無シトノ議ニ因リ、此ノ命下レリト聞ク、乃チ六月ヲ以テ發シ、八月ヲ以テ佛國マルセル港ニ達スルニ、公子ハ既ニ巡回ノ為メ巴黎ヲ發シ、現ニ瑞西國ニ在リト聞キ、途ヲ軋ジ赴キ會シ、命ヲ伝ヘテ共ニ巴黎ニ歸リ、彼是弁析シ、猜疑立ドコロニ釈テ好情復全ス、然ルニ滞在善後ノ再命アリ、位ヲ準參政ニ進メラル、四年三月ヲ以テ巴黎ヲ發シ、五月歸朝ス、時恰モ至變ニ際シ、嘗テ共ニ政府ニ仕ヲ奉セシ者、或ハ冠ヲ掛ケ、或ハ田ニ歸シ、一人ノ廷ニ留ル者ナク、加フルニ、予久ク異域ノ地ニ居リ、身体亦疲レタレバ、事ニ任スルニ勝ヘス、因テ直ニ祿ヲ辭シ、農ニ府下小石川村ニ歸ス、明治七年報知新聞社ニ聘セラレテ、編輯員ニ列ス、同十年本所北二葉町、現住ノ地ニ移ル、同十一年當選東京學士會員ト為ル、同十九年歲六十五、老ヲ報知社ニ告ゲ、以來復タ事ヲ事トセス、悠悠殘年ヲ送ルヲ期ス、本年六十九歲（明治廿三年自記）

翁ハ自伝ヲ草セシ明治廿三年ヨリ、同卅年ニ至ル迄、借

紅園裏ニ芍藥ヲ培養シ、高節ヲ抱キテ、復世事ヲ問ハス、去年世ヲ逝リシ時ハ、齡七十六ナリキ、其人ト為リハ世ノ知ル所ニシテ、當時ノ新聞雜誌ニ、逸事遺聞ハ記載セラレ、殆ンド人ノ識ラント欲スル事ハ、尽ク皆世ニ紹介セラレタルガ如シ、特ニ自著ノ匏庵十種・横濱半年録等アリ、小伝ヲ叙スルハ頗蛇足ニ近シ、完成セシ伝記ハ、栗本家ニ於テ編纂ニ着手セラレシト聞ク、翁ガ七十年ノ細大ノ偉績ヲ知り得ルコトモ、恐ラクハ近キニ在ム、肖像ヲ卷首ニ掲ケタレバ、自記ヲ茲ニ載ス、

六六九 某將軍昔日談

江戸薩邸燒討チ並徳川ト薩摩ノ海戰

某將軍ガ、本誌ノ為メニ誤謬ヲ正シ給ヒシコトハ、先ツ記者ノ感謝スル所ナリ、次ノ問答ハ、史料ニ洪益ヲ与フト信ス、

問 ニツノ宝船ト申ス一篇ハ、御覽被下候ヤ、

答 見マシタ、澤サンカ御在世ナラ、申サウト思フ点

ガ沢山アリマス、

問 何卒、閣下ノ御高説ヲ伺ヒタク存シマス、

答 年月ハ慶應三年十二月二十五日ノ朝デスカ、品

川沖ニ在リシ薩摩ノ船ハ、春日丸ニ平運丸デハナイ、運送船ノ翔鳳丸ト言フモノデ、江戸ニハ島津家代々ノ位牌、其他仏具ナトカ、大圓寺ニモ其他ニモ有ルユヘ、其ノ様ナ貴重ナ品ヲ、薩摩へ運送スル為ニ、翔鳳丸ハ品川沖ニ繫ツテ居タノダ、

問 薩邸ノ士ガ江戸ノ市中ヲ強盗ナト致シ、金銀財宝ナドヲ船へ運ヒマシタト言フ説ハ、実証デ御座リマスカ、

答 (強盗ナト、苦笑ヲ洩ラサレツ、) 邸内ニハ浪人者カ居タノデス、落士テハナイ、全ク薩人ノ居ナイノデハナイカ、藩ヲ脱籍シタ益満ノヤウナ者カ、少シ居タノデ、他ハ方々ノ浪人テス、金銀ヲ運タト言フノハ、位牌ヤ仏具ナト、立派ナ御品ヲ積ミ込ミダノヲ、誤解シタノデセウ、又逃ケ出ス為ニ、薩摩ノ軍艦ガ沖ニ居タヤウニ書イテアルカ、左様テハナイ、十二月廿四日ノ朝ニハ、積ミ終リシユヘ、出帆スル都合デアツタノダ、
問 先日勝サンニ伺ヒマシタラハ、薩摩ノ浪人デ益満休之助ハ居タカ、他ハ江戸ノ浪人者ダノ、諸藩ノ

浪人者カ薩摩ノ屋敷ニ逃ケ込ムテ、乱妨ヲシタノダト言フ御話テスカ、左様テ御座リマシタカ、

答 其ノ通りテス、十二月廿五日ニ、庄内ノ士ダノ其^(道魁)他ノ市中取締リカ来テ、薩邸ノ留守居役柴山良介ト談判ヲ初メ、其談判最中ニ、発砲シテ戦争トナツタノダ、

問 其レテハ、浪人モノヲ御屋敷内へ御置キナスツタノハ、所謂黙許テ御座リマスカ、
答 マー其ンナモノテ、浪人モノガ、段々乱妨ニナツテ、市中取締リノ屯所へ鉄砲ヲ打込ムタノカ、大

層庄内ヤ何カノ腹ヲ立テサセタノダ、
問 浪人カ薩摩ノ船ニ乗ツテ、逃ケタト言ヒマスカ、

答 浪人モノハ、ウタセ(船名)ニ二十人許リ乗ツテ一艘来タカ、其ノ外ハ上総ノ方へ逃ケテシマツタサウダ、益満ハ陸ヲ逃ケテ来タノダ、薩人テ死ンタノハ、翔鳳丸ノ船長ト準士官カ邸内テ死ンタ、負傷者ハ五六人モアツタラウ、

問 旧幕府雜誌ニ、横井時庸(海軍へ勅メテ居リマシタモノデス)カ、二十五日ノ夕ニ、薩摩ノ船ト戦タコトカ書イテ御座リマス、

答 アノトキハ、徳川テハ回天ガ追ヒカケタノダ、翔

鳳ニ六十余ノ玉ヲ受ケタサウダ、翔鳳ニハ、長州

征伐ノトキニ載セタアメリカンボード(大砲ノ名)ガ四挺アツタカ、一発撃ツト、アトハ役ニ立ヌヤウニナツタサウダ、

問 翔鳳丸ハ、下田近クヘ碇泊致セシヨシ、

答 網代ヘハイツテ、蠟燭・油・日用品ヲ買ヒ、準士

官土屋傳次郎カ骨ヲ折ツテ、船ヲ繕ツタ、本當ノ修繕ハ出来ヌ、其レカラ紀州ノ尾鷲ヘ入レテ、ヤ

ツト兵庫ヘ来タノハ、十二月三十日テアツタ、

問 其レテハ、翔鳳ガ兵庫ヘ参リマシタカ、

答 澤サンノハ春日ト平運トアルカ、左様テハナイ、

平運丸ハ大坂カラ帰ツテ来タノテ(島津忠義公春日丸ニ乗リテ上京シ、平運丸ハ運輸ノ為ニ大坂ヘ行キシトカ聞ケリ、記者)

問 開陽丸カラ御掛合ヒニ参リマシタカ、

答 澤サンノ書イタ通りタ、此ノトキ兵庫ニ新納駿河(朱)「刑部ノ諱」

モ五代才助モ居タカ、相談シテ仏人ノモンブランニ聞クト、白旗ヲ着ケテ行ケトイフノデ、其通り

ニシテ、徳川ノ船ヘ談判ニ往ツタノダ、ダガ赤司

デハナイ、井上正太郎トイフ者デ、赤司ハ船長ニ

拜命シタ計リテ、其時マテ船長ハ井上正太郎トアツタ、三日ノ夜中ニ出帆シタ平運丸ハ、船長ヲ得(朱)「左平次」

能トイヒ、士官ハ有川東助・和田彦兵衛テ、春日丸ハ井上カ船長テアツタ、平運ハ淡路ノ瀬戸ノ方

ヘユク、春日ト翔鳳ハ阿波ノ沖ヘサシテ出テユク、

サウスルト今ノ八時カ九時頃ニ、苦ケ島ノ方ニ煙

カ見ヘル、段々近クナルト、徳川ノ船ニ相違ナイカラ、翔鳳ニ引キ方ヲカケタガ、翔鳳ハ一時間七

ノツトノ船ダ、横鎖ワウサユヘ、波カ高イノデ切レテ仕

舞ツタ、仕方ガナイカラ、翔鳳ハ先キヘ遣ツタ、

然シ幕府ノ軍艦カラ発砲シナイカラ、日ノ丸ノ旗ヲ下ケテ、⊕ノ紋ノ旗ヲ上ケタ、午後ノ二時頃二三回モ回転シテ打合ツタ、随分接近シテ砲撃シタ、ソレカラ、翔鳳ハ無事ニ帰ツタラウト思ツタラ、

土佐ノ或ル海浜ヘ乗リ上ケ、火ヲツケテアツタ、

平運ハ瀬戸内ヘカ、ツテ、無事ニ帰ツタ、

問 閣下ハ、其頃御乗り込ミテ御座イマシタカ、

答 澤サンノ兵庫ノ塾ニ居テ、ソレカラ亜墨利加ヘ一寸ト行キ、此トキハ春日丸ニ便乗シテ居タ、今考

へルト其時分ノ海軍ハ、無法ナモノテ、蠟燭ヲ持ツテ火薬庫へ出入シタリ、大砲モ小銃モ區別ナシニ、火薬ヲ用ヒタモノダ、

問 上野ノ書籍館テ史談會速記録ヲ見マシタラ、益満

某カ西郷ニ江戸ノ始末ヲ話シ、西郷モ同意ノ様ニ讀ミマシタ、勝サンノ話テハ、西郷ガソシナ事ヲ知ルモノカト、申サレマシタガ、

答 勿論、西郷サンナドハ少シモ關係ハアリマセヌ、

問 アノ時分、薩摩ノ人ガ天璋院様ノ御使ト偽リテ、

江戸ノ城中へ忍入り、火ヲ付ケタト申シマスガ、

答 ドウシテ、江戸ノ御城へ忍ヒ入ルコトガ出来ヤウ、

出入ノ極ク嚴重ナルモノデシタ、

以上ハ卅分間ノ問答ナリト雖モ、読者モシ本誌第二卷二号鹿兒島浪士討伐始末・第三号品海ノ薩艦砲撃・第五号二ツノ宝舟等ノ事実ヲ对照セムニハ、史界ニ一生面ヲ開クコトアルベシ、

翔鳳丸(ロチユス原名) 四百六十一噸

慶應四辰年正月四日自焚於阿波

春日丸(キヤンズト原名) 千〇十五噸

平運丸(スコットラント原名) 七百五十噸

六七〇 向山黄村翁

黄村翁ハ昔日譚ヲ好マス、茗ヲ煎シ、詩ヲ談シ、骨董ヲ愛シ、隼人正ノ昔ハ殆ンド全ク忘ラレタルガ如ク、純乎タル一大詩家ナリキ、然レドモ一日翁ヲ訪ヒシ時、カノ將軍職ノ辞表ノ事ニ及ビテ、翁ハ曰ク、当時昭徳院様(十四代將軍家茂)ハ、余ガ認メシ上ニ紙ヲ置キ給ヒ、透キ写シニナシ給ヒヌト語リシコトアリ、曆ヲ按ズレバ、慶應元年ニシテ、家茂公ハ御年廿歳ナリ、翁ハ、其他ノ事ヲ語ラズト雖トモ、若年ノ將軍家ガ、当年ノ御苦慮ヲ思ヒ參ラスレバ、客モ主人モ亦、他ヲ談ズルニ忍ビザリキ、

抑今日向山隼人正ノ名ヲ知ル者ハ、此ノ辞表ノ起草ヲ以テ翁ヲ知り、恰モ翁ガ幕府ニ於テ致セシカハ、此ノ辞表ヲ以テ、最大ノ事ト為スガ如シ、辞表ノ起草元ヨリ輕カラズト雖モ、翁ガ文治ノ上ニ力ヲ致セシコトハ、此ヨリモ大且ツ尊ナル事多シ、田邊蓮舟翁・木村芥舟翁ニ質シ、茲ニ小伝ヲ叙ス、恐ラクハ謬誤ノ少ナルモノト信ズ、文政九年丙戌正月十三日、江戸本所ニ生ル、榮五郎ト称

ス、父ハ兩番ノ士(七左衛門?)一色眞淨ニシテ、其三子ナリ、安政元年甲寅廿八歳ノ八月ニ、小十人向山源大夫ノ養子トナル、漢学ハ古賀精里ノ門ヨリ出デシ千坂莞爾ニ学ビシガ、後ニ昌平学校寄宿寮ニアリテ学ヒ、学問所教授方出役ニ進ミ、頗ル文学ノ誉アリキ、安政三年丙寅五月十六日、小十人組番士トナル、養父源大夫箱館奉行支配組頭トナリテ赴任ス、翁モ亦從ヒテ箱館ニ移ル、父死シテ其後ヲ承ケ、組頭トナル、後ニ外国奉行支配組頭ニ転ズ、文久元年七月外国奉行野々山丹後守、目附小笠原攝津守(五郎)ニ随行シテ對馬へ行キ、魯人退帆ノ後ヲ巡見ス、翁當時ノ事ヲ語リテ曰ク、今日ノ人ハ、幕府ノ對外策ヲ、一口口ニ迂闊ナリト評スレドモ、對馬ノ危地ニ在ルヲ知りテ、當時ノ閣議ハ、寧ロ兵備ニ重キヲ置カズ、魯モシ迫ルコトアラバ、英ニ談シ、英モシ逼ルコトアラバ魯ニ訴へ、孤島ヲ強國ノ間ニ投ジテ、彼ニモ此ニモ与へス、我が版圖ニ指ヲ染メサセジト計リシナリ、昔日ノ外交トシテハ、悔ル可カラザルナリ云々、此時ハ、既ニ魯人ハ尽ク退去シ、所々ニ陣營ヲ設ケシ跡アルノミナリシトゾ、之ヨリ先キ、翁ハ水野筑後守ニ知ラレ、此ノ人ノ推挙ニ由リ、目附ニ登用セラレ、小笠原圖書頭ニ随ヒテ京師ニ上リ、開國ノ

國是ヲ定メンコトヲ主張シ、一大奏案ヲ草シテ、同役土屋豊前守ト御前ヲ願フ、幕政ノ制ニ、目附役ハ大事件ヲ上申スル時、將軍ニ直チニ面謁ヲ得ル特権アリ、コレヲ御前ヲ願フトイフ、當時御前ヲ願ヒシガ、事ヲ左右ニ託セラレテ、叶ハザリシトゾ(即文久三年小笠原圖書頭ガ、水野痴雲・井上信濃守・浅野伊賀守ト二大隊ノ精兵ヲ率ヒ、五月廿日大坂へ上陸シ、兵力ヲ以テ、京師ノ激徒ヲ一掃セムト計リシ時ナリ)此時翁ハ小笠原氏等ト共ニ、譴責セラレタリト雖モ、忠鯁國ニ尽スノ熱心ハ、見ルニ足レリ、翁ハ外交ニ於テハ、専ラ開國主義ヲ執リ、内政上ニハ、飽マデ幕府ノ威權ヲ維持セムト力メタリトゾ、將軍職辞表ハ、此等ノ事ノ後ナリ、閣老阿部豊後守・松前伊豆守ノ二閣老ガ、兵庫開港ノ事ヨリ譴罰セラレシ時ニ、翁モ亦同ジク、譴罰セラレタリ(此時將軍職ノ辞表ハ出デシナリ)、慶應二年、各國ニ公使ヲ派遣スル議起リ、翁ハ先ヅ、佛國へ使節トシテ、派遣ヲ命ゼラル、今ノ全權公使ナリ、此時叙任シテ、從五位下隼人正ニナサレ、若年寄格トナル、田邊蓮舟翁ハ外国奉行支配組頭ニテ、隨行ヲ命ゼラル(蓮舟翁ハ、黄村翁ノ推薦ヲ得シナリトゾ)、此時徳川民部大輔、万国博覧会形況視察ニ佛國へ遣サル、

山高石見守ハ、保傳トシテ随行ス、當時ハ、今日ノ如キ^(信卿)制度ニ非サルガ故、全權公使モ、今日ヨリ論ズレハ、其職權等ニ不完全ノ事多シト雖モ、向山氏ハ公使ニシテ、山高氏ハ仏語ノクードノル、民部公子ハソベレインチーノ位置ニ立チシナリ、其他随行員ハ、杉浦愛蔵・保科俊太郎(後ニ陸軍大佐)・澁澤篤大夫・高松凌雲・箕作貞一^(貞吉)郎・山内六三郎及水藩・會藩・唐津藩ナリ、此時佛国巴里ニ於テ、ナポレオン三世ニ謁見アリ、通訳ヲカシヨント保科ニ為サシメ、皇帝ノ通訳ハカシヨン、民部公使ニハ保科ト定メ、首尾ヨク典礼ヲ了リシト雖トモ、カシヨンハ頗ル不満ニシテ、為メニ紛擾ヲ来タラシ、ト云フ(是ヨリ先、アレキサンドル・シーボルトニ通訳ヲ依頼セムト^(Alexander von Sibold)為シ、此ノ紛擾ヲ醸セリトカヤ)、加フルニ、博覧会出品ニ就キ、薩藩士岩下佐次^(方平)右衛門トノ間ニ物議ヲ生シ、章旗ニ大君ノ政府・薩摩ノ政府・肥前ノ政府ト標示シタル為ニ、政府ノ訳字グウエルメントヲ諸藩ニテ用ヒシハ、全ク公使向山ノ失計ナリト、カシヨン等ノ説日本ニ聞エ、終ニ翌三年六月、栗本安藝守ヲ佛国ニ派遣シ、翁ニ代リテ公使ノ任ニ当ル(事ハ連舟翁ノ旧幕府外交談ニアリト雖モ、他日其一班ヲ本誌ニ掲クルコトアル可シ)、帰朝スレバ既ニ幕

府ノ瓦壞ニ臨ミ、翁マタ施ス可キ道ナク、慶應四年三月若年寄ヲ辞ス、翁ノ事ハ、佛国使節ヲ以テ終レリト見ル可シ(コノ使節ノ要務ハ、世ニ伝フル幕府ガ仏国ヨリ金ト軍艦ヲ借り入レ、以テ薩長ノ如キ藩ヲ征伐シ、兵力ヲ以テ、既倒ノ額瀾ヲ回サムト欲セシニアリト伝フレドモ、翁ハ一言モ此事ニ関シテハ語ラズ)、栗本鋤雲翁ハ、其事ナシト明言セラレ、今猶雲ヲツカムノ感アリト雖モ、モシ此事ノ経画セラレタラムニハ、主唱者ハ主戦論ノ魁首小栗上野介ニシテ、栗本安藝守、佛国公使ロセツ・書記官カシヨン等ノ間ヨ^(Charles Robert)リ起リ、家茂公ノ耳ニモ入り、後ニ慶喜公ノ黙許アリテ、計画セラレシニハ非ザルカ、黄村翁ハ鋤雲翁ノ如ク、ロセツ、カシヨン等ト親シカラズ、為ニ中道ニシテ帰朝セシナリ、徳川家静岡藩ニ封セラシ後、翁ハ静岡或ハ沼津ニ住シ、藩營ノ為ニ力ヲ尽シタリ、後再ビ東京ニ来リ住ム、晩年ニハ老友松浦梅譚翁ノ晩翠吟社ニ參シ、風月ヲ談笑シテ他ヲ語ラズ、本年八月十二日、肝臓癌ノ為ニ世ヲ逝ケリ、享年七十二、茲ニ河田貫堂氏等ノ手ニ成リシ墓誌ヲ掲ゲテ、小伝ノ終リト為ス、

順毅先生墓誌

君諱榮、字欣父、号黄村、通称榮五郎、後叙爵従五位下、

隼人正、一色真淨第三子、母竹内氏、文政九年丙戌正月十三日生於江戸本所、安政元年甲寅八月出爲向山篤之嗣、配以長女、三年丙辰五月十六日爲小十人組番士、累遷爲若年寄、性温順而弘毅、在職有勲績賜賚爲多、君有二男四女、一男三女夭、養兄一色昭墨之子慎吉爲嗣、今爲海軍大佐、君明治三十年八月十二日以壽終於三田綱町私邸、享年七十有二、諡順毅、葬于駒籠榮松院先塋、

(男慎吉氏ハ職ヲ海軍大佐ニ奉シ、今ハ英國ニ在勤ス、征清ノ役ニ殊功アリシハ、世ノ知ル所ナリ)

附記

翁ノ容貌他ノ奇ナシ、一見是レ尋常一樣ノ俗人耳ト、月刊世界ノ日本ニ、氷村寒士ノ評セシハ真ナリ、恐ラクハ、外順ニシテ内毅ナリシナラム、詩ハ実ニ天才ニシテ、佛國ニ使セシ時モ、日夕吟咏ヲ廢サザリシトゾ、翁ハ民部公子ニ随行シテ、某地ニアリシ時、(Grenape-Chateau)ガリバルジーヲ見タリ、容貌風采、田舎漢ノ如ク、伊太利ノ大革命ヲ計リシ人トハ、信ゼラレザリシトゾ、其夜ガリバルジー派ノ委員ハ、旅寓ニ来リ、日本ガ二百年間昇平ニシテ、干戈ヲ動カサザリシコトヲ賞讃シ、平和ノ約束(世界ニ戦争ナカ

ラシメント約束スル仲間)ニ、公子ノ加盟セラレムコトヲ望ミ、漸クニシテ辞スコトヲ得ラレシトゾ、又翁ノ義父源大夫君ハ学識アリ、和歌ヲ善クシ、水野越前守(忠邦)ニ用ヒラレ、勘定組頭トナリシ人ナリ、翁ハ向山家ヨリモ、家格ノ善キ所ヨリ望マレシコトアリト雖モ、義父ノ人ト爲リヲ喜ミシテ、向山家ヲ嗣グニ至レリ、翁ハ義父ノ遺著十九部即二百四十一冊ヲ、太政官歴史課ニ献セシガ、今回金杯ノ賞アリ、他ハ聞クニ從ヒテ、本誌ニ載ス可シ、

六七二 阿久根新助書翰抄

卯十二月廿七日、日之御門前ニテ、正親町三條前大納言(実徳)様・正親町少将様ヨリ、薩州・長州・土州・藝州兵隊人数調練被遊

観覧候段、被 仰出候処、四藩共罷出調練御座候テ、賑々事ニ御座候、私共ニモ罷出備

観覧申候、是ハ前代未聞不容易儀ニテ、難有時之世代ニ合申候、一番ニ土州ノ備ハ、式拾人位ツ、二備之分ニテ、実ニ小人数ニテ御座候、二番藝州三備、是モ式拾人計ツ、ニテ御座候、三番長州一大隊之調練ニテ、

凡四百人位モ候半ト相見得候、四番此御方様備一大隊
六百人余罷出、私ニモ此備ニ加リ申候、一通リ調練仕、
其後ニ又一大隊十小隊ヲ一ツニイタシ、凡人數千人ヲ
越候半、諸郷番兵込ニテ御座候、其後ニ海軍杯之備、
色々之手花ヲ出シ申候間、人數ト云、手品ト云、他隊
モ目ヲ驚カス計ノ外ハ無御座候、他藩之考ニハ、凡四
五万モ候半ト取沙汰イタシ申候由ニ御座候、
右阿久根新助ヨリ、卯十二月廿八日仕出之書状写ナリ、

六七二 勝安房守意見書

卯十二月憤言兵部殿迄差出

從來天下ノ大権ハ門望ト名分ニ帰セスシテ、必ラス正
ニ帰セン、私ニ帰セスシテ、必ス公ニ帰セン、何ソ亦
毫モ疑ヲ存センヤ、其速ニ一正ニ帰セサルモノハ、士
夫不学ナルト鎖国ノ陋習ニ心酔スレバナリ、今世外国
往来容易ニシテ、下民四方ニ行ク、爰ヲ以テ風化日ニ
新ニ、従前ノ比ニアラス、下民日ニ明ニ、上ハ日ニ暗
シ、区内ノ紛授^懸於是起矣、膠柱ノ陋法如何ソ能ク之ヲ
垂御シテ、一静ヲ得ルニ足ラム、

近五六年、唯

天朝幕府云々ヲ以口実トシ、其間ヲノツカラ隔絶ノ思
ヲ成スモノ万ニシテ万、上侯伯ヨリ下士民ニ至ル迄、
京・攝ニ奔走シ江都ニ周旋ス、終ニ政府ノ何者タルヲ
知ラス、恣ニ国是ヲ定メントス、是唯名分ニ迷目シテ、
真ニ国是ヲ知ラス、政府如何ヲ深察セサルノ誤ナリ、
夫政府ハ全国ヲ鎮撫シ、下民ヲ撫育シ、全国ヲ富饒シ、
奸ヲ抑ハ賢ヲ挙ケ、国民其向フ所ヲ知り、海外ニ信ヲ
失ハス、民ヲ水火ノ中ニ救フヲ以テ、真ノ政府ト称ス
ヘシ、譬ヘハ華聖氏^{ワシントン}ノ国ヲ建ルカ如ク、天下ニ大功アリ
テ、其職ヲ私セス、静撫宜敷ヲ失ハサルハ、誠ニ羨
望敬服スルニ堪ヘタリ、

威令ノ行ハレサルハ、私アルヲ以テナリ、奸邪ヲ責ム
ル能ハサルハ、己レ正ナラサレハナリ、豈唯兵ノ多寡
ト貧富トニ由ラムヤ、此故ニイフ、天下ノ大権ハ、終
ニ一正ニ帰スベシト、

当今区内奸者アリ、陋習者アリ、大私者アリ、聚斂者
アリ、怨憤者アリ、紛々擾々、其向フ所ヲ知ラス、此
數者ハ皆後來ノ脚色、豪傑ヲ出タスノ襯衣、コレヲ馳
ル事能ハス、是ヲ免スル事能ハサルモノ歎、私議アリ

ト雖トモ亦弁セス、識者ハ必ス是ヲ察セム、
一都下ノ士、西國侯伯ノ其己レノ説ニ随ハサルヲ惡ミ、
或ハ疑テ叛セムコトヲ恐ル、殊ニ天下ノ大勢ヲ知ラサル
ニヨレリ、侯伯叛シテ不軌ヲ謀ルモ、決シテ其志達ス
ヘカラス、況ンヤ今侯伯中^(マ) 傑ナシ、皆小私ヲ懷キテ、
公明正大ヲ忘ル、ニ似タリ、一朝激シ叛セハ其下又其
主ニ叛セム、大侯伯ノ恐ル、ニ足ラサル、予明カニ之
ヲ知ル、然ルヲ察セス、群羊ニヒトシキ小侯ヲ集メテ、
是ニ当ラムトスルハ、自ラ瓦解ヲ促カスナリ、何ソ陋
ナルヤ、集合益々多クシテ、弥益ナシ、終ニ同胞憤争
ノ基ヲ成ス歟、将下民ヲシテ離散セシムルニ過サルヘ
シ、若夫後來侯伯ヲ剗小スルモノハ、草莽空奉徒中ニ
興ラム、駅長ニアラサレハ、草鞋ヲ取ルノ人ナリ、今
ノ侯伯士夫ハ其職ヲサマラス、座シテ人職ヲ受クルノ
徒、生ナカラ重衾、其從属スル所ノ者モ亦座食不耕不
織、活計ヲ下民ニ取ル、猶足ラス、重^(マ) シテ民ノ膏血
ヲ吸フ、主宰ノ職何レニ在ルヤ、人心ノ離散日ヲトシテ
知ルヘキナリ、唯一名分ノ未タ破レサルヲ以テ、瓦解
ニ遲速アル而已、深慮シテ思ハサルヘケンヤ、
十数年前、景山公不世出ノ質ヲ以テ、尊

王攘夷ノ大術ヲ主張シ、士夫数百年ノ大睡ヲ一破ス、
此時上ハ其説ノ大ニシテ根底無ク、終ニ戦争ニ及ハム
コトヲ恐レ、半途ニシテ破レリ、是ヨリシテ天下紛
擾、是非ヲイフ者比々トシテ不絶、コレ其識ノ小ニシ
テ、其術数ヲ測ル能ハサルカ故ナリ、凡ソ術半途ニ破
レハ、其害モ亦、カナラス害ノ生スル、説者ノ罪ニア
ラス、半信半疑悠々不決ノ罪ナリ、亦何人ヲ咎メム
ヤ、此後天下ニ大識者無ク、区々トシテ其説ニ酔フ、
マタ醒ルモノ無シ、況ンヤ開鎖異同ヲ論スル者ハ、規
模マス／＼小、今日ニ至テハ、又会議政府ノ議アリ、
静ニ考フレハ、邦人其識ノ開クル所ヲノツカラ明ニシ
テ、座ナカラ以テ後來ヲトスルニ足ルヘシ、今後邦人
ノ識量益々進マ^(マ)、是ヲ統御スルニ大正ヲ以テシ、權
謀ニヨラス、誠実高明ナラハ、拱手シテ天下ヲ一新ス
ヘキナラム歟、
今小侯士夫ヲ賣ムル如上ハ甚タ激ト雖モ、決シテ左ニ
アラス、夫レ士夫ノ世ニ立ツ、上天職ヲ奉シテ万民ヲ
撫育シ、国家鎮撫ヲ補弼ス、ヨロシク其任タルヘシ、
然ルヲ不察、戦ハ必ラス破レム、泰平ノ生活、其禄ヲ
以テ足レリトセス、重賦聚斂民ヲ苦シメ、猶不足、市

民ニ憐ミヲ乞フテ今日ヲ送ル、官ニ在ル者ハ、其己レニ倭スルヲ挙ケ、己レニ逆フヲ避忌ム、今ヤ

君主絶世ノ資、雄大ノ卓識ヲ以テ、天下ヲ匡政セムトス、然ルヲ察セス、区々トシテ私心ヲ挾ミ、其雄大ヲ憚ルモノ、如シ、殊ニ憤激悲歎ニ堪ヘサル所、希クハ私心ヲ去テ、公平ノ亮察ヲ仰ク而已、

一慶應三年、上国ニ在テ事ヲ執ル者、探索者ノ密告セシ所 [マ]ヘトモ、皆皮相ノ見ニテ、多クハ門閥官ヲ以テ是カ最トス、予カ考ユル所是ト異ナリ、

薩藩

西郷吉之助 (隆盛)

大久保市蔵 (利通)

伊地知正治 (友実)

吉井幸輔 (経善)

村田新八 (桐野利秋)

中村半次郎 (清麿)

小松带刀 (爲)

税所長蔵 (爲)

萩藩

桂小五郎 (本吉孝允)

廣澤兵助 (眞臣)

伊藤俊助 (博文)

井上聞太 (爲)

山縣狂介 (有朋)

前原彦太郎 (一誠)

山田市之丞 (顯義)

高知藩

後藤象次郎 (元薄)

板垣退介 (正形)

佐賀藩

副島二郎 (種臣)

大木民平 (喬任)

江東新平 (藤)

大隈八大郎 (重信)

此輩数人ニ可不過、然トモ大事ヲ決スルニ到テハ、西郷・大久保・桂ノ手ニ出テ、其他ハ是ヲ賛シ、是ヲ助クルニ過サルヘシ、我カ間隙此時報テ云、徳川將軍ニ代ル者ハ、薩欽或ハ長藩ナラント、此説ニ依テ、江戸ノ人心恟々トシテ藩ヲ敵視シ、敢テ他ヲ省ミス、軍艦ノ如キ一途此説ニ酔ヒ、薩摩ニ逼リ討ント云、或ハ轡

ノ紋アル旗章ハ、海中ニ航セシメスト云、人心ニ侵入シテ不可回、予説テ云、官軍大勢ヲ卒ヒ来攻ストモ、予ハ確トシテ大是ヲトリ、他ノ是非強迫ニ驚サル時ハ、彼又如何セン哉、此議聞ク者ナシ、又聞クモ、一時偷安ノ策ト思ヘリ、今日ニ及ンテ豪傑ナキ、将如何セン哉、

一初官軍東下ノ事聞ヘテ、府下甚紛擾、有司其策ノ出ル所ヲ知ラス是戊辰正月榎本和泉、津田真道、西周助、大鳥圭介ノ輩謂テ曰、諸士貴賤ヲ不問城ニ入ラシメ、衆議ヲ以テ処置ヲ決セント、皆是ヲ可トス、此時予会頭ニ当リテ、出テ其説ヲ聞ク、衆議紛々、又鼎ノ沸クカ如ク、可成モノ暫時ニシテ不可ト変ス、不可ナル者マタ可ト成ル、其説ノ高尚ナル事実ニ不適、事実ニ切ナルハ論破セラル、我出席一日ニシテ、告テ曰、諸君宜敷衆議ヲ尽スヘシ、予ハ為スヘキ施スヘキ儀山積ス、空敷衆議ヲ聞ク不能ナリト、従是欠席衆諸ニ任ス、此後衆議ヲ以テ、何事ノ成リシヲ見ス、唯空敷時日ヲ消スルノ場タリ、

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編
慶應三年

六七三 〔黒田嘉右衛門海陸軍組織改変意見書〕

六七三ノ一

一此節被召建候陸軍八拾人ツ、一隊ニシテ、六隊四百八拾人、一先可被仰付哉、左候得ハ当分被仰付置候砲術館稽古窮士人数百六拾人モ、二隊ニ被相分、惣合八隊ニテ、六百四拾人ヲ一大隊ニ被召成、可然奉存候事、

一右通洋銃隊ニ被引替候得ハ、大隊司令官老人、教頭老人、教佐老人、中隊司令官^{是則一隊毎之隊長也}八人、都合拾老人、格別之諸役者ニ候由御座候間、能々御人撰ヲ以被仰付度奉存候事、

一前条拾老人之諸役者、当分之御小姓与番頭、当番頭之内へ被仰付儀御座候ハ、其拾老人之分ハ、陸軍操練所へ每勤、其隊下八拾人ヲ混ト請持ニ被致、隊長外之番頭人数ハ、一切操練所ニ不立障様被仰付、自然出席被致度、懇望之人ハ隊中兵士之員ニ被召加度、勿論吟味役并組方書方役等之儀モ同断、

一諸隊兵士之列ニ、不相加面々ハ、成文操練所ニ不立障様有御座度、先年砲術館ニテ稽古被仰付候時ノ如ク、組方役人等余多入込、権柄役威ヲ以押付候様之風采有之候テハ、則人氣沸騰之基御座候間、此節ハ、一切余計之役場立交り候儀無之様、被仰付度、勿論壯士之取締向ハ、各受持之隊長ヨリ引受被致候儀、当然之事御座候間、別段取締役出席ニハ及間敷、自身其儀不相調候テ、吟味役并書役等之助力ヲ被相頼体之人ハ、素ヨリ隊長之任ニ不堪人ニ相違無之候間、隊長被仰付間敷奉存候事、

一御城下六組之儀ハ、寛永年鑑以来、治世之御作法ニテ、乱世之古制ニハ無之、方今之世態ニ立至り候テハ、弥時世ニ不相合事ノミ御座候間、此節断然被相廢、御小姓与之名目ハ、古制之通大番之名ニ被復、都テ海陸軍

隊ヲ以組立、平常定式之申出物等ハ御用人ヘ相付遂執奏、其他達事等奏者方ヘ被相委、当番頭前ヨリ之取扱ニ被仰付候ハ、名実ニモ相当可仕、左候テ、是迄ハ門闕ヲ以、御城下物主等被仰付来候得共、向後隊長之儀ハ、門地家格ニ不拘、其器量相当之者ヘ可被仰付、勿論大身分之子弟諸役人モ、壮年之輩ハ、追々諸隊兵士之列ニ可被召加旨、分テ被仰渡度、無左候テハ、真ニ士氣振起之期ハ無覺束奉存候事、

一 兵士人数星合、且御扶持米差紙等之取扱ハ、当分砲術館掛之人数之内、年輩相長候者、御見合ヲ以兩三人差分り、書役之場相勤候様被仰付、其余ハ都テ隊中被召加度候事、

一 操練所内ヘハ、星合且差紙等取扱候御座ノミ一局被相建、当番御軍賦役相詰、其他組頭等モ隊長被仰付候人数ハ、其局ヘ打込出席有之、左候テ書役之場ハ、前条通砲術館掛之人数ヨリ相勤可然哉、組方御軍役方ト別局相立候テハ連々隔絶イタシ、諸事混雜之基ニ御座候事、

一 台場受持之儀モ、右被召建候諸隊ヨリ、繰廻之受持ニイタシ、大砲・小銃兼操練仕候ハ、別段御先手等ノ名目被立置ニ不及、御手当組ハ被相廢可然奉存候事、

一 京都其外筑前辺ヘ、是迄被差出来候守衛人数之儀、以來ハ必此節被召建候諸隊之内ヨリ、必被差出候筋被相究置、其外隊中不相加者ハ、如何程守衛方願申出候テモ、決シテ不被仰付様、御治定有御座度候事、

一 当分御軍賦役詰所ヲ、先達テ陸軍方ト被名付候処、其通ニテハ、海軍之事ニ全關係不相成筋相当リ、海陸軍政之紀律ヲ相預リ候役局之名実ニ不相叶候間、以來御軍賦役所ト被相改度奉存候、左候テ御軍賦頭取并御軍賦役同見習ヘ、銘々海軍・陸軍双方分テ、掛リ被仰付度奉存候事、

右通取調申上候、以上、

御勝手方御用人席陸軍掛
御軍賦役頭取兼務

黒田嘉右衛門

六三二
一 目今寺社方跡ヘ被召建候陸軍操練場ヲ、陸軍方ト被相名付度、左候得ハ、都城邸跡海軍方ニ相并名実相当可仕候、

一 御軍役方之儀ヲ、陸軍方ト名目被相替候得共、右通ニテハ、全海軍之事ニ關係不致筋相当リ、軍政局之名実ニ不相叶候付、御軍賦役所ト名目被相替、御軍賦役之

内へ、左ノ通、銘々海軍掛、陸軍掛、被仰付度奉存候事、

海軍掛 川上勘解由

陸軍掛 安田喜藤太

海軍掛 小野郷右衛門

陸軍掛 坂元廉四郎

海軍掛 田代宗次郎

陸軍掛 田中治右衛門

海軍掛 門松市兵衛

陸軍掛 園田與藤次

海軍掛 川南東右衛門

陸軍掛 松田健四郎

海軍掛 淵邊直右衛門

一御小姓組番頭之儀モ右ニ被準、各海軍・陸軍双方へ掛被仰付、左候テ当番頭ヨリ寄勤ノ人ハ、都テ寄勤御免ニテ、当番頭へ被復可然奉存候事、
一組方吟味役之儀モ右同断、

一陸小姓之儀ハ、古制ニ被基近来被召建候得共、当分ニテハ、奥御小姓・御近番、即其場ニ相当リ候ニ付、別

段被立置ニ及間敷奉存候間、陸小姓之名目ハ被廢、右人数ヲ以テ、陸軍隊ノ什長・伍長ニ被仰付、当分陸軍兵士願望人数ヲ、即戰兵ニ被仰付度候事、

一当分之御手当、御先年御旗本之名目ハ被相廢、以来ハ京都守衛、其外出兵被仰付候節ハ、海陸軍隊之内ヨリ、時々之御吟味ヲ以被差出度候事、

一兵士之儀ハ、十五六才ヨリ以上四十才迄之壯年ニ、限度候事、

本文窮士御救助御差分高七千石之儀ハ、以来陸軍方へ被召付、左候テ内千石比志島転任方御宛行之儀ハ、是迄之通致取扱候様、被仰渡度候、

本文大砲掛拾人へ被成下候儀ハ、是迄之通ニ被仰付置度候、
本文之儀モ前条同断、

六七四 〔小松帶刀・町田内膳ヨリ在国ノ家老へ書翰〕

慶応三年正月二十六日

有栖川帥宮様
(織仁親王)

中山前大納言様(忠能)

右是迄

思召有之、被止参

朝他人面会置、屹度可被及

御沙汰之処、就此度

御凶事、格別之以

御憐愍、出仕被

仰下候、后後堅固改心可有之候、

橋本中納言様(実徳)

勧修寺前弁様

右是迄

思召有之、被止参

朝他人面会置、屹度可被及

御沙汰之処、就此度

御凶事、格別之以

御憐愍、出仕被

仰下候、后後堅固改心可有之、自今本番所参勤之事、

豊岡大蔵卿様(理徳)

正親町少将様(公徳)

橋本少将様

烏丸侍従様(光徳)

右是迄

思召有之、差扣被仰付置、屹度可被及

御沙汰之処、就此度

御凶事、格別之以

御憐愍被免差扣、后後堅固改心可有之、自今本番所参

勤之事、

滋野井中將様(実徳)

右是迄

思召有之、差扣被仰付置、屹度可被及

御沙汰之処、就此度

御凶事、格別之以

御憐愍被免差扣、后後堅固改心可有之候、

右撰政様被命候事、(三条有敬)

右之通昨廿五日被仰渡候旨、塚本圖書より為知越候段、

御留守居申出候付、此段申越候条、

太守様

中将様可被達

貴聞候、以上、

卯正月廿六日

町田内膳(実徳)

小松帶刀〔清應〕

嶋津圖書殿〔久武〕

桂 右衛門殿〔久武〕

嶋津伊勢殿〔広基〕

川上但馬殿〔久遠〕

新納刑部殿〔久餘〕中三

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

六七五

〔新納嘉藤二ヨリ大久保利通へ書翰〕

包紙

京都

大久保一蔵様

平信要用

新納嘉藤二

尚々其後いよ／＼御元氣ニなりまさらせられ候

筈、猶時氣随分御いとひ被成度奉祈候、御新人へ

よろしく御伝置被下度、御頼申上候、かして、

春暖之節御座候得共、愈以御壯健可被成御座、恐悦奉

存候、於爰許御宿元江も參上、御左右申上候、御一同

様御堅勝被成御座候間、御懸念被成間敷候、次ニ私無

異去ル朔日平明着帆、連勤仕候間、乍余事御休意思召

可被下候、去ル十九日京都御留守居兼務、御勝手方江も相勤候様被仰付、難有仕合御座候、右之御礼分て申上候、便船次第上京仕合ニ御座候、廿日比は御先船出帆可有之歎ト考申候、借御当地別義無之、

二之丸公御上京之御儀、其御許にて、御評議之通被為〔島津久光〕

叶 御意候由にて 西郷氏御使者にて、土佐老君江被〔山内豊信〕

仰合ニ相成候処、無異儀御同意、三月中其御地江御出〔伊達宗敬〕

会之御治定ニ相成、宇和嶋老公は、大抵なから御同意ニは相成候よし、吉之助殿ニは、近日中より肥前大村ヲ始りて、経回上京之含ニ御座候由、旁御十分之御都合ニ成行可申と、乍恐大慶之御儀奉存候、吉之助殿

宇和島にて説破之次第杯誠感服之至御座候、巨細之儀ハ、夫々より被申上事候間、承候迄を一渡御歎旁申上候、諸方為指異論も無之、存之外静謐なる体ニ見得申候、大慶之至ニ御座候、然は其御地滞在中、始終御懇意被成下、誠以難有仕合奉存候、其上出立之折は、御手

厚御儘物被成下、重畳難有奉存候、御礼厚申上候、出足之前晚御礼御暇乞ニ罷出候得共、西郷氏江御出之跡、

追て罷出度考候得共、仕廻も仕掛居候間、先内江と罷

歸候て、不遂拝顔不本意奉存候、しかし其晚ハ、先生

之御あらひ出候由承、さてハ丁度よろしかりしと、一笑ニ及申候、先生定刻より、早く御発足ニ相成候は、貴君之御出を避ケ被成候ての事候由、川船中其咄賑々敷、気味合面白承事ニ御座候、蒸気船中は、木場氏と相部屋ニテ、安氣ニ御座候、下着之上は、俗客之出入〔疑れたの方言〕ダレ申候、一日はなら幸との錢崎別庄ニ無隠老と差越、揮毫之興も有之、久々ニおもしろく御座候、余は碌々可申上儀も無之候、花ハ中旬方盛ニテ、ひな々から六年賑のめつらしさ、さすかニなつかしう心とまり申候、其御地ハまた開出もせしなと噂申暮候、無程罷上り旁可奉謝候、嫡子左平太都合其勢之數ニ可入年輩ニ罷成候間、此節は自分ニても召列度、大砲隊之稽古、折角仕様子ニ御座候、先は御礼且御左右御伺旁、如是御座候、恐惶謹言、

二月廿九日

新納嘉藤二

大久保一蔵様

参入々御中

二白、世上さまでかはり候儀も無之候得共、五年之内、可在人之あらぬかいと多く心さひしく御座候、親類内ニは、田代所おは只苞人、入魂中ニハ、後醍

院・郡山・前田之外、老人更ニ無御座候、かして、

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

六七六 〔長防士民中ヨリ歎願書〕

六七六ノ一

三月朔日留守居三宅万大夫義稻葉閣老江持参、公用人松井鐵之助ヲ以差出候事、

天朝江ハ差出不申候、

藝州ヨリ取次長州歎願書、卯三月五日京都ニテ差出

候事、

長防士民一統泣血奉歎願候、抑主人父子積年来奉対

天朝、幕府忠敬之道相尽度、身家ノ困苦艱難ヲモ不願、

御旨意筋ヲ奉粉骨奔走ヲ遂ケ、海内一致、生民塗炭ニ

不苦様仕度トノ外無他之心事ハ、追々

勅諭・台諭ノ旨モ被為在候、巨細被知召分候処、關国感

奮ノ余リ、乍恐其後ノ御沙汰ニ疑惑ヲ生シ候ヤ、過ル

子ノ秋少壯ノ者、主人父子ノ意筋ニ違背シ、於京師奉

恐入候始末ニ立至候族モ有之、就テハ主人父子一円承

知不仕儀ニハ御座候ヘトモ、何共奉恐入候次第ニ付、

早速夫々所置申付、御託ノ筋相立候処、惣督尾州前大納

言様、巨細被為聞召届、速ニ御解兵被 仰出候モ、畢竟右京師ノ一条形跡ヲ以論候へハ、素ヨリ奉恐入候次第二候へトモ、其情実御酌量被成下候へハ、海隅辺僻ノ国柄、頑固愚直ノ性質ヨリシテ、

勅諭・台諭ノ旨ヲ重シ、誠心感奮ノ余リ、確守ニ過候心底ヨリ差起リ候次第等、無遺漏被為知召被下候事ト一統難有奉存、不遠御寛大ノ御沙汰、被仰出候御事ト奉待候処、丑冬ニ至リ、再ヒ大小監察御役々

天幕ノ御耳目トシテ、御下向家老ノ者被召出、主人父子ノ誠意ヨリ、私共一統臣子之分、無余義情実マテ無残被為聞召届、巨細承知トノ御事ニ付、此上ハ最早平常御寛典ノ御処置筋被仰出候御事ト、一統奉渴望居候処、不測モ昨寅夏ニ至リ、闕国意外ノ御達面被 仰出、

主人ヨリ右一途トシテ差出置候名代家老ノ者江ハ不被仰達、却テ御拘留ニ相成、闕国疑惑不一形候ニ付、其砌追々情実ヲ尽シ御願申上候得共、分毫モ不被為聞召分、俄ニ御軍勢被差向、領内御侵掠、無辜ノ人民塗炭ニ苦候次第二付、乍恐

聖天子聖明仁慈ノ御思召共不被奉考、就テハ素ヨリ不相好儀ニハ御座候

得共、不得止聊カ防禦之方便等仕、且御役々様方御轅門罷出、名代御拘留始末御処置振、奉伺度所存罷在候処、御老中松平伯耆守^(宗茂、官位階七)様江、御拘留ノ家老被召出、巨細ノ情実御聞届ヲモ被成下、其後幕府御内命ヲ以、勝安房守殿^{本ノマ、}態々被差下、鄭重御思召ノ程ヲモ、入々被

仰聞候処、其辺ノ御筋合ハ、今以為何御沙汰モ無御座折柄、御休兵被 仰出候へトモ、暫時御見合せトノ御事ニ付、何時 御思召ニモ無之、急襲等出来候モ難計ト、闕国安堵不仕候ニ付、其段尊藩様迄申出置、不得止最

前ノ場所ニテ、其後ノ御沙汰奉待上候事ニ御座候、然ル処去七月 將軍御薨去被為成候由、不一形奉驚歎罷在候処、至臘末乍恐 主上御不予、遂ニ 崩御被為遊候御様子奉伺候テハ、殊更驚愕悲歎恐懼罷

在候次第二奉存候、恭シクモ奉考候ニ 先帝聖明仁慈ノ御實ヲ以、寛仁大度ノ 歎慮ヲ被為廻、最前ヨリノ次第、一々御親歴被為遊候御事ニ付、主人父子ノ誠意ハ申上候マテモ無之、闕国

臣子、余義ナキ情実ニ付、巨細被為

知召分、遂ニ御寛典被 仰出候ノ

御思召モ被為在御様子、窃ニ奉佐聞難有仕合奉存居候
処、恐多モ今日ノ御様子奉伺候テハ、此余哀訴歎願可
仕手段モ有之間敷歟ト、鬪国別テ悲歎罷在候処、当節
新天子御踐 祚、加之將軍御宣下モ被為在候由、就テハ
先帝御寛仁之

叡慮ニ被為基候テ、於長防君臣モ、何卒膏雨霽然之御
恩沢奉蒙候様被為成、速ニ平常御寛大ノ御沙汰筋被仰
出被下候ヘハ、大旱ノ膏雨同様、於主人父子最前ヨリ
忠敬ノ誠意且海内一致、生民塗炭ニ不苦様仕度トノ、鄙
衷モ相届候而已ナラス、鬪国士民一統別テ難有感泣可
仕候間、何卒此段被為聞召分被下候様、泣血再拜、奉
歎願候、激切屏宮惶懼無已、

二月

長防士民中

六七六ノ一
朝廷御大變ニ付テハ深奉恐入、御領内屯兵引揚候段、
前日以使者得御意候、然ル処、収兵ノ義ハ、昨秋以來
兩度陳述仕候次第ニテ、猶今般一統士民ノ情実、別紙
ノ通罷在、於尊藩ハ、素ヨリ国情御承知ノ御事ニ付、
士民トモ御依頼仕、且此間恐有變字防戦ノ折柄、無余義御

借地仕候事モ有之、御領内ノ義ハ収兵仕候ヘトモ豊・
石兩地ニ至候テハ及一戰、幸守禦ヲモ得候仕合、後來
ノ所如何ノ勢ヲ相釀候モ難計ト、只管懸念仕居候ニ付、
兩地ノ所ハ、弊国御処置平常如故ノ御沙汰被
仰出候マテハ、行形人数出張罷在候間、此段御含置被
下候様仕度候事、

右ノ通

六七六ノ三
覺

今般

朝廷御初政綱紀御維新ノ時ニ相成、就テハ国内士民ト
モヨリ別紙ノ通、歎願申出、私共ニ於テモ同様日夜希
望罷在、毎々御手数相掛、愧謝ノ至ニ御座候ヘトモ、
臣子不得止ノ情実御酌取被下置、宜敷御取計ノ程、一
統不堪至願奉存候、此段安藝守様江被仰上被下候様奉
願候、以上、

毛利大膳

家老中

二月

右ノ通

六七七 〔慶喜兵庫條約ノ履行ニツイテ奏聞〕

丁卯三月五日

六七七ノ一
一昨丑十月中條約

勅許之節、兵庫ハ被止候旨 御沙汰之趣、早速外國人
へ可申渡之処、左候テハ忽瓦解ニ及ヒ、折角平穩之御
趣意モ水泡ニ可相帰、且一旦取結候條約相變候テハ、
只々信ヲ万国ニ失候而已ニテ、所詮可被行儀ニ無之、其
段深心配仕候へ共、一時切迫ノ情態御諒察之上、條約
勅許被為在候儀、尚又彼是申上候モ、斟酌可仕筋ニ付、
先其俣御請申上置、篤ト熟考可仕奉存候、折柄長・防
之事件差起リ、引統故大樹之大故ニ及ヒ、遂ニ開港期
限差迫リ、各国ヨリハ毎々申上候条件モ有之、就右猶
再心熟慮勘弁相尽候処、條約變更之儀、強テ施行仕候
ハ必定、義理曲直之論ニ及ヒ、大ニ不都合相生シ、詰
リ百万生靈徒ニ塗炭ニ苦シミ、 皇國之御浮沈ニモ相
拘候様、可成行ハ目前ニ有之、右様ノ形勢立至候上、
無拋條約履行候テハ、実ニ 御國体御威信共總テ不相
立、於職掌最不相濟次第、殊ニ堅艦利器彼所長ヲ取り、

皇國之富強ヲ謀候ハ、今日ノ急務候間、何レニモ開港
可仕ハ、至当之儀ニ有之、然ルニ今更彼是申断候ハ、
是迄苦心仕候富強ノ術モ、一時尽果可申、且條約之儀
ハ、各国交際之基本ニテ、永久不易之規則無之候ハ、
遂ニ強ハ弱ヲ凌キ、弱ハ強ニ被制候様可相成、西洋諸
國大小強弱ハ御座候へ共、全ク信義ヲ重シシ、條約致
遵守候ニ付、凌奪并吞之患モ無之、夫々立國罷在候事
ニテ、條約之守否ハ國ノ存亡ニ相拘候儀ニ御座候へハ、
旁以一旦取結候條約ハ、是非遂行不申候テハ、難相叶
奉存候、就テハ被為於
朝廷候テモ、右之事態篤ト御勘考被為在候様仕度、利
害得失如何ト被
思食候儀モ御座候ハ、參
内之上、巨細言上可仕奉存候、將又宇内形勢變遷之儀
ハ、追々申上候通ニ御座候処、古今之情態尚篤ト考究
仕候へハ、万国森列土地風俗之異同ハ有之候へ共、均
シク天地之化育ヲ受、今日其生ヲ遂、其死ヲ完ニ致候
ニ於テハ、素ヨリ彼此之別無之、既ニ民生同胞ニ候上
ハ、從テ信義ヲ通候ハ、天地之正理ニ候処、
皇國環海之御國柄ヲ以テ、坤輿中東西要衝之地ニ當リ、

即今海外諸州逐日相開、万里比隣自在奔走之砌、独旧
軌ヲ墨守、万国普通之交接不致候テハ、自然之大勢ニ
相戾リ、不容易禍害頓ニ可相生奉存候、因テハ形勢之
變局方今之機会ニ候間、四海兄弟一視同仁之古訓ニ御
基被遊、天下ト共ニ御更始被為在候様仕度、左候ハ是
迄之陋習一洗、数年ヲ不出富強充実、

皇国之御武威弥増、皇張奉安 朝意候様尽力可仕奉存
候、此段

奏聞仕候、以上、

三月五日

慶喜

六七七ノ一
一御内々

大樹代替ニ付、各国公使面会、先達テ言上濟ニ付、此
節各国へ相達候処、英吉利国兼々申立度事件有之由ニ
テ、攝海渡来致シ、無程各国公使參着ニ可相成候間、
不日大樹下坂被在之、可被遂面会ト奉存候、尤兵庫開
港条約履行之儀ニ付テハ、此程見込之趣被申上置候通
ニテ、今般下坂之趣意ハ、其筋之談判ニ被在之候為ニ
ハ無之、全前件代替面会之廉ニ被在之候間、此段モ御
承知相成候様被致被存候、尤下坂時日之儀ハ、猶申立

可有之由ニ候事、

三月十八日

六七七ノ三

一兵庫開港之儀、一昨年被止御請之処、猶又今度申立之

次第、不容易重大之事件ニ付、被為対

先朝候テモ、難被及

御沙汰筋ニ付、尚早々諸藩見込ヲモ可被

聞食候間、於大樹モ篤ト再考可有之事、

三月十九日

六七七ノ四

兵庫開港条約履行之儀ニ付、過日見込之趣建言仕候処、

右ハ重大之事件、被対

先朝候テモ、難被及

御沙汰筋ニ付、尚早々諸藩見込ヲモ被

聞食候間、篤ト再考可仕旨、

御沙汰之趣奉畏候、慶喜儀年来

闕下ニ罷在、

先朝以来御趣意之程親敷相同居、殊ニ一昨年之

御沙汰モ御座候上ハ、開港等輒ク建言可仕筋ニ無之候

処、

皇国之御為利害得失勘考相尽候得ハ、何レニモ過日建言仕候通之儀ニ無御座候テハ、永久御国体難相立、輕

重大小再三斟酌仕上候次第ニテ、此上外ニ勘弁可仕

様無御座候、且一旦取結候条約變更之儀ハ、所詮難相

叶事勢ニ御座候間、各国ヨリ申立候儀有之節ハ、過日

建言之趣意ヲ以、夫々申達置候事ニ御座候、尤打統国

事多端之折トハ乍申、重大之事件ニ付、聊モ不打捨、

何ト欵取計不申候テハ不相濟儀ニ御座候処、是迄遷延

仕居、今更彼是申上候段、對

朝廷深ク恐縮之至奉存候、就テハ前件ノ次第、国家御

安危之界ニ付、幾重ニモ一身ニ引受、御断可申上奉存

候、右之情実篤ト御承知被為在、尚今一応被尽

朝議候様仕度、此段御尋ニ付、重テ

奏聞仕候、以上、

三月二十二日

慶喜

六七ノ五

一過日再考建言文中、且一旦取結候条約變更之儀ハ、所

詮難相叶事勢ニ御座候間、各国ヨリ申上候儀有之節ハ、

過日建言之趣意ヲ以、夫々申達置候事ニ御座候云々之

文面如何ニ候、何分

御沙汰有之候迄、必々開港差許候儀有之間敷、其段心得可有之旨、二条勅撰政殿被 命候事、

尤請書差出、可有之事、

右三月廿九日所司代へ達シ、早々可達大樹武伝ヨリ

申渡候事、

六七八 〔内田政風ヨリ大久保利通へ書翰〕

猶々今明日中ニは

御着船可被為 在と、御左右奉待上候、小印御取会

御争被為 在候由、爰元到て淋敷、折角不都合無之

様、心之及丈ハ奔走仕候事ニ御座候、何卒早目御帰

京可被成下候、別紙之末御召之処ハ、御文意段々不

同にて、一同御上京被成候様、亦候書替之由ニ御座

候、御揃之上なと、申様にてハ、甚手後れ之御事、

此節御召等之諸侯式拾四ヶ藩之よし、悉くその通ニ

候哉、夫等ハ能相分り不申、何分神世ニ御座候、そ

の通出没、心安く出来候ものニ候得ハ、心安キもの

ニ候得共、茶漬飯給候様ニハ到り兼可申、笑止之仕

合御座候、

朔日付之尊翰相届、難有拜見仕候処、弥以御安祥被成御滞坂、奉恐賀候、異人五ヶ国とも登城、大坂江商館取建之内決ニ付、地面等も見分爲有之哉之風評も御座候由、大樹登京も相分不申由申上置候、

朝廷より之御達如何

勅答可仕哉、いつれにも大樹か閣老か登京、形行言上可仕と奉存候、扱土州方御届書則差遣置候間、自ら御返答可申上と奉存候、右ニ付小笠原より遠武二面会之儀申越、昨夜脇方にて取会之處、御病氣ハ決てさして之儀にてハ不被爲在、全内場之儀にて、決て因循より事起り候儀ニは無之、余り熾ん過たる程にて、百姓迄も此節ハ薩と被仰談、

天日之光御周旋被爲在様候との事にて、勢ひも宜敷、乍併少々口にも申されざる儀候て、遷延可仕候へ共、十四五日方ニハ運立候儀無相違事ニ御座候、適々御結合申上、今更因循仕候様にてハ、実ニ天下之口を塞キ候儀ニハ到り兼候儀は眼前にて、夫等ハ御察可被下候、勿論重役間部榮三郎と申者、廿八日方ニ土江罷帰申候間、猶亦細々談合もいたし置候、同人儀到て正義家にて、聊掛念之儀も無之、乍併少々々々ても相延候儀ハ、甚汗

顔ニ絶兼候得共、返すく御麥約ニ罷成候儀ニハ無之候付、右等之事情も申上度との趣之由御座候間、真ニ其通にも可有之と存儀ニ御座候、口ニ難述との事、金策一条共にてハ有之ましく哉、大疲弊之趣も、ちらく承事ニ御座候、昨日申上候十津川深瀬仲磨を差下候儀ハ、小笠原か咄ニ一切無之、是ハ仲磨見立之様ニ御座候、余り拙策之儀と疑居候処、果して其通之事にて油断なり兼申候、御先ニ御帰京被成下候との儀故、其上細々御咄可申上候、猶亦於其御許土屋敷之説、御聞札可被下候、頭御使者御差立、御結之末之遷延ニ付、御延引之飛脚着候て、弁別いたしたる人を遣し申入候得ハ、能く相分儀候へ共、新留守居を遣候てハ、間違も生し候訳ニ御座候、昨日之御状小笠原江達候ハ、同人參るか、亦返翰遣スカ之ニツニ無御座候間、否早々申上候様可仕候、乍併所謂因循留守居と見限、応答いたしても、間ニ逢兼候と存候哉、御一笑実ニその通にて御座候、

一嶋正作一件、委細承知仕候、乍併遠武よりハ、何も承不申、只堅く引合置候ハ、薩ノ名を仮り候処ヲ止候様と迄之儀ニ御座候、何分御歸り之上、御咄承知可仕候、

一大原卿より参候様との事ニ付、今朝参上仕候、此節之御免、全薩初登京相成候ハ、直ニ右等之儀申立候儀ハ、相違無之との処より、速ニ御運ニ相成候由承候旨被仰聞候、御尤之御不審と存居申候、外ニ相変儀無御座候、

一弥被仰渡候通、中三日之

御滞坂ニ候て、御決定次第早々被仰渡候様仕度、何辺手当ニ差響候儀ニ付、訳て御願申上置候、

一幽閑御免御書付忝通差上申候、右之通乍毎、乱筆を以早々申上候、以上、

四月二日

内田仲之助

大久保一蔵様

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

六七九 〔松平容保ヨリ賜暇ニツイテ願書〕

丁卯四月

然ハ万不肖ノ身ヲ以、戌年中当職被仰付候以来、都合六ヶ年ニ罷成候処、右ニ付テハ、莫大ノ御下ケ星金ヲ被成下候義ニ候得共、兼テ内証逼致シ候、又タ昨年八月国許大火ニテ、城下過半焼失、加之非常ノ違作ニ

テ、当卯ニ穀迄ノ飯金ニモ差支候振合ニ有之、四民飢餓離散ノ程千万仕候仕合ニテ、自然人氣不居合、且永々ノ在京ニ付テハ、家中風儀モ相弛ミ、此節改革向ニ付テモ、頑固ノ習風、家来共計ニテハ、不行届ノ事柄モ有之、旁以罷下取締向手近ニ申付度、依テハ暫ノ間御暇被下置度、此節柄右様奉願候義、至極恐縮ノ義ニ御座候得共、内実不得已仕合御憐察ノ上、御許容被成下候様、此段宜御取成奉願候、以上、

四月

〔松平肥後守〕

右通飛鳥井様書記役塚本圖書ヨリ為知来候、日付ナシ、

六八〇 〔兵庫開港等幕府失政ニツイテノ意見書〕

六八〇ノ一

朝廷遵奉ノ道不相立、幕府年来ノ御失体不少、就中乙

丑十月三港条約

勅許ノ節、兵庫開港ノ儀

朝命ニ反シ、私ニ開港条約相成候儀、国内人心ノ折合ハ不及申、万国ニ対シ候テモ難相濟、次ニ長州御再討ニ付テモ、条理顛倒全妄動ノ筋ニ相当候故、不能遂其

功、半途ニシテ止戦ニ 御沙汰為相成儀ニ御座候、其
御被

奏聞候御書面中、畢竟諸事不行届ヨリ差越候儀ハ、於
私モ奉恐入候、依之罪ヲ

闕下ニ奉待候ト、 御悔心ノ御文言モ有之、実ニ御当
然ノ儀ト奉存候、然ルニ

朝廷ヨリ、御沙汰不被為在候ヲ、御黙止被遊候訳無御
座、何ク迄モ右御趣意被為立貫、 御謝罪ノ道不相立

候テハ、決テ相濟不申候間、將軍職ヲ被辞、一大諸侯
ニ下リ、諸侯ト共ニ

朝廷御補佐被為在候ハ、判然謝罪ノ道相立、御反正
ノ実跡初テ相顯レ、天下万民感伏涕泣ノ場ニ可立至奉
存候、

六八〇ノ二

丁卯ノ夏
何人ノ論ナルヤ不明

長防御処置於幕府四等之差可有之話

上

幕府ニテ誰モ不及建言前ニ悔悟反正、寛大ノ処置

朝廷江被仰出候末、施為相成候ハ、長防ハ勿論、拳

天下人心感戴悦服不啻候、

中

四藩ヨリ直ニ着眼之趣

大樹公及建言候時、実ハ兵庫燒眉急務、長防ハ跡ニテ
可然トノ御考候処、申上候儀如何ニモ順序条理の当ナ
リトテ、頓ニ御反省迅速被仰立云々相成候ハ、及建
白候面々ニモ、速ニ御採用難有可奉存候、且表通りハ
誰モ不致承知候故、從 幕府発表ト悦服可仕、

下

天朝ヨリ御書付被相下、四藩ニテ粉骨尽力及建言候テ
モ、兎角 幕府真ニ反正悔悟ニ至兼処、必死力ヲ以再
三數回論弁論説、ヨウ々御悔悟改テ不及歎願相濟候
ハ、反正悔悟御座候処、難有可奉存候、

下々

幕府へ竭必死力申出候テモ無採用候処、元根從
天朝御書付被相下候義ニ付、幕府ノ情態詳悉及
奏聞候ハ、殿下・鷹公・尹宮等ヲ以如何可有御座哉、
其他ハ滿

朝全意ニテ、從

朝廷寛典被

仰出様可相成、至此時候テハ、幕府ハ度外ニ相成、願

望スル人モ有之間敷候、

丁卯四月十六日

但煽動説

天朝ヨリ云々御施為相成ニ、所必候ナラ不及建言、以
前四藩云々ヲ以、御暇相願候ハ、可然歟、

六八〇ノ三

丁卯四月十七日

會津様
(松平容保、金澤藩主)

先帝叡慮遵奉、長々守護ノ職掌相勤、其功不少叡感候、
依参議被御推任、

議奏

廣橋様
(胤徳)

六條様
(有徳)

久世様
(通徳)

伝奏

野宮様
(定功)

右各依御所勞、御願ノ通御役被免候、今十七日ヨリ飛

鳥井家月番ノ事、

四月十七日

六八一 (結城筑後守ヨリ小松帶刀へ書翰)

尔来は久敷不拝鳳眉候、時下清和之節、益々御雄健奉
拜喜候、此度は

中将様御上洛被遊、誠ニ恐悦奉存候、先年も不存寄拜
謁被仰付候故、何卒此度も 御機嫌窺参 殿仕度と、

過日高崎氏江申出候処、

尊公様へ向相願候ても不苦之旨、且又存付之事件ハ、

内々建言仕候様ニと御申聞ニ付、素より愚意言上仕候

杯は、深恐懼仕候、方今御一大事之御時節、夫是之御

事柄御緊要と奉察上候得共、私輩ハ恐入、寸言不奉申

上候、乍併

朝廷之御規律も、御時勢ニ御随被為在、断然と 御良

謨を被定候ハ、私輩も誠ニ難有き御事と奉存候ニ付、

議奏所綱目等之事先年奉言上候儀有之、此度も、其辺

之御事柄少々条ニ認、内々差上置申候、甚恐多義ニ

御座候得共、自然

中将様御一覽ニ相成、其内ニても参 殿被仰付、右ケ

条之儀共、一応愚論

御聴取被為下候ハ、冥加至極之至、先年も蒙

御懇命候故、斯る御時節不憚卑賤右様之儀奉申上候段

ハ、幾重ニも、

御寛恕被遊被下候様、其内 御機嫌伺参 殿仕度、何分ニも尊公様宜御取成被為下候様、伏て奉願上候、恐惶頓首、

四月十六日

猶以今日別紙持参、委細拝顔ニ可申上心得ニ御座候へ共、御留守も難計、此書面相認封中差上置申候、御直披御一覽被下、不苦義と思召候ハ、

中将様江御内々御差出し被下度、左候ハ、誠ニ難有仕合奉存候、尤大久保君・大嶋君へハ御内話被下候て、宜候得とも、其他へハ何卒御秘シ被下候様ニ、呉々奉希上候、

此愚書御一読後、御投火可被下候、

帯刀様

御親展

筑後守

拝

別紙

一 御国政主簡易事、

一 諸社神祭之事、

一 賢才御挙用之事、

一 朝議奉行評定衆之事、

参議唐名宰相之事、

一 議奏所国史館之事、

綱目之事、

一 三公七卿之事、

一 知事親王之事、

一 称公儀事、

一 静寛院宮・輪王寺宮之事、

一 山城・近江武家領之事、

一 官版施行之事、

一 以上件々愚考一応奉達

一 高間度、不願恐内々言上仕候、

結城筑後守

拝

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

六八二 〔板倉外二名ヨリ飛鳥井・野宮へ書翰〕

丁卯四月

御書取之趣、大樹公へ入覧候処、別紙之通り被申聞候間、此段貴答候、以上、

小笠原——

四月朔日

稲葉

飛鳥井

野宮

板倉

別紙

過日再考

其段心得可有之候趣、承知仕候、右ハ追々申上候通、
条約變更之見据無之候間、各国ヨリ趣意相尋候節ハ、
其段相答候迄ニテ、御差許無之内、布告等仕候儀ニ
ハ曾テ無御座候、此段御請申上候、

六八三 〔西郷隆盛ヨリ大久保利通へ書翰〕

卷封

一蔵様

吉之助

貴酬

御懇書難有拜見仕候、陳ハ大・中二卿江順序區別之次
第ハ、委曲申上ニ相成候方可宜、乍然兩卿之参
内ハ、三藩之御不参ニテ六ヶ敷、又御進め申上候義ハ
出来不申訳ニ御座候へ共、兩卿之御決心ニテ、御参

内被為在度思食ニ候ハ、御止メ可申上訳ニ無之事ニ
御座候間、其辺ハ兩卿之御趣意ニ打任置候て、宜敷ハ
有御座間敷哉、何卒貴兄御氣張被下度奉合掌候、頓首、

五月廿三日

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

六八四 〔西郷隆盛ヨリ大久保利通へ書翰〕

卷封

大久保一蔵様

西郷吉之助

要詞

今日之離別会ニハ、是非可参含ニ御座候処、腹痛不相
止、難義いたし候付、何卒御助合被下度奉合掌候、将
又昨日後藤より承候趣も有之、参上委曲可申上相考居
候処、其義も不相調、背本懐候仕合ニ御座候、今朝大
夫江、詳悉申上置候付、とふそ御聞取被下度、是又乍
不成合以書中奉得御意候、頓首、

七月二日

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

六八五 〔宮中人事ニ関スル建言〕

丁卯五月

先帝崩御、

新帝御幼年、無此上

朝廷ノ御大難ニ御座候処、是迄深々御鴻恩ヲモ被為蒙
候上ノ御事ニ付、尚更黙止被為有候義難被為忍御情合、

前後ヲ不被為願、御登京被為在候義、全

朝廷ノ御為一筋ニ被思召候テノ御事、時態ハ早乱階ヲ
生シ、後來如何ノ御危殆ニ被為臨候モ難計、

朝威ハ日々衰弱ノ姿ニ押移、昼夜寢食ヲ不被為安御
勢ヒト成行、御歎息ノ次第ニ候、就テハ撰政ノ御大任

ニ、被為居候上ハ、御持定ノ御策モ相立居候筈ニ御座
候間、御開運ノ御定算ヲモ拝聴被為成、從來ノ御積悶

モ相排、御安心被成度段、縷々至誠ヲ以、初ハ御訊問
被為在度義ト奉存候、屹ト御大策相備居候ヘハ、無此

上御大事ノ御義ニ御座候間、速ニ御施行相成候様、得
ト御責被為在度、若ヤ御策モ相立居不申、只高位ニ御

安着共ニテ、全忠誠ノ御志モ不相見得、一向僥倖ヲ被
欲候位ノ御事ニ候得ハ、突然ト御策ヲ御聞取相成候テ

ハ、御驚怖弥増候計ニテ、可被施手段モ御失脚被為成
候程モ不被測義ニ御座候ニ付、一先御訊問ノ上、小事

ノ管見軟又ハ御無策ノ訳ニ候テ、大小寛急ノ弁能々御
心ニシミ入、大切ノ義ト被思食込、御醒悟被為在候様、
次第ノ上ケサセラレ候方、可宜義ト奉存候、

一 議奏・伝奏ノ御進退、

一 議奏衆ニハ、忠実ノ御方ト、智略有之候御方宅人ツ

、御拔擢有御座度義ト奉存候、

一 伝奏衆ノ義、義氣有之決テ節ヲ不変御方兩人程モ、

御登用相成度義ト奉存候、

議奏

〔実考〕 正親町三條様

〔公認〕 阿野様

〔忠實〕 醍醐様

〔博覧〕 萬里小路様

伝奏

〔光德〕 烏丸様

〔経之〕 中御門様

一 御補佐

〔実考〕 三條様

右三條様ニハ御禁錮中ニテ、決テ御登用難被為成、
夫ニ御格モ有之モノ故、一己ノ御見込ヲ以、御計出

来兼候トカ、又ハ

先帝ノ御機嫌ニ相触候処モ有之、御孝道ノ上御差障被為在候トカ、イツレ御拒被成候御言葉被為在候半、其節ハ委敷御弁明被為在度、此時勢ニ被為臨、人物ト被思食候ニ、御旧格ニ御拘被為在候義ニ無之、御政事革リ御一新被為在候処、第一ノ御格、只習弊ヲ以公論ヲ御破リ被成候義ニテハ、決テ不相濟訳ニ御座候間、私論ヲ捨テ、公平至当ノ御処置被為施候処、得ト御理解有御座度儀ト奉存候、
右兩条ハ

朝廷ノ御急務興廢ノ機、此時ニ御座候間、先ツ大事ノケ条ヲ以、御立貫被為在候ヘハ、是ヨリ万機ヲ生シ可申儀ト奉存候、大事件ノ間ニ小事相雜候テハ、必大事ハ輕ク相成候ニ付、今日ノ御尽力ハ、一向根元迄ヲ以、御至誠貫徹仕候処、偏奉渴望候、

六八五ノ二

伝奏

丁卯五月
小松見込

萬里小路右(實見)中弁卿
烏丸侍(光徳)從朝臣

議奏

中山前(忠能)大納言卿
正親町三條前(實感)大納言卿
中御門左中弁宰相(經之)
徳大寺(実則)中納言卿
大原前左兵衛督卿(重徳)

六八六 〔大原重徳ヨリ島津久光ヘ書翰〕

慶応三年丁卯五月

口述

訪人にあふよしハなしはつかしや
赤き心も何にゝかはせむ
つくす力たらされはこそ

訪人に答ふ辞もなミたなりけり
かくなりて思ひすてゝも

すてられぬ港といましめ都まもりを

兵庫港

帝都等の御警衛をわり、二句申候、御推察可被下候、
(マ)

扱もく無念なる事二候、

書添

御上京之御歎、御土産之御礼等、別ニ不相認御免被下候、

嶋津大隅守殿

重徳

〔嶋津忠承氏所蔵本にて校訂〕

六八七 〔相楽総三探索書〕

探索書

中山道探索之儀、此度追分ニテ戦争後、上田・小諸・美影・中ノ條・上州安中藩ニテ、旅人ヲ相調候ニ付、通行モ六ヶ敷、殊ニ追分之戦争ヲ聞、直様引返シ申候故、江戸表之儀ハ、不探索ニ候、尤跡ヨリ又候差立候間、帰リ次第委細御注進可仕候、甲州筋ヨリ、東海道箱根迄参リ候処、通シ不申、箱根ヨリ引返シ申候、右探索口書、左之通ニ御座候、

一 甲州勤番幕吏佐藤駿河守、町奉行若菜三男三郎、組頭鳥井敬之丞・一佐枝田左衛門勤 本ノマ 王ヲ唱候由、同組頭坂部良平、柴田監物等之部下ハ勤 王不承知之由、

一 当月十一日高松殿、甲府京安寺へ御止宿中、熊・土両

藩三人参リ、応接之処、

勅命ニ無之旨分明、夫ヨリ石和座迄御進ミノ処、討取ト申事ニテ、無余儀御引返シニ相成候事、

一 甲州筋代官共申合、当十三日比ヨリ、江戸表へ米穀運送トシ、鰍津へ五六千俵程、船ニテ下シ候由ニ候、

一 土・熊両藩ハ、十三日鰍津ヨリ下リ申候、唯一人甲府本陣へ残居候、

一 甲府ハ、武田氏ヨリ申伝之旨ニテ、両ニ四斗四升之米価ニ被成、下者ニ随従等申事申居候由、

一 江戸三番ニ於テ、三兵等議論候ト戦争杯イタシ、五六十人程歩兵高松殿へ付属致シ度旨ニテ、猿橋迄参リ候処、江戸ヨリ引留之者参リ、郡内天野伴蔵方ニテ、金策等イタシ引返シ申候、

一 高松殿内小澤雅楽之介ト申モノ、様々悪口イタシ候付、郷導隊之風聞不宜之由、働カ

一 上州筋諸藩共、皆當時両端ニ計リ居様見受候、

一 上州館林藩ハ、勤 王ヲ唱へ、官軍之来ヲ相待様子ニ候、

一 上州筋諸有志等、此駅ニ就候ヨシ、

一 上州岩ハナ陣屋木村甲斐守、密ニ農兵ヲ取立、専ラ防

禦之心懸ノ由、

一慶喜ハ紀州迄船ニテ参リ、夫ヨリ壳船ニテ、参州吉田
へ上陸、是ヨリ甲迄駕籠ニ乗り、主従十七人ニテ江戸
へ帰り候由、

一江戸市中ハ、庄内藩・新徴組等ニテ、嚴重ニ巡邏イタ
シ候由、

一江戸ヨリノ問者、何レモ坊主等ニ成、追々登ル由、

一上州前橋藩松平大和守ハ、東海道ヨリ上京之由、

一江戸大名・旗本共皆国々へ引取候由、

一東海道路途中ニヲヒテ、會藩ニテ相応ノ身分ノ者之由、

美服ヲ着シ、町人体ニ相成、主従四五人程、私共淺井

ナト、道列レニ相成、段々懇意ニモ相成候処、上方戰

争ハ全ク津藩本反覆裏切ニテ敗レ、怨ミ難忘、上方勢

参リ居候者一藩ニテ引請、屹ト所辱ヲ雪クト申居候、

一三嶋宿ニテ會藩宇藤曲之介トカ申モノトモ、同宿イタ

シ承リ候処、江戸ニ是非引受、屹ト此怨ミヲ報クユル

ト申居候、

一東海道路官軍報國隊ハ、廿二日比駿府着之由、

一油井・仲津之間、清水湊ニテ江戸廻送ノ米五六千俵程

モ見受候、

一十七日濱松ニテ、薩州御藩ニ私共問者之度ニ見出候間、

江戸邸ニ居候者之段申居所、帳面取調ニ相成候処、帳
面中ニ名前有之候ニ付、厚ク御饗応ヲ蒙リ、翌日出立
之節ハ、商人体ニテ切棒之駕籠御借被下候テ、相乗居
候故、旅人共側目致シ候、大笑仕候、

探索人ノ口書、右之通りニ御座候得共、猶委細ノ義

ハ、当所御着陣之節、御報知可被下候、

六月廿六日

相築^{符護}総三

六八八 〔西郷隆盛ヨリ大久保利通へ書翰〕

只今別紙之通相廻来申候、好機会之事ニ御座候、速ニ

上坂可有之義と奉存候、如何、

一先刻毛利恭助参、兵之助^{山内盛徳}公子御病氣ニ付、帰国御暇御

願出被成度、御存寄ハ有之間敷哉、尤宇和島江御相談

申上候処、

君公江被仰談可被成候間、此御方江も申談置候様との

趣承候付、後藤氏よりも、只今御在京之人數ハ、御引取

候哉、御引替被成との趣も承、右之御手数ニ相運事候

へハ、却て可宜と申置候、勿論宇和島より何と欵御申

入被成候半と相考候付、早速御前江ハ、右之趣申置候、
委細ハ明朝御直話可仕候、頓首、

七月廿四日

〔包紙也〕 大久保一藏様

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕
西郷吉之助

六八九 〔西郷隆盛ヨリ大久保利通へ書翰〕

巻封

大久保一藏様

西郷吉之助

用向

御建白書等之もの見合相成分ハ、柴山江讓置候付、定
て持参いたし居候事と相考申遣候処、荷物江入付置候
処、長崎より

御国元江差廻、爰許江ハ不参由承候付、何卒心得ニ相
成候様之ものハ、思食を以為書写、御遣被下度伏て奉
願候、今七ツ時分より、出立之賦ニ御座候間、其内何
卒奉願候、間ニ不逢候ハ、跡より兩三日中ニ、御遣
し被下候ても宜敷御座候、将又神戸ニおひて、大極丸
水主人殺之一条、今朝石川方より返事参、望月清平・
毛利恭助之両人、今晝より下坂いたし候由にて、大坂

にて引合可有之との趣申越候間、いつれ大坂にて談合
いたし、宜敷取計可申候付、大夫江も、其段申上置可
被下候、此旨乍略義以書中奉得御意候、頓首、

七月廿五日

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

六九〇 〔毛利敬親父子ヨリ島津久光へ書翰〕

丁卯七月廿六日

一柬拝啓仕候、秋暑之節、先以御清宇御滞京可被為在
と、珍重奉存候、扱当春已来

皇威御回復、

朝政御基本凜然立させられん為、頗被為尽御誠力不堪
欽慕、しかのみならず敵国之事件迄も、屢預御建言、
奉感佩候、近頃

禁中之御様子、遙于謹聞仕候得は、恐こくも

新帝御幼冲被為在候処、於幕府も更ニ反正之行無之趣、
いかにも痛哭悲歎之至御座候、就ては不一形御苦心可
被為成と、奉想像候、はた防長之義、斯まで御周旋被
成下候は、実以望外之仕合御座候、然とも千一も其辺
よりして、

神州之紛乱ニ立いたり候ては、奉対

天朝、人臣之職片時も不安候得は、生等一身之上いかに相成候も、素り遺憾無御座、只管政權掃

上、万民安悦仕候様有之度奉祈願候、是父子之宿意御座候間、此所深御含置被下、弥御励精御尽忠あらまほしく奉依頼候、又頃日

御所之御模様、前途之御目的等不苦事件、詳悉被仰聞候は、幸甚之至奉存候、書余賤价より御了承可被下候、先は春來之謝礼旁如斯御座候、恐惶謹言、

文月廿六日

〔島津久光〕
中将君

玉床下

二伸、為

邦家別て御加養奉專念候、毎々御家臣被差寄、貴地之形勢御報知被成下、奉感銘候、此品乍菲薄差出申候、聊当節御尋訪之寸衷のミ、御嘲留奉冀候、

頓首

〔島津忠家氏所藏本にて校す〕

六九一 〔西郷隆盛ヨリ大久保利通へ書翰〕

今日ハ御塩梅如何御座候哉、漸々御快方とハ相考候得共、折角御加養被成下度奉合掌候、別紙昨夜到来いたし、大夫江も入御覽候て差上候間、御覽可被下候、以上、

西郷吉之助

十月三日

大久保一蔵様

〔大久保利謙氏所藏本にて校す〕

六九二 〔島津久光・同茂久へ會津・桑名誅伐ノ御

沙汰書〕

〔松平春徳氏
會津宰相
〔松平定敬〕
桑名中将

右二人久滞在輦下、助幕賊之暴其罪不輕候、依之速可加誅戮旨、被仰下候事、

忠能

十月十四日

實愛
經之

〔島津久光〕
薩摩中將殿
〔島津久光〕
同 少將殿

右ノ上包

中山前大納言忠能卿

正親町三條前大納言實愛卿

中御門中納言經之卿

ヨリ

御沙汰書

薩摩中將殿

同 少將殿

江

〔島津忠承氏所藏写にて校訂〕

六九三 〔島津久光・同茂久へ討幕ノ密勅〕

左近衛權中將源久光

左近衛權少將源茂久

詔源慶喜藉累世之威、恃閭族之強妄賊害忠良、教棄絶

王命、遂矯

先帝之詔而不懼擠万民於溝壑而不顧罪惡所至、神州將

傾覆焉、朕今為民之父母、是賊而不討何以、上謝

先帝之靈、下報万民之深讐哉、此 朕之憂憤所在、諒

闇而不顧者万不可已也、汝宜体 朕之心、殄戮賊臣慶

喜、以速奏回天之偉勲、而措生靈于山嶽之安、此

朕之願無敢或懈、

奉

慶應三年十月十三日

正二位藤原忠能

正二位藤原實愛

權中納言藤原經之

右上包

詔書

左近衛權中將源久光

左近衛權少將源茂久

江

〔島津忠承氏所藏本にて校訂〕

六九四 〔徳川慶喜ヨリ將軍職辞退ノ奏聞ト御沙

汰書〕

十月廿七日二條

御殿ニオイテ、大目付松平大隅守殿ヨリ御渡、

臣慶喜、昨秋相統仕候節、將軍職之義固ク御辞退申上、

其後厚蒙

御沙汰候ニ付、御請仕奉職罷在候処、今般

奏聞仕候次第モ有之候間、將軍職御辞退奉申上度、此
段奏聞仕候、以上、

十月廿四日

諸藩上京ノ上、追テ可有 御沙汰、夫迄ノ処是迄ノ
通相心得候様、 御沙汰候事、

六九五 〔批紙〕

十二月廿二日伝・議ヨリ御渡

一幕府ヨリ、御伺八ヶ条之事、

御附紙

右八ヶ条、御召ノ諸侯上京ノ上、規則被立候得共、
夫迄ノ処、是迄ノ通可心得事、

但当地三ヶ月詰并口々御固メ大名割ノ一条ハ、是

迄ノ手続キニテ取調、於申渡ハ両役取扱ノ事、

一五卿上洛ノ事、

同、自然上坂候得ハ、諸侯上京迄ノ処、於浪華滞

留ノ事、

但從

朝廷可申渡候事、

一外国ノ事、

同、召ノ諸侯上京ノ上、御決定可相成候得共、夫
迄ノ処、差向候義有之候得ハ、諸侯上京迄、差延
候儀、外国ノ情ニ通候両三藩卜申合セ可取扱事、

六九六 〔小河傳右衛門以下処分一件〕

御納戸頭裏判兼帶

大一等ノ姦

押隠居

小河傳右衛門

太宰府受持

右同役

放役

大塚七右衛門

同役

放役

山崎権大夫

同役

放役

小河縫殿

放役

家老

引入

黒田 美作

依願退役

浦上 數馬

同

下ケ札

定之上御兩役を以被 仰出候義ニ御座候哉、

尤於重事は、尽衆議候上取扱之事、

尋常小事は、直ニ取扱之事、

支配地と之御文言、

山城国其他、御領所之儀ニ御座候哉、又は徳川領地

を被 仰出儀ニ御座候哉、

下ケ札

支配地之儀は、

禁裏御領所之儀ニ候、

十月十七日

松平備前守

家来江

六九七 〔慶喜へノ御沙汰書ニ対スル伺書一〕

六通ノ内

一昨十五日被 仰出候御別紙之内、尽衆議と之御文言、

召之衆諸侯上京之上公議を被為尽、差掛候儀は詰合諸

侯・諸藩士等ニ会議被 仰付候儀ニ御座候哉、

下ケ札

書面之通

諸大名同被 仰出等は、於兩役取扱候との御文言、

諸侯より御兩役江同差出候節は、衆議を被為尽、御決

六九八 〔口上覚〕

十月廿日

〔改訂肥後藩園事史料にて校訂〕

口上之覚

御用之儀有之候間、明廿日巳刻無遅々

禁裡御所仮建所江、重役留守居家来之内参上可有之候、

此段可相達旨両伝被申付候、以上、

十月十九日未刻

両伝奏雑掌

御次第不同

紀伊様

尾張様

加賀様

越前様

阿波様

安藝様

立花飛驒守様

南部美濃守様

松平三河守様

御留守中

追テ刻付ヲ以御廻覽、日野家江御返シ可被成候、以

上、

左ノ件々伝奏ヨリ御口達畢テ、御書取御渡シニ相成、

六九九 (慶喜へノ御沙汰書ニ対スル伺書二)

召之諸候上京迄之処、取計向伺候廉々

一当地三ヶ月詰并口々御固メ大名割、御両役ニテ御取調

ノ上、夫々江御達相成候哉、又ハ是迄ノ手続ニテ取調

申上候テ、達シ方ハ御両役ニテ被成候哉、

一禁裏御料并御入用筋ノ儀、御料所向ハ小堀數馬ニテ取

計、御入用筋ハ是迄ノ通ノ取扱ニ仕置可申哉、

一大宮御所御造立、御入用国役金ノ儀ハ、已ニ達済ニハ

相成候得共、此後収方等取扱ノ儀、是迄ノ手続ニテ可

然哉、左候ハ、其段諸大名江、御両役ヨリ御達有之様

致度候、

一五街道脇往還宿々人馬ノ義、先ツ是迄ノ通被成置候儀

ニ御座候ハ、其段御両役ヨリ御国中江御触達相成候

儀ニ可有之哉、

一山城・大和・近江・丹波四ヶ国、并ニ撰家・宮門跡・

堂上方御家領、其他寺社領、大名領分江關係致候公事

出入、京都町奉行所ニテ取扱来候廉々ハ、是迄ノ通取

扱、呼出等ハ其主人ノ江掛合ニ及可申哉、

一刑法ノ儀ハ、

召ノ諸侯上京ノ上、御取扱可相成ト存候ヘトモ、夫迄ノ処仕来ノ通ニテ宜敷哉、

一 所司代戸田大和守、御附兩人勤向ハ、是迄ノ通ニテ宜敷候哉、

一 兵庫開港ニ付、金札通用ノ儀ハ、町人・百姓融通ノ為ニト申上濟ニテ、出来相成居候間、通用相成候様仕度、

十月廿日

一 近々上坂ノ聞有之候（実美以下）脱走人ノ事、

一 外国ノ事、

右尚 召ノ諸侯上京、公論衆議ノ上、御決定ニ相成候ヘトモ、先差向取扱ノ処、尋被下候事、

今日被尋下候件々ハ、明廿一日中両役ノ内江、必返答可有之事、

一 明後廿二日

御用ノ儀有之候間、今日ノ通巳刻可罷出候事、

十月廿日

右ニ付三藩申談ノ上、左ノ通御返答書薩藩内田仲之介ヲ以、議奏ヘ差出候事、

七〇〇 〔三藩返答書〕

今般、幕府政權ヲ

朝廷ヘ奉還仕候次第、誠ニ以復古ノ御大業、數百年来ノ英断ニ御座候テ、

御国体御変革、宇宙間ニ

御独立可被遊御基本ニ候得ハ、微賤私共迄モ、深ク天下之為メニ、奉恐悦之候、就テハ衆庶議事之意ヲ以、

諸藩士共被

召出、廉々御下問被

仰付候儀ニ付、謹テ奉言上候、

一 徳川家取扱掛ノ廉々、當時伺書之通被

仰付置、

召之諸侯會議ノ上、御確定被遊、可然哉ニ奉存候、

一 脱走公卿方、近々上坂之聞ヘ有之候趣ニ御座候ヘ共、

推テ右等之次第ニ相成儀ト有之間敷、

召之諸侯會議初発ニ

御裁断被

仰出、長防御処置同時相成、可然哉ニ奉存候、

一 外国取扱之儀ハ、暫時越方之通ニ被聞、

召之諸侯會議之上、
皇国一体ヲ以、

朝廷之御条約可被為結、尤兵庫開港之處ハ、今般大改
革ヲ以、

国体變換之次第、談判ニ及被差延候テ可然哉ニ奉存候、

右件々當時在京仕居候三藩之者共同意仕候ニ付、乍

恐連名ニテ申上候、尤書外猶又口舌ヲ以、言上可仕

候、誠恐誠惶頓首謹言、

丁卯十月廿一日

松平修理大夫内

關山 紘

松平安藝守内

辻 將 曹

松平土佐守内

後藤象次郎

福岡 藤次

神山左多衛

七〇一

〔大山綱良ヨリ小松帶刀・桂久武へ書翰〕

〔番号五五六と同文により削除〕

七〇二 故篠崎彦十郎履歷

一 故篠崎彦十郎、姓ハ橘、名ハ仲苗、旧藩士名越彦大夫

二 男、文政九年戌六月三日出生、文政十三年寅十一月

五歳ニシテ、叔父篠崎藏太左衛門ノ相続人トナリ、幼

名ヲ金次郎ト云ヒ、後彦十郎ト改ム、

一 弘化三年午十二月、中小姓被申付、翌年三月世子齊彬

公江戸へ御帰府ニ付、随從シテ出府ス、

一 嘉永二年酉三月、太守齊興公御下国ニ付、随從帰国ス、

一 全三年戌八月、太守齊興公中山王使者被引連御出府ニ

付随從、翌四年亥五月、太守齊彬公御家督初メテ御下

国ニ付、随從帰国セリ、

一 全年七月新番被申付、

一 全五年子八月、太守齊彬公御参府ニ付、随從シテ出府、

一 全六年丑四月、於江戸御馬廻被命、

一 安政二年卯四月、於江戸御供目付被命、役料米四拾八

俵下賜、

一 安政四年巳四月、太守齊彬公、澁谷邸ヨリ御下国ニ付、

随從シテ帰魔ス、

一 萬延元年申三月、太守忠義公御参府ニ付随從シ、筑後

国松崎駅ヨリ御帰国ニ付、同シク帰麿ス（此際榎田御門騒動アリ）

一 全二年酉二月、江戸詰被申付芝邸へ相詰、文久三年亥ノ春（月日ヲ失ス）、任満チテ帰麿ス、

一 三郎公朝廷ヨリ被為召、文久三年亥九月、御上京ニ付（久光）隨從シテ、京都二本松邸へ相詰居候処、全年十月十六日至急ノ御内用ヲ以帰国ス、

一 全年十一月八日、貞姫君近衛右府公へ御入興ニ付、隨行シテ出京、又二本松邸へ相詰ム、

一 文久四年子正月十一日、於京都御作事奉行被命、勤方（久光）從前ノ通、全年二月惣髮成ノ許可ヲ得、

一 元治元年子四月十八日、中將公御帰国ニ付、隨行シテ帰麿ス、

一 慶應元年丑三月廿八日、筑前大宰府滞在五卿方（故三条実美公初メ）警衛ノ命ヲ蒙リ、物頭ノ場ニテ部下一同

差越、諸事警備周旋シ、全年七月廿五日該地交代帰国、然ルニ間モナク、再宰府へ御内用ノ命ヲ受ケ差越ス、

（之レハ、三条公或ル御事情ニ依リ、筑前侯へ御依頼ノ筋アリ、至急召還サレタル由ニ聞ク）凡滞在二三ヶ月ニシテ帰

麿ス（月日ヲ失ス）

一 慶應二年寅九月廿日、江戸御留守居被命、役料米千五百俵、妻子養料米七拾五俵、下賜ノ命アリ、同年十月十五日發途、江戸芝邸へ相詰ム、

一 然ルニ、頃ハ幕府大政奉還ノ前後ニ際会シ、關東地方ハ稍隔絶シ、委細ノ景況ヲ聞クコト能ハス、而シテ慶應三年卯十二月廿五日未明、江戸市中取締酒井左衛門尉其他譜代大名拳兵、芝邸ヲ取囲ミ、浪士ノ探索嚴酷ナリ、彦十郎单身死地ニ陥リ、周旋奔走至ラサルコトナキモ、終ニ西門外松本町ノ辺ニ於テ、敵人ニ殺害サレ畢ル、

于時年四拾三、芝伊皿子大圓寺内ニ、部下死者ト共ニ葬ラル、

一 扶持米七拾五俵

右明治二年巳十一月、藩庁ヨリ家族へ下賜、十二年四月丙金禄公債証書三百七拾五円ニ引換下賜アリシ、

一 明治廿五年四月、靖國社へ合祀被仰出候旨、本県知事山内提雲ヨリ達ヲ受、

右之通相逢無之候也、

故篠崎彦十郎実弟

鹿兒島市清水馬場町九十番戸

士族商

明治廿五年七月

名越高温印

同四辰歳正月十九日

一、江戸獄中自殺ス、

右之通

明治廿五年九月

七〇三二〔柴山良助履歴〕

七〇三ノ一
略歴

柴山良介(道徳)

天保五年歳二月廿八日生

七〇三ノ二
柴山良介略歴

良介(幼)、姓藤原、実名道懿、鹿兒島県士族柴山良庵(庵)之長男、

嘉永五年歳本ノマ、

一、江戸ニ遊学シ、諸国ノ志士ト交ル、

天保五年歳二月廿八日鹿兒島ニ生ル、為人正毅誠実、幼年嗜武術、二十有五歳始遊学于江戸、汎諸国志士ニ交ル、

文久三亥歳

一、京都守衛兵トシテ上京ス、

常勤王志不浅、文久三年四月故左大臣島津久光公始朝於京師随、為京都守衛兵上京列後隊、時実弟愛次郎為義挙死

同

一、依藩命帰国ノ後謹慎ス、

于伏見駅寺田屋、良介為ニ被命帰藩、帰家之後、依藩命挙家蒙謹慎、元治元年八月、生麥之變起ル、英艦襲鹿兒

元治元子歳八月

一、英艦鹿兒島ヲ襲ヒ開戦出陣、被賞其志謹慎解除、

島終開戦ス、良介身雖在謹慎中、不忍傍視国難、便整戎装馳加軍、至事平定後藩主賞其志之忠実、解除謹慎、慶

慶應二寅歳

一、江戸藩邸留主居添役被命赴任、

應二年、任江戸藩邸留主居添役赴江戸、其実大久保利通之内命、為江戸表視察也云尔、同三年夏由藩命赴京都、

同三卯歳夏

一、藩命ヲ以京都へ出張後、再江戸表へ出張、

時既 王政維新之期迫矣、再赴江戸、同年十二月廿五日幕府令會津・庄内二藩兵困我藩邸、且砲撃之邸内、在宿

者留主居以下僅十有余名、不知其幕府処置為何故也、在

邸者議曰一死固輕、不如寧開邸門從容入敵陣、幸得避砲丸、達敵陣則懇諭大義名分、且詰當政權奉還之日、不俟朝命恣砲擊藩邸、暴挙而若得万死中存一命、幸具事実於朝廷公然彈幕府罪科、議決於是在邸者数名各定部処突出於四門、此時途中有触砲丸墜命者、或幸有達敵陣者、良介与南部彌八郎氏達敵陣、即大論難其暴挙、庄内兵直縛二人送致于獄牢、後屢受幕吏糺彈、良介固心所望故、從容自若說大義、詰其暴挙抗論不止、如此數回良介宿望既達矣、今也察難免其死、予所隱匿短銃于懷中自殺於牢中、維時慶應四辰歲正月九日也、享年三十有五歲、幕吏收遺骸埋兩國回向院、此月京師伏見・鳥羽之戰爭起、其実薩邸燒撃之暴挙、大促徳川慶喜反意之時、下勅討徳川氏、官軍東征賊兵連敗、官軍既迫于江戸、実弟矢八列官軍到江戸、徳川慶喜恭順、請罪事稍平矣、依囑勝安房守領良介遺骸、將改葬焉、大総督宮參謀西郷隆盛曰、其死固為國家、豈与官軍戰没者有輕重哉、即依命同官軍戰死士、葬于高輪大圓寺、

明治廿五年九月

実弟海軍大佐正五位勲四等柴山矢八記

(のち海軍大将、男爵)

七〇四 〔白石周一願書〕

願書

士族

亡 白石彌左衛門

天保七年申三月廿八日生

一慶應三年卯十二月廿五日、江戸芝薩摩御屋敷御門外ニテ、砲丸ニテ死ス、尤其節ハ御手船蒸氣船翔鳳丸船長、江戸表江廻船中、一死亡年三拾二歳

右之通取調差上申候間、可然様御取成可被下候也、

鹿児島県下鹿児島市

荒田村百四拾三番戸

明治廿五年八月六日 相続人白石周一印

七〇五 〔島津茂久親書 十一月十八日〕

慶應三年

一時機変遷シテ、処ス不可ニ於テハ細密復考、其宜ニ叶候様取計緊要之事、

慶応3年(1867)

一兼テ定置候通、勅諭ヲ奉戴シ、条理名分ヲ正シテ、輕
挙無謀ニ不陥事、

一機密四方ニ露頭セシ由ニ付、尚深ク廟議可入念事、
右委細之義ハ、篤ト黒田嘉右衛門へ申付置候事、

七〇六〔毛利元徳親書〕

慶応三年

一至尊ヲ奉守護候事ハ、申モ乍疎、大事ニ付精々遂心配、
十分手筈ヲ合、遺算無之様肝要之事、

一此度之義、実以 皇国之一大事ニ付、此方出先之者ト
モへ氣付筋有之節ハ、万端存分ニ教示之儀相願候事、

七〇七〔薩・長・藝約定書〕

慶応三年

一三藩トモ浪花根拠之事、

一根拠守衛、薩藩二小隊へ長・藝之内相加候事、

一薩侯御一手ハ、京師ヲ專任トス、

一長・藝之内一藩京師ヲ応援ス、

一薩侯御着坂廿一日ニテ、廿三日御入京、廿五日三田尻
出浮之兵出帆、廿八日西ノ宮着、薩藩ヨリ 京師之模
様報知之上進入之筈、

一〇之義ハ、山崎路ヨリ西之宮へ脱、詰リ藝州マテ之事、

七〇八〔朝議達〕

慶応三年十二月

一大政御執行ニ付テハ、外夷事件、於

朝廷御処置被遊候ハ勿論、且重大急務之筋ニ付、此間
中段々御沙汰モ有之候得共、其廉モ未行、実ニ一日不
可忽之次第ニ付、別紙之通徳川内府江、被 仰下候儀
ニ御確定候、此段 御沙汰候、併猶所存之趣モ候ハ、
言上可有之事、

但外国事務掛初メ夫々其人体、不日可被置候間、是
亦心得迄申入候事候、

七〇九〔大久保・西郷・岩下ヨリ岩倉へ提出シタ

ル案文〕

一政權返上、被聞 召候上ハ、外国交際之儀、於

朝廷条約 御取結可被為在候儀、当然ニ候間、百事

御治定之上、猶御談判之品モ可有之、差当

王政ニ被復候御廉、御布令被遊度 思食候ニ付、兵庫

滞留各国公使 京地江御呼登相成候間、是迄手續モ有

之事候得ハ、各国公使上京候様、可申達

御沙汰候事、

但日限之儀、来ル十日限上京候様被仰付候、御受之

届早々可有之候、

七二〇 〔某日記〕

十日雨天、近説江戸ノ事、慶喜殿西丸ヨリ上野へ寺蟄

居ニテ、江戸中謹慎ニテ、伏罪ノ由候、且ツ御老中ノ

儀ハ、小笠原壹岐守一人ニテ、外大名ノ役目ハ惣テ廢

候、左候テ銘々国元へ差歸候由、実ニ神妙ノ処置ト申

事ニ候、肥後天草ノ事以前ノ通り、細川家へ御預ケ相

成候由、細川ノ気感心ト申事ニ候、